ISSN 2423-9763

東京国際大学論叢

人文・社会学研究

第9号

論　　文

モンゴル児童養護施設出身者の「自場」の形成過程
——施設退所後の暮らしを追って—— …… 植村　清加…… 1
田村　愛理
村井　美紀

高齢者のワーキングメモリを測定する
——日本語版リーディングスパンテストを開発した
苧阪満里子へのインタビューから—— …… 高砂　美樹…… 35
名取　洋典
鈴木　朋子

中国語の語彙について
——新語・流行語をめぐって—— …… 瀬戸口　勲…… 51

研究ノート

初中級日本語学習者との接触場面における母語話者の発話調整行動
——「会話パートナー」活動でのやりとりから—— …… 久保　亜希…… 69
篠崎　佳恵
柴田　　冴

２０２４

東 京 国 際 大 学 論 叢

人 文 ・ 社 会 学 研 究

第 9 号

モンゴル児童養護施設出身者の「自場」の形成過程
――施設退所後の暮らしを追って――

植　村　清　加
田　村　愛　理
村　井　美　紀

Forming “Self-Sufficient Places” in Ulaanbaatar: A Case Study of Mongolian Young People from Children’s Home

UEMURA, Sayaka
TAMURA, Airi
MURAI, Miki

Abstract

This research presents the process of establishing “Self Sufficient Places (we named “*jiba*”)” of Mongolian urban young people who used to grow up in Ulaanbaatar Children’s Home, through collaborative research of social welfare study and cultural anthropology. After the democratization in the 1990s, Mongolia experienced a rapid transition from socialism to a liberal economic system. As a result, many people lost their jobs and were left in impoverished situations. Especially many children were exposed to difficult social situations and some of them were sent to the Children’s Home.
Our research has focused on those young people. The characteristics of our research can be summarized as follows. 1) We consider these people not as people who receive support passively, but who can make their survival places actively. 2) We examine the process of forming “*jiba*” through people’s life histories, spanning a quarter of a century. 3) We present their self-build flexible living spaces in the Ger-district in Ulaanbaatar as cases of forming of *Jiba* process.

キーワード：社会変革期，児童養護施設出身者，「自場」形成，ゲル地区，協働

目　次

はじめに
第I章　モンゴルの児童養護施設の子どもたち
1.「死」と「生」
2. 子どもたちのエネルギーに触れる
3. 支援者ツェツェグジャルガルさん（仮名）
4. 働く子どもたち
5. 施設退所後の子どもたちの逞しさ
6. アンケート調査の実施
第II章　ウランバートル市の都市化過程とゲル地区への視点
1. ゲル地区の成り立ち
2. ゲル地区の現状
3. 新興住宅地としてのゲル地区：日本の戦後公営住宅（戸山ハイツ）と比較して
第III章　児童養護施設退所後の暮らしを追う
1. 転換期のモンゴルと児童養護施設
2. 幼少期の記憶：児童養護施設に入る前の状況と退所時の状況
3. 都市の隙間にスルっと入る
4. よりよく生きる
5. 協働的に紡ぎ出される「自場」
おわりに：アンケートと現地調査からみる児童養護施設出身者の分析

はじめに

本研究は，モンゴルのウランバートルにおいて幼少期を児童養護施設で過ごした若者たちのライフヒストリーを通じて，彼らの「自場」の形成過程を探るものである。「自場」とは，「自分の生きる場」を表す本研究チームの造語である。本論文では，児童養護施設出身の若者らを，彼ら自身で「自分の生きる場」を選択し，形成していく能動的な「生活者」と捉える。

1990年代に激甚な社会変革を経験したモンゴルでは長らく，転換期に路上に投げ出された子どもたちを取り巻く社会問題が注目されてきたが，施設退所後の子どもたちのフォローアップデータがなく，彼らの追跡調査を行った先行研究は極めて限られてきた。[1] そのような研究状況は，結果として彼らを支援対象としてのみ捉えることにつながっている。本研究は，若者たちの幼少期からのライフヒストリーと現在の生活実践に注目し，彼らの生活者としての可能性や，彼ら自身で，または周りの人びとと協働で「自律して生きる場所」を創り出す力の要因と過程を探る試みである。

本論文は以上の問題意識から出発した社会福祉学，歴史人類学，都市人類学の共同研究の結果であり，その特性を活かして，以下の構成で各章ごとに分担執筆した。第I章は村井が担当し，モンゴル社会変動期の養護施設出身者の退所後の生活を調査する本研究の背景となる過去20年の経緯と研究動機を語る。第II章は田村が担当し，養護施設出身者の多くが現在居住していて，一般的には後発貧困地帯とみなされているゲル地区の実情を考察した。さらにゲル地区に対する客観的な視点を得るために，敗戦直後の日本の公営住宅地域と比較し，ゲル地区に対する外部調査者としての私たちの視点の定め方を提示した。第III章は植村が，養護施設出身者へのライフヒストリーと彼らの生活空間であるゲル地区での調査をもとに，その具体的な生活様態や生活戦略，生

活において柔軟に形成される社会関係と空間実践について考察した。最後に，アンケートおよび現地調査に関する筆者らの考察結果をまとめた。

第I章　モンゴルの児童養護施設の子どもたち

本研究は，筆者・村井のモンゴルの児童養護施設との20年にわたる付き合いに端を発している。本章では，この間の施設訪問の際に経験したことやモンゴルの人々との付き合いを紹介することにより，本研究に至った経緯と研究動機を語る。

1.「死」と「生」

筆者とモンゴルのかかわりは約20年前からになる。当時，筆者は乳がんになり，手術後の療養をしている最中であった。幸い乳がんのほうは早期発見により，手術後3年間の放射線治療と抗がん剤による治療を続けることになった。病後の治療は順調に進んでいたが，精神的には病気とその後につながる「死」と向き合うことになることに「畏れ」を抱きながら療養生活を送っていた。

その時，突然モンゴルに行きたくなった。モンゴルは，幼少時から身近に感じられる国であった。筆者は岩手県盛岡市で生まれ育った。盛岡市には，第二次世界大戦前に日本にわたってきた朝鮮半島の人々がいた。その方たちとともに，医学を学ぶために来日したモンゴル人の方がおり，筆者の父はその方たちと交流があった。モンゴルから留学に来ていた方は，戦後国交が断絶して帰国できなくなり，医者としての資格も認められずに，洋裁の技術で暮らしていた。筆者はその方の仕事場にお邪魔し，その方の洋裁の手さばきを飽きずに眺め，そしてモンゴルの風土や文化について話を聞かせてもらっていた。日本でもなじみになっている『スーホの白い馬』という絵本もその方から教えてもらった。

それから30数年後，乳がんと向き合い，「死」への畏れを抱きながら，モンゴルの空や草原，そしてそこで暮らす遊牧民とたくさんの家畜などから「生」のエネルギーを感じとれるのではないかと思い，モンゴルへ行ってみたいという気持ちが高まっていったのである。

2. 子どもたちのエネルギーに触れる

求めよ，さらば与えられん！モンゴルに行きたいという気持ちを周囲に訴えていた時，友人からモンゴルツアーの話が寄せられた。Y教授の主催するグループで7泊8日の旅であった。そのツアーが，どのようなツアーであるのか知らずに，ただモンゴルの草原と青空，モンゴルの風に包まれることを期待して参加したのであった。2002年の夏のことである。

モンゴルツアーに参加して初めて知ったのだが，プログラムの中に，モンゴルの養護施設見学と，社会福祉を学ぶ学生たちとの交流があった。モンゴルの学校の夏休みは6月から8月までの3か月間で，施設の子どもたちはその間，避暑地の草原で過ごす。ウランバートルから車で3時間余りで着いた草原に，200名余りの子どもたちが迎えてくれた。みな顔立ちが日本人と同じようで，初対面なのに懐かしさを感じた。

彼らが寝泊まりしているバンガローは，3，４台のベットが置かれ，窓にはカーテンもなく，裸電球が一個ついているようなものだった。そのようなバンガローが点在する草原で，筆者は洗礼を受ける。トイレだ。トイレというにはあまりにも原始的で，穴に板を渡しただけのところで，囲いも十分にない「便所」。躊躇している筆者に，子どもたちは身振り手振りで使い方を教えてくれた。怖気づきながらなんとか用を足した筆者に，子どもたちは笑顔を向けてくれた。

20年余り前の施設は，貧しかった。幼児たちは，お仕着せの同じミッキーマウスのTシャツを着ていた。夏の間は裸足でいる子どもたちもいた。施設長は，毎日1頭の羊を食事に用意するのに苦労していた。それは第二次世界大戦後の日本の施設の状況と似ていた。

しかし，子どもたちは元気だった。筆者たち訪問者は，小さな講堂に招きいれられた。そこで子どもたちは，モンゴルの歌や踊りで歓迎してくれた。安室奈美恵風のダンスも踊ってくれた。自分たちでテレビを見て覚えたという。そのエネルギーに圧倒された。そこにいるのは，7，8歳から18歳までの子どもだが，当時はそのほとんどがマンホールチルドレン[2)]だった。育ち盛りの彼らの体格は，日本人のそれと比べて4，5年のギャップを感じた。モンゴル人の一般的な体格は，男性だと180センチくらい，女性もすらっとした身長がある中で，低身長，低体格であるのはハンディになる。しかし，小さな体を力いっぱい使って踊る，そんな彼らのダンスは，言葉は通じないが時に優雅に，時に激しく，見ている者の内面を揺さぶるようだった。そこには，彼らが放つ「生」へのエネルギーが満ちていた。

3. 支援者ツェツェグジャルガルさん（仮名）

我々のモンゴルにおけるフィールドワークで通訳をしてくれたのはモンゴル人のツェツェグジャルガルさん（以下，ツェツェグさん）という現在60代半ばの女性である。彼女は，大学卒業後結婚して二人の子どもを育てながら小学校の教員をしていたが，モンゴル国費留学生に応募し，日本の大学で2年間日本語を学んだ。帰国後は，日本の社会福祉学者であるI教授の専属通訳者として働き，その後を継いでモンゴル国立教育大学の非常勤講師となったY教授の通訳も務めた。

Y教授は，非常勤講師の傍ら，当時たくさんいたマンホールチルドレンの支援に取り組んでいたが，それまでツェツェグさんはマンホールチルドレンの存在を知らなかったという。ツェツェグさんの家庭は，外交官である父親の元，10人の子どもがいる大家族で育ち，キョウダイはみな高等教育を受け，それぞれ活躍している。そんな中で，マンホールチルドレンの存在を知らなかったことを恥じ，Y教授の手伝いをすることで少しでもこのような子どもたちを助けてあげたいという思いだという。

5.で述べるが，施設の子どもたちと来日したときもツェツェグさんは通訳をしながら子どもたちの面倒をみていた。子どもたち（今はもう青年になっているが）とは，Y教授や日本人の支援者が来た時に通訳をするほか，青年たちの相談，例えば結婚相手にDVを受けたり，子どもが病気になったがタクシー代がないので貸してほしいなど，いまも各種の相談に乗ったりしている。

4. 働く子どもたち

第1回目の訪問から3年過ぎた2005年，筆者は再びモンゴルを訪問した。モンゴルは高度経済成長期を迎え，ウランバートル第一のデパートのショーウインドウにはテレビと冷蔵庫，ソファーセットが飾られていた。

再び草原の家を訪問した我々は，ハヤシライスの食材を買ってきて，子どもたちにふるまった。我々のメンバー3，4人でジャガイモの皮をむく手伝いをしながら調理の様子をうかがうと，3人の職員の指示のもと，6，7人の年長の女の子が200人分の調理を行っていた。調理するだけではなく，子どもたちに料理をよそいながら，「残さないように食べなさい」とか「お代わりは皆によそい終わってからだよ」とか注意していた。その手際はてきぱきとしており，職員と同じくらい「役にたって」いた。

それから4, 5年後，また草原の家に行った時，昼食を食べている筆者らに，年長の男の子が寄っ

てきて，昼食の食材に使われているジャガイモと人参，キャベツは，自分たちが草原の家の畑で作ったものであること，これらの野菜は1年間の食材として活用されていることを，誇らしそうに語った。彼らは，草原の家だけではなく，施設でも簡単な大工仕事やペンキ塗りなどの仕事を担っていた。日本の養護施設では，調理は職員が行っており，子どもたちは「しつけ」の一環として「お手伝い」はするが，それは生活の中で必要とされているものではない。モンゴルの養護施設では，年長の子どもたちは「必要」とされて，それらの仕事を行っていた。このような経験は，彼らが施設を出て自立していくときに，大きな力となっていることだろう。

5. 施設退所後の子どもたちの逞しさ

筆者が参加したモンゴルツアーは，Y教授が代表を務めるボランティアグループのツアーであった。Y教授はI教授の後を受け，国立教育大学で非常勤講師を務める傍ら，ウランバートル市内の養護施設を訪問し，入所している子どもたちと交流していた。2000年には，他の日本人支援者たちとともに施設の子ども13名と職員2名，通訳者1名（前述のツェツェグさん）を日本に招待し，子どもたちに日本の生活を体験させている。子どもたちは，九十九里浜で初めての海を体験し，温泉では裸で大勢の人たちと一緒に入浴したり，ホームステイ先のボランティア宅で，日本の生活体験をしたりした。それらの体験をしたメンバーは，モンゴルに帰国した後も，折にふれ日本での体験を語り合い，施設退所後も励ましあっていたという。

Y教授らは，施設訪問の傍ら彼らへの支援を行い，ボランティアの方々も，彼らが施設を退所した後も民間の里親として各自の対象とする子どもの面倒をみていた。毎年モンゴルを訪問した際には，みなが集まり，交流を深めていた。筆者もY教授に倣い，モンゴル訪問の際に集まれる子どもたちに声をかけて，近況報告などを聞いてきた。

その中にY教授が里親となっていたドルマさん（仮名）がいる。彼女は，施設退所後Y教授の支援を受け，国立教育大学に進学した。進学するにあたって大学の学費とゲルを支援してもらい，あとは働きながら4年間大学に通ってソーシャルワークを学んだ。しかし，ドルマさんが卒業した当時はソーシャルワークの仕事は無く，エアロビクスのインストラクターとして働いていた。本人はモンゴルの大学だけではソーシャルワークの学びは不十分だと思っており，できれば日本でソーシャルワークを学びたいと希望していた。相談を受けたY教授らは，日本語学校と大学院の学費，住む場所をどうするか検討し，筆者の伝手で日本の養護施設に住み込み，日本語は独学で学ぶことにして日本に留学できるように準備をした。日本語が全くと言っていいほどわからず，知り合いはY教授だけという環境の中で，ドルマさんは来日してきた。

ドルマさんが日本で暮らすにあたっては，様々な文化的葛藤があった。2，3例示してみると，日本での生活に慣れるために，バスや電車に乗れるようになることが必要と考えた我々は住居としている施設から日本語を学ぶために通う大学までの交通費を支給した。そうしたところ，本人はJR一駅の距離なら歩いて行けるとして，電車代を使わずに歩いて通学してきた。お正月に支援者の方からいただいたお年玉，合わせて2万円は，モンゴルにいるキョウダイたちが困っているからと言って，全額送ってしまった。自分の生活だけでもぎりぎりなのに，キョウダイが困っているからと言って，ことあるごとにお金を送ってしまうドルマさんだった。

また，日本語を学ぶサークルで知り合ったモンゴル人留学生が，住むところがなくなったということで，ドルマさんの部屋で寝泊まりするようになり，そこは緊急保護室なので貸すわけにはいかないという施設側と，困っているときには助け合うのがモンゴルのやり方だというドルマさんとの間で葛藤が生じた。ただ，おおむね日本での生活は，施設の小さな子どもの面倒や，掃除，

洗濯，食事作りなどは，モンゴルでの生活経験が活かされ，順調に進んでいった。

ドルマさんは，大学院修了後介護のアルバイトをしながらお金をため，一時帰国してアルバイトをしていたが，今後のモンゴルでの福祉は介護の仕事が重要になると見極め，まずは自分が介護とソーシャルワークの仕事を身につけ，そのうえでモンゴルで介護の事業を立ち上げたいと考え，今は日本で介護の仕事に励んでいる。

このように，ドルマさんをはじめとした施設出身の13人の青年たちは，施設のアフターケアが不十分ななか，互いに励ましあいながら自分の生きる場＝「自場」を形成して生活している。しかし，変革期のモンゴル社会の物質的にも精神的にも不十分な支援の中で，彼らはいかにして「自場」を見いだしているのだろうか？この問いに答えるべく，村井は2015年に植村・田村とともに研究チームを立ち上げ，彼らの生活調査を行うことにした。

6. アンケート調査の実施

本研究の関連では，2017年（2回），2019年，2023年に現地調査を行った。2021年にもドルマさんの友人たちやツェツェグさんと交流のある青年たちに，現在の生活と施設経験について聞き取りを行う計画であったが，コロナ禍でモンゴルへの渡航ができなくなった。そこで，インタヴュー調査を質問紙による調査に替えることとした。2022年10月にツェツェグさんを通じて調査票を渡し，19名の青年に回答してもらった。ここにアンケート調査の結果を示す。

［アンケート項目一覧］

1. 年齢，2. 性別，3. 施設利用歴，4. 最終学歴，5. 住居，6. 退所時同居家族
7. 現在の同居家族，8. 婚姻歴，9. 家族関係（親，キョウダイ，親族との交流の有無と程度）
10. 本人の仕事（雇用形態，給料の支払い形態，年収）働いていない理由
11. 配偶者の仕事（雇用形態，給料の支払い形態，年収）働いていない理由
12. 配偶者が働くことへの理解度，13. 配偶者の家事，育児への協力度
14. 保育・幼稚園（公立・私立）施設利用の有無，15. 教育機関の利用の有無
16. ホロー（区の行政単位）のサービス利用の有無，社会組織とのつながりの有無
17. 困ったときに相談できる人，18. 子どもを通した付き合いの有無，
19. 仕事を通した付き合いの有無，20. 近所付き合いの有無
21. 施設経験の評価（施設に入所してよかったこと）
22. 施設経験の評価（施設生活で身についたこと）
23. 施設経験の評価（施設生活で不足していた教育）
24. 退所時，意思や希望を尊重されたか
25. 施設で育った仲間はどのような存在か
26. 施設育ちであることを配偶者に話しているか
27. 施設育ちであることを友人に話しているか
28. 施設育ちであることを仕事関係の人に話しているか
29. 親が頼ってくることがあるか，それはどのような時か
30. 施設に預けられたことを今はどう思っているか

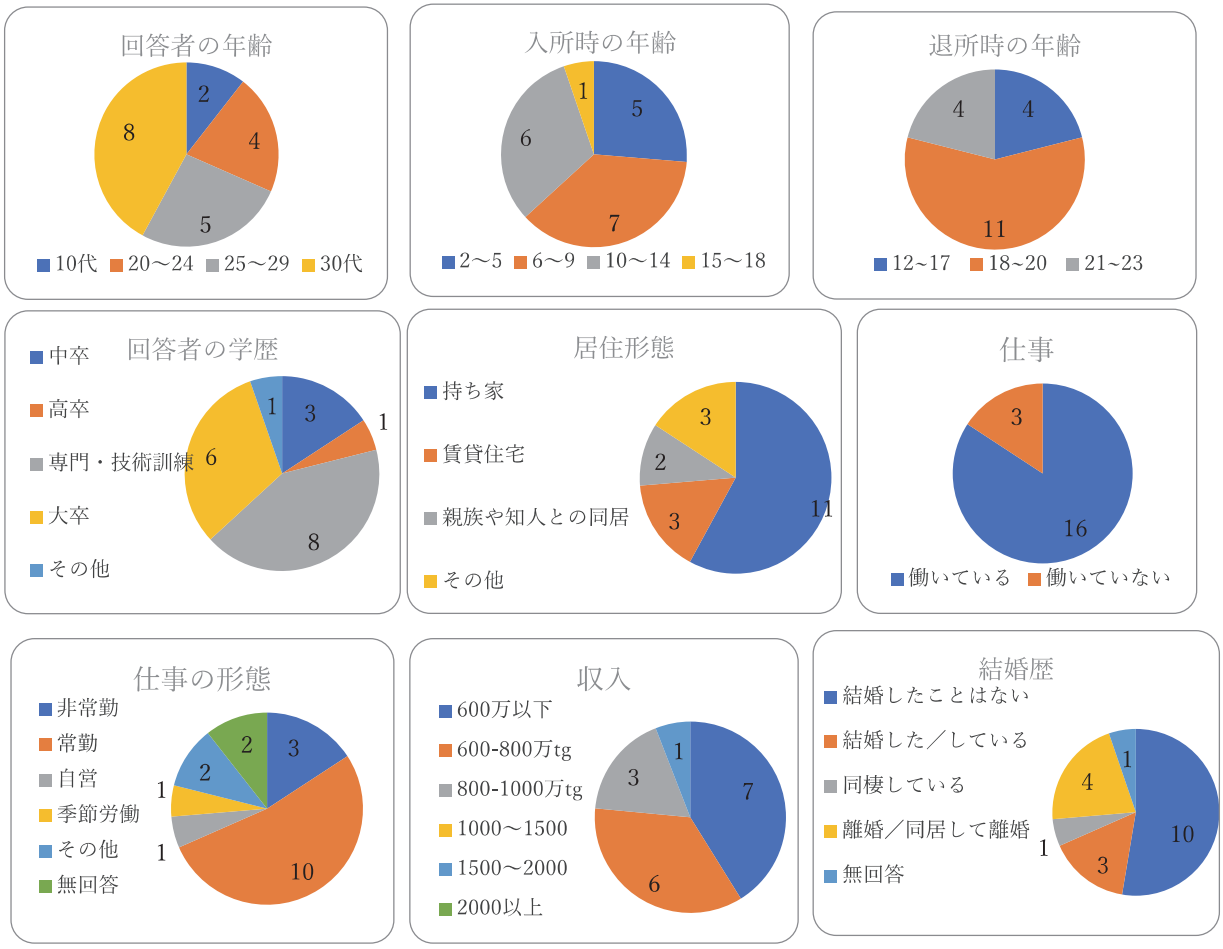
この結果を本論文で全て示すことは，紙幅の関係で無理があるので，一部を下記に示す。

アンケート協力者の性別は男性12人，女性7人である。年齢は，30代8人，20代後半5人，20代

前半と10代が合わせて6人であった。施設入所時年齢は6～9歳が7人，10～14歳が6人，2～5歳が5人，15～18歳1人である。退所時年齢は，18～20歳が11人，21～23歳が4人，12～17歳が4人である。

仕事をしているのは16人で，就労形態は常勤10人，非常勤3人，自営業と季節労働が各1人，その他2人，無回答2人だった。収入は，600万Tg（トゥグルグ）以下が7人，600万～800万Tgが6人，800万～1000万Tgが3人，1500万～2000万Tgが1人，無収入2人である。居住形態は，持ち家11人，賃貸住宅3人，親族や知人の家に同居2人，その他3人であった。学歴は，専門・技術訓練校卒8人，大卒6人，中卒3人，高卒1人，その他1人であった。結婚歴は未婚10人，結婚・同棲4人，離婚4人，無回答1人であった。主な質問項目の結果は，以下に円グラフで示した。

これらの結果から，彼らには高学歴者が多く，持ち家率も高く，仕事も安定している者が多いことがわかった。アンケート実施後，渡航が可能になったため，インタヴュー調査も継続できた。その結果の一部は第III章および最後に示す。



［アンケート結果より植村が作図］

＊「持ち家」項目では，持ち家・賃貸と複数回答しているケースもある。

＊「収入項目」では，独身であるがパートナー収入を記入している人もいる。ちなみにモンゴルの平均収入だが，2021年の世帯平均年収は，1,897＄なので，換算すると約600万～650万Tgである。CEICdata.comより（2023.10.10確認）

第II章　ウランバートル市の都市化過程とゲル地区への視点

本章では，本論文におけるアンケート，インタヴュー対象である20～30代の養護施設出身者たちの多くが暮らしているゲル地区について，その成り立ちと現在の居住状況について述べる。さらに日本の敗戦直後の公営住宅地区と比較することにより，私たち外部の調査者がゲル地区に対する視点をいかに定めたかを提示する。

1. ゲル地区の成り立ち

ゲル地区は，研究者においてもスラムやスクウォッターと同類の貧困で不良かつ不法な居住地区と見なされることが多い。例えば，ヒップホップに表現されたモンゴルの貧富格差問題を取り上げた島村は，ゲル地区をスラム街とし，自然災害で家畜を失い食い詰めた遊牧民たちや仕事のない地方都市や村の出身者が流入してくる地域で，治安が悪く近所付き合いがなく，狭い路地にアル中のおじさんがたむろし，上下水道が整備されていないために汚水が未舗装道路に流れ出しているようなゲットーと述べている。[3)]

実は私たちもゲル地区を訪れる前は，同様な思い込みがあったのだが，2017年，2019年，2023年のインタヴューで養護施設出身者たちのゲルを訪れた時には，少なくとも本章の筆者・田村の感想では，筆者自身が幼少年期に住んでいた戦後東京の活気あった新興都営住宅地の趣が見受けられ，昔懐かしい思いがした。このような印象を持った原因とその妥当性については本章3節で述べることにして，本節ではゲル地区への私たちの視点を定めるために，まずウランバートル市とゲル地区形成の歴史と現状について確認しておきたい。

ゲル地区の語源のゲルとは，モンゴル遊牧民の移動式天幕の呼称で，モンゴル語で家を意味する。ゲルは大人数人で2時間ほどもあれば組み立てることができ，中軸になる2本の木柱を中心に傘状に屋根幕を支える支柱が広がり，壁は菱形蛇腹状に伸縮する木組みで囲われ，屋根と周囲を数枚のフェルト布で覆う。中心には煮炊きと暖をとるための小型ストーブが置かれ，天辺は出入り口同様に開閉可能な構造となっている。冬場は各ゲルが石炭などを燃やすので，排煙による大気汚染が激しく深刻な環境問題の一因にもなっている。出入り口は南向きに置かれ，入って正面が床の間的空間であり，伝統的には仏像・仏画等が置かれる。左手西側が男性（および客）の居住空間でソファ兼用ベッドが置かれ，右手東側が台所を兼ねた女性の居住空間であるが，本調査で2023年3月に私たちが訪ねたゲルでは，正面には仏像に代わり大型液晶TVが，台所空間には大型冷蔵庫が鎮座していた。

ゲル地区とは，ハシャーと呼ばれる板塀で囲まれた敷地内に，これらのゲルとこれも居住者らが自分たちで建てたバイシンと呼ばれる木製あるいはレンガブロック製の固定家屋が併存し，一見無秩序無制限に広がっている地区である。ゲル地区は，ウランバートル市中の平野部に建つ鉄筋コンクリート造りの近代的アパート群と印象的な対比をなし，市の北側山斜面の広大な地域に今も拡大し続けている。2023年では，総人口約345万人のおよそ半数である169万人がウランバートル市に集住している。[4)] 2019年の調査では，市の人口の6割がゲル地区に暮らしていたというがその数は年々増加している。[5)] しかし，近代的ビル群とその後方に広がるゲル地区というウランバートルを特徴付けるこの風景は，一般に思われるように近代化以降のビル建設時に急に出来上がったものではない。調べてみるとその歴史は古く，モンゴル遊牧文化における定住地形成のあり方と関連していることが分かる。

近代に入るまで，モンゴル高原における定住人口集住地は，ほぼチベット仏教寺院のある場所のみであった。遊牧民は，寺院の中でも人々の崇敬の対象である活仏ジェブツンダンバ・ホトクトの寺院に年に一度参詣するのを常としたが，その寺院自体も領民を従えて家畜を飼いながらの移動ゲル集落であり，活仏の住む場所は，イフ・フレーと呼ばれた。[6] フレーは，1788年に現在のウランバートル市があるセルベ河岸で移動を止め定住寺院が設けられたが，[7] ウランバートルは，この場所に設立された門前町が起源である。この場所はロシア帝国と清朝の通商路にあたり，フレーは清朝の封禁政策下でも「旅蒙商」の長距離交易活動拠点の一つであったため，フレーが定住するとその東方に買売城と呼ばれる中国商人の木造建築（バイシン）の商業地区が建設された。[8] フレーの中心には活仏の宮殿伽藍がありそれを取り囲むように僧坊が置かれ，そこには僧侶のゲルが建てられた。19世紀中葉のフレーを描いた図を見ると，当時から既に宮殿建築を取り巻く各僧坊のハシャー内にゲル，バイシンによる居住形態があったことが分かる（**図1**）。[9] さらに歴史を遡れば，オゴデイ・ハーン時代のカラコルムもオルド（天幕）の宮殿を中心として，商業用街並みと中国商人用の固定家屋により成り立っていたし，フビライの建設した大都の皇宮も中国式宮殿建築の周りには，モンゴル人用のゲルが建ち並んでいた。私たちの目には特異に見える近代的ビルとゲルが併存する光景は，モンゴルにおける都市形成の初期からの原風景であることは再確認しておくべきであろう。[10]

1911年に辛亥革命が起こると外モンゴル諸侯は清朝から独立を目指して，活仏ジェブツンダンバ・ホトクト8世をボグド・ハーン（君主）とする大モンゴル国を建てたが，1917年にロシア革命が起こると北京政府はモンゴルに侵入し，1920年ボグド・ハーン政権は崩壊した。[11] 同年結成されたモンゴル人民党は，ソヴィエト連邦社会主義共和国に援助を求め，1921年その影響下にモンゴル人民政府が樹立されると，三度ボグド・ハーンが名目上の君主となった。しかし，1924年のボグド・ハーン寂滅後にモンゴルは立憲君主国から人民共和国に体制が移行され，ソヴィエト連邦に次ぐ世界で二番目の社会主義国となった。また，この時に首都の名前もフレーからウランバートル（赤い英雄）へと改称された。社会主義体制下では，急速に脱宗教化が図られ，チベット仏教は徹底的に弾圧された。莫大な寺院財産を削減するために寺院への課税，僧侶所有の家畜等への増税が行われ，寺院の破壊，僧侶の大量粛清などが行われた。その結果，1939年にはウランバートルの多くの寺院が無人となり，破壊されなかった堂宇も学校，工場等の公的機関に転用された。

宗教の排除後，モンゴルの本格的な近代化は第二次世界大戦後にソヴィエト指導で始まった。ウランバートルと改名されたフレーの近代都市化も，1950年代にソヴィエトの援助を受け始まっ

図1　19世紀中葉のフレー

た。ちなみに1935年のモンゴル全体の総人口は74万人で，市の人口は1万人にすぎなかった。[12] 都市建設や鉱工業発展のために労働力の需要が大きくなり，首都への移動が奨励され，ウランバートルの人口が急増した。結婚・出産も大いに奨励され，社会主義時代に人口は大きく伸びた。地方においては，ソヴィエト連邦のコルホーズを模した牧畜業の農牧業組合（ネグデル）化が進められ，組合不加入者には高い税金がかけられるなどしたために，1955年には地方人口の4分の3を占めていた遊牧家族は，1950年代末には3分の1に減少したという。[13] 急激な人口増加に対応するために，ウランバートルの都市化が計画され，役所や工場の他に住宅としてアパート建設が進められ，既に平野部に存在していたゲルは郊外へ移転された。[14] 1960年代, 70年代の都市計画では，さらにアパート開発が促進され，アパート地区への開発が未完な地域が「ゲル地区」と認識されるようになったという。[15]

初期のアパート居住者は，政府関係者や人民党員が優先されており，労働者の勤労実績や勤労年数，家族構成などに応じて職場ごとに順次割り当てられていったが，急増する都市人口にアパート建設が追いつかなかったために，ゲル地区は過渡的な居住地として位置付けられ，やがてはアパート地区に変わる予定であった。1990年，モンゴルは社会主義体制から民主化・資本主義化体制へ移行したが，当時の市の人口の56万人のうちアパート居住者は約半数であった。[16] 体制移行後に，国家資産の分配，民営化，ネグデルの解散等の施策が行われ，1997年に社会主義時代には制限されていた居住地移動が自由化されると，社会変動により生活に困窮した多くの人々が職を求めてウランバートルに押し寄せた。また，1999年から2002年まで続いたゾド（雪害）もそれに拍車をかけたとされる。さらに，2002年の土地法改正により，それまで国家所有であった土地の個人による私有権が認められると，既にゲル地区に居住していた人々のハシャー占有権が認められるに止どまらず，好きな場所にハシャーを形成して占有・拡大して登記する事態となった。この結果，登記に関して色々な事件が起きており，同じ土地への二重登記や知り合いに貸していたつもりだったのに登記されてしまい追い出された等の問題が後を絶たない。[17]

現在のゲル地区は，中心との距離に応じて，セントラル，メディティエ，フリンジに分けられ，前二者ではアパート化が目指されているが，最も広いフリンジに関しては，全体的インフラ設備の導入が困難なために，戸建てが目指されているという。しかしながら，気候や地形の問題から実際には急速な人口増加に見合う数のアパート施工は困難であり，現実においてゲル地区はますます拡大しつつある。様々な問題を内包しながらも，ウランバートル市への人口集中，特に20代から30歳代の人口増加は現在進行中で，彼らの半数以上がゲル地区に居住する結果となっている。

2. ゲル地区の現状

ウランバートル市内9つの各区は，人口1万人程度のホローと呼ばれる行政単位に分かれ，ホロー役所が置かれ，交番と診療所が併設されている。ゲル地区においては，各ホローがさらにセヘグと呼ばれる千人単位の管轄に分かれる。各セヘグには，居住者の代表としてセヘグ長が置かれ，住民の面倒を見ることになっている。セヘグ内のハシャーは，いくつかのまとまり毎に街区名があり，番地が振られている。原則的にホロー毎に学校があるが，人口急増に学校建設が追いついていない。

インタヴュー先でも，学校が急坂を下った数キロ先にしかないので，毎日車で祖父母に送迎してもらっている家庭もあった。公共交通機関はバスのみでゲル地区の幹線道路を走っており，地区内ではミクロと呼ばれるミニバスが走っているところもあるが，地区内の入り組んだ道路は未整備で凸凹である。白タク利用も多いようだが，必然的に自家用車・バイクの必要性が高くなり，

写真１　ゲル地区風景　2019 年６月［撮影：田村］

写真２　給水中の子ども　2023 年３月［撮影：田村］

ウランバートル名物の慢性交通渋滞を引き起こす原因となっている。

インフラとしては，ゲル地区では電気は配線されているが，先に述べたように上下水道設備はない。生活に必要な水は給水場から買ってくる。[18] 給水場はホロー内に複数置かれ，多くの場合は数百メートルの距離にある。水運びは小学生くらいの子どもの仕事のようで，手押し車に20ℓポリ容器を数個載せて運んでいる子どもをよく見かける。給水場は係員がいて，横で共同シャワー・洗濯場を開設している場所もあった。最近では，IC化が進みカード購入も可能である。下水の方だが，トイレはハシャー内に小屋を建て，渡した板の間の溝に落とす構造で，一昔前の日本の田舎の便所と同じである。ただしモンゴルには農耕民のように肥溜めにするという発想はなく，穴が一杯になったら埋めて横に新しい穴を掘っていたという。私たちが訪れた家庭では，便所溝をコンクリートで囲んであり一杯になるとバキュームカーが来ると言っていたが，冬の間は凍ってしまうので汲み取りは夏の期間のみだろう。バイシンを建てた家庭では，屋内にトイレとシャワー室，洗濯機置き場を作っている家もあった。台所などの生活排水は量が多くなければ敷地に撒かれる，ゴミは回収車が月に1，2回程度来るというが，空き地に捨ててしまうというけしからぬ人も少なくないようで，空き地がプラスチックゴミの山になっている所もあり，環境問題の一つとなっている。電気は，通りに並ぶ電柱から各ハシャーに配電され（盗電もあるようだが），メーター式で使った電気代が徴収される。先に述べたように，私たちが訪れたゲルでは中央奥に大型液晶TV，台所場所に大型冷蔵庫，玄関脇に洗濯機が置かれ，これらの家電はかつての高度成長期日本における「三種の神器」のように，子育て中の若い世代の生活向上のシンボルとみなされているようであった。ちなみに2020 ～ 2022年のコロナ禍下では，政府による電気代補助が出たという。また，携帯電話のみならず，パソコン，iPad等の普及は著しい。特にコロナ禍では学校の授業がライブ配信で行われたので，各家庭でこれらのIC機器は必須であった。パソコン等がない家庭では，親の携帯電話で遠隔通信授業を受けたと言っていた。モンゴルにおいて通信機器は広く普及しており，探し回ってやっと辿り着いた遊牧民の冬営地ゲルにおいても太陽光発電やパラボラアンテナが備えられていた。この時のインタヴュー対象者は年配の女性遊牧民であったのだが，若者だけでなく彼女も携帯はもちろんパソコンも使いこなしていたのは印象的であった。また買い物は，ゲル地区内に雑貨やインスタント食品等を扱う小商店があるが，住民は生鮮食料

写真３　丘の上まで建ち並ぶゲル
2023年３月［撮影:田村］

写真４　地区には豪華バイシンも
2023年３月［撮影:田村］

品等は主に市内のザハ（市場）に買いに行く。

インフラ面だけでなく，アンケートではゲル地区における社会交流について質問し，さらにインタヴューでも聞いてみたが，既存研究でも度々指摘されている通り希薄である。ゲルの建設や建て替え，バイシンの建設時に頼るのは，親戚や今まで付き合いのある人々で，普段は近所付き合いはあまりしない。しかし，第Ⅲ章で語られるように，火事など緊急時の助け合いやトイレが壊れた時や子どもの遊び場などの提供などは行われ，ある程度の隣人関係は成り立っている。

3. 新興住宅地としてのゲル地区：日本の戦後公営住宅（戸山ハイツ）と比較して

本節では，既述のような特徴を持つゲル地区への筆者らの視点の定め方について述べる。一般にそしてモンゴル政府の公共政策の中においても，首都ウランバートル郊外に拡がる広大なゲル地区は，克服されるべき貧困と前近代的後発地域の象徴とみなされている。ここに住む住民は，ソ連時代以降に建てられたアパート居住区に住む中流以上の都市住民に対比させて，貧困と失業が蔓延するゲル地区の下層民とみなされることが多い。そのような視線は，ここに住む若い人々の意識にも影響を与えており，例えばラップに現れた彼らのアパート地区に対するコンプレックスは現代モンゴルのゲル地区若者の実態として紹介されてもいる。[19)]

確かに筆者自身も養護施設出身者のインタヴューで彼らの居住地であるゲル地区を2017年に最初に訪れた時には，屋外トイレや空き地のゴミの山を見て一種のスラムではないかと思ってしまった。しかし，給水場に来ていた少年たちの明るく屈託のない様子を見かけてその印象は間違いではないかと疑ってはいた。2019年に本研究の一環としてモンゴルにおける女性の自律を調査した際に，急斜面のゲル地域に住むフェルト工房を営んでいる女性事業主を訪ねた。彼女の家は，狭いが小綺麗に整理されたバイシンであった。インタヴューの後に，彼女の敷地であるハシャーの外に出た時であった。夕暮れの急坂下に広がる景色を見た時，突然私を襲ったのは紛れもない郷愁を伴う既視感であった。夕暮れ時の丘陵には，ハシャー（板塀）に囲まれた多くのバイシンとゲルが点在し，急坂の下に中学校の敷地が広がり，その道を挟んだ右手に共同シャワー・洗濯場があった。この風景を見た時に，50年以上も前に自分が育った都営住宅の我が家があった坂上

から見たもうすっかり忘れて果てていた風景，夕陽に照らされ昏れなずむ坂下の商店街とその奥の公衆浴場の煙突から上がる煙，その風景が突然脳裏に蘇ったのである。第二次大戦後間もない時期の東京に生を受けた私は，戦後初の都営住宅に育ったのだが，高度成長期の1960年代末に郊外の一戸建て住宅地に引っ越しした後はその風景は思い出すこともなかった。しかし，その時突然，忘れ果てていた幼少時代の夕方の都営住宅の光景が蘇ったのである。この時の私の感情がセンチメンタルな独りよがり的思い込みではないかという自分自身への疑いを晴らすために，時と空間を離れた両者の居住区の類似点をこの機会に少し調べてみようと客観的な証左を探してみると，当該都営住宅の成り立ちに関する論文が出ていた。この論文を読んで，自分自身の経験として記憶に残っている事柄が，他者の研究調査の対象になるという貴重な機会も得ることができた。戦後の都営住宅とゲル地区の比較は，この地区への筆者らの視点の定め方を決める根拠に関連するので，以下紹介したい。

ひとの生において各人の生きた時代の体験・経験は，モノの見方に大きな影響を与える。1950年代に筆者が育ったのは，今日では老人問題の最先端の限界集落として知られる，「戸山ハイツ」と言われる第二次世界大戦後に日本で初めて建設された都営住宅地であった。この都営住宅は，戦後の住宅不足を解消する政策の一環として，陸軍戸山学校の跡地にGHQの提唱によりアメリカ軍のバラック材を建築材料として1949年に1,052戸建設されたものである。[20] 当時は太平洋戦争末期の空襲により家を失った家族が多く，当該都営住宅の建設当初の入居抽選の倍率は35倍であった。[21] 20代の若い新婚夫婦であった私の両親は，焼け残った家に数家族が同居するような生活を送っていたので，都営住宅への移転は誠に幸運なことであった。家はまさしく板張りのバイシンで，4畳半と6畳に台所，水洗便所という間取りであった。まだ汲み取り式便所が当然であった当時に水洗便所が備わっている住宅は非常にモダンだと思われたと聞く。入居者はさまざまであったが，家賃が当時の国家公務員初任給（1948年で2,990円）の3分の1程の高値（規模により750～1,080円）であったこともあり，[22] 結果的に国家公務員や規模の大きい企業の会社員が多かった。しかしながら，風呂もなく近所に買い物ができる所もなかったので，居住者らが都にこれらの施設設置を願うなどの要求をした結果，公衆浴場ができ，生活協同組合も結成された。[23] 戸山ハイツに関する論文著者によれば，これら初期住民たちの特徴は，自らの居住環境を自分たちで整えようとする向上心であり，時が進むにつれて彼らは都営住宅の規制を掻い潜って各木造家屋の玄関，風呂，台所，続いて部屋の増設，垣根等の整備を自発的に行なったという。我が家もまさにこの順序で，部屋が増えていった。

しかし，その後に高度成長期が訪れると木製バラックの都営住宅は次第に下層住宅地とみなされるようになり，2DKに代表される近代的高層コンクリートアパートへの建て替えが都側から提示されるようになり，これに対する住民側からの払い下げ要求なども起こり論争になった。[24] 当時，宮城まり子主演の「バタヤ」集落を舞台にした映画が連作されていた。ある時，母に連れられて弟とその映画を見に行った。[25] 映画の最後に，女主人公が彼女の住む集落を背景にして未来への希望を叫ぶような場面があったと記憶している。とにかく，女主人公の背景に映ったのは，紛れもなく我が家のある都営住宅風景であった。まだ幼かった弟はそれを見て，暗い映画館の中で「アッ，ウチが映っている！」と大声で叫んだので，母は慌てて「シッー」と彼の声を抑え込んだものである。今考えると，高度成長期にかかっていたこの時期に，戸山ハイツが戦後混乱期の先端モダン公営住宅から映画の下層集落モデルへの転落に要した年月はわずか10年ほどである。高度成長期の変化の激しさが窺われるエピソードではないだろうか。結局，1970年代に戸山ハイツは近代的高層アパートに建て替えられ，公営住宅における収入制限なども導入されたために，住

民の多くは東京郊外に一戸建てを建設して移住していった。その後，残った住民の高齢化が進み，半世紀後の今日の戸山ハイツは，都心にありながら高齢者の多い限界集落として新たな研究関心を呼び起こしている。

筆者が経験した戸山ハイツ変貌の歴史とゲル地区の歴史とを併せて顧みると，時空を超えた2事例に意外にも多くの共通点と，当然のことに違いが浮かび出てくる。戸山ハイツを研究した古賀・定行は，研究結果を次のように要約している。1）居住者は，自らが内装を整える（床や畳張りなど）ことから始まり，家族人数の増加に対応した居住環境を形成するために増改築を繰り返していた。2）大団地であったが，8つにグルーピングされた上で班分けされ，コミュニティ形成が図られた。3）共用施設の開設は居住者の活動により整備され，また運営に参加する等，意識の高い居住者により施設が開設・整備されていた。4）居住者の中には，より良い居住環境形成を目指す者が多数おり，彼らの意識や活動はその後の建て替え事業や現在の居住に影響していることが期待される。以上の要約から鑑みると，ハイツとゲル地区住民との共通点は，1）であり，決定的な違いは2）である。3）に関しては，共通点と相違点が混合している。4）は，建て替えで多くのハイツ住民が郊外住宅に出てしまったこともあり，著者らの期待通りには運ばなかった。これらは，1）個人生活改善，2）コミュニティ活動，3）共用環境改善への努力と捉えることができよう。

この点に留意してゲル地区に話を戻すと，ゲル地区の人々の住まい方を調べた松宮は，この地区は決して低所得者による不安定居住の集積ではなく，実際には経歴を異にする人々が，日々の日常生活，さらに未来を切り開こうとさまざまな実践を繰り返している，と観察している。[26] 1）個人生活改善の実践という点では，居住者たちは，収入が不安定な状況下においては，まずハシャーの獲得→ゲル建設→バイシン建設が目標となる。彼らの生活戦略は，夫婦の就労状況や学歴等に規定されているが，収入が安定してくるとバイシン改良さらにアパート取得が目指される。実際に私たちがインタヴューした30代の家庭においても，同じ過程で生活の向上を常に目指していた。先に述べたように家電の大型化はもとより，前回のインタヴュー時にはなかった玄関間がゲルに敷設されたり，子ども数が増えると共にコンクリート外構を持つバイシンがゲルの隣に建てられたり，トイレの下もコンクリートで固められ汲み取り式になっていたりと，常に生活向上が目指されていることが確認できた。

次に2）コミュニティ活動であるが，戸山ハイツでは，全戸が100～200戸の8地区にグルーピングされ，各地区に管理人が置かれ，GHQ払い下げの公営住宅であり戦後民主化の雰囲気もあってか，キリスト教会やその名もネバーフット（近隣）センターという幼稚園を兼ねた全地区対象の集会所があり，筆者の母ら若い世代（当時20～30歳代）では，料理講習会，ダンス講習会，読書会，政治集会，無尽講に至るまで同階層の間では活発な相互扶助を含めた活動があった。一方モンゴルでは，近隣関係が希薄であり以上のような活動は余り盛んではないということはモンゴル研究者らが一様に指摘することであり，私たちのアンケートとインタヴューからも同じ結果が出ている。モンゴルの遊牧民は，「ホト・アイル」と呼ばれる単婚家族による地縁的共同体の数家族が集まって季節ごとに宿営地を設け，各世帯から当番を出し労働の負担を軽減する共営世帯を作ってきたが，[27] これは固定的に形成されるのではなく，自然条件や季節変化，家畜頭数や種類，各世帯の世代や状況に応じて柔軟に集合／離散を繰り返すもので，組むか組まないかも個人の選択である。自由主義経済化以降の遊牧においては，この機能が遊牧においては再評価されているというが，ゲル地区住民においてもゲルやバイシン建設で人手が必要な時，また病気の時なども頼る相手は一義的には家族･親族･友人，さらにアンケートによれば，NPOや教会などコミュニティ外部の団体という個人が選択する人間関係であり，火事などの緊急時を別にして近隣関係が当て

にされることはあまりない。

このような希薄な近隣関係であるので，3）共用環境改善に関しては，住民が協力して行政に働きかけるという力には乏しく，上下水道，暖房設備といったインフラ設備においては，「行政機関にやってもらうことが当然」という考えが強いという。[28] しかし，現実には政府の財政困難によりインフラ整備もアパート化による環境改善という青写真も遅々として進まない。それでも，2019年に私たちが訪れたゲル地区では，1990年代に地域で水道設備を整備し，そこを管理することになった人が水道局員として水場を管理するとともに，共同シャワー・洗濯場を管理し，洗濯代行などをしている例もあった。また，子どもたち相手に安価なパン店を開いて地区の人々に役立ちたいという女性もおり，住民個人による近隣の共有環境改善への努力は少なからず見受けられた。

以上の比較から浮かび上がるのは，日本の戦後混乱期から高度成長期とモンゴルの社会主義体制から自由経済体制移行時の混乱期とその後の高度成長期という，時空を隔てはいるが似通った時代環境の中で，庶民が持っていた／いるより良い生活へ向かおうとする逞しさである。2DKアパートが当然となった高度成長期ましてや温水シャワー式トイレが当然となったポスト高度成長期の日本社会しか知らない世代には想像外かもしれないが，戦後の混乱期を親から聞きかつ一部経験しつつ（脱脂粉乳の給食など）育った身から見ると，戸山ハイツはもとよりゲル地区も決してスラムではない。混乱期を乗り切り，少しずつ生活を向上させながら人々が未来に希望を繋ごうとした／している新興住宅地区であった／あると言えよう。

現在，モンゴル政府によるゲル居住者のアパート移住政策貫徹が現実的には困難である以上，ゲル地区は今後も大気汚染等の環境問題への負荷を削減させる方策の段階的実施と併行しつつ残るであろう。戦後高度成長期に長屋形式公営住宅からコンクリート公団住宅2DK・2LDKへ，ポスト高度成長期から現在までは，高齢者集団が取り残される限界集落へと変貌しつつある「使い捨てハコモノ」公共住宅政策を進めてきた日本とは逆に，ゲル地区は居住者の経済・家族状況の変化に応じた伸縮可能な居住形態として，「遊牧的要素を持った，災害へのレジリエンスや柔軟性を保持したユニークな都市形態」[29] としての可能性が再認識される日が来るかもしれない。私たちのゲル地区への視点をここに定めることにして，第III章ではゲル地区に住む養護施設出身者らの若い世帯の逞しさや将来への生活戦略などを具体的に語る。

第III章　児童養護施設退所後の暮らしを追う

本章の筆者・植村は，勤務する大学のフィールドスタディ引率者として2011年にはじめてウランバートルに行き，公立・私立の小・中・高校や児童養護施設，国際NGO等を訪問した。学生たちのホームステイ先となった私立高校の生徒宅には，お母さんが外交官でロシア語も教えてくれる家や，ゲルに住むオジさん宅に居候している家，お父さんがシャーマンで夜にいろいろな人が訪ねてくる家，放課後に養護施設に勉強を教えに行く生徒などがいた。ウランバートルという都市にある実に多様な「ホーム」の存在に関心をもったことをきっかけに，2015年以降に何度か村井・田村と市内の養護施設や施設の子どもが夏休みを過ごす郊外の「夏の家」を訪問しては，子どもたちと束の間の交流を行っていた。

2017年になり，私たちはドルマさんを通じて，施設を退所した20代後半から30代前半（当時）の青年たちを紹介してもらった。いずれもドルマさんと世代的に近く，1990年代後半から2000年代にかけての社会変動期に幼少期を過ごした人々で，その後も様々な経験をしながら，仕事をもち，あるいはパートナーや家族・子どもをもってウランバートルで生活していた。それから2023

年までの間に，時には彼らの家や職場にお邪魔しながら，継続的に，または知り合いを紹介してもらう形で，これらの青年たちがどのように変化の著しいモンゴル都市を生きてきたのか／いるのかを聞き取るようになった。本章では，社会変革期の児童養護施設退所後の人々のライフヒストリーと現在の暮らしの様子を描き出し，彼らが現代都市のなかで自分の生きる場をどのように構築していくのか，そのプロセスと展望から，「自場」について考える。

1. 転換期のモンゴルと児童養護施設

モンゴルが社会主義から資本主義，国有財産の私有化・民営化へと舵を切った1990年代は，多くの生活困窮者や失業者が生じた。そして，ストリートチルドレン（あるいは「マンホールチルドレン」）をはじめ，多くの困窮した子どもの出現が社会問題化（保護される子どもの人数のピークは1997-1998）し，その保護・支援活動が様々な主体により行われたことは国際的にも知られている。[30)]

当初は孤児の保護のみ行っていた国立児童養護施設（1960年設立）も，親がいても保護が必要な子どもや生活困窮家庭の子ども，路上で暮らす（あるいは長時間過ごす）子どもを保護するようになった。90年代を通じ，政府，国際機関や国際NGO，民間，宗教団体など様々な主体による子どもの保護・自立支援活動がはじまり，1998年には国立を併せて19施設に，2007年には30施設，2018年では32施設になった。[31)]

一方で，「児童」養護施設は，その性質上一定の年齢までの保護活動になる。社会福祉分野では早くから，施設退所後の青年たちの生活支援・自立支援の必要性が認識され，[32)] 施設退所後の暮らしを見越したリービングケアやアフターケア，サポート体制の必要性が指摘されてきた。[33)] その後，施設環境は少しずつ変化し，2023年3月にウランバートル市立児童養護施設で聞いたところでは，最近になって施設出身者自身が，退所後の苦労を活かした相談体制を整える自助的活動をはじめる動きがあるという。

こうした課題は認識しつつも，彼らを支援対象者である前に，能動的「生活者」と捉える本論が関心を持つのはやはり，青年たちへの支援の在り方の前に，彼らがいかに自身の生活の場を構築していくアクターなのかという点である。本研究が実施した施設出身者の退所後の追跡調査は，十分な制度的サポートやアフターケアがないなかで，彼らがいかに，ウランバートルという都市の具体のなかで，自場を形成していったのか／いるのかを知るものとなるだろう。

2. 幼少期の記憶：児童養護施設に入る前の状況と退所時の状況

私たちが話を聞いた人たちが施設に入った背景には，大別して1）主たる養育者の経済的理由や居住拠点の確保が困難，2）親（すべてのケースで母親）の新しいパートナーとの関係の悪化（アルコール問題や暴力など）や家庭内での居場所のなさ，3）親・養育者との死別，という3要因が語られた。施設入所前の状況の詳細は，幼少期のため記憶にない場合，語りたくない場合もあり，すべての人から詳細を聞き取れたわけではなかったが，施設退所後について検討する前に，本節では本章で主に検討する4人のバックグラウンドとして，施設に入った背景と退所時の状況について述べる。社会主義から大きく変動するモンゴル社会の状況や周囲の子ども・人々の様子が伝わると同時に，年齢の違いにより退所時の状況も異なっている。なお，本章ではすべて仮名を用いる。

事例A．チメグさん（1984年生まれ。入所期間：1994-2002 ／ 10歳から18歳）

チメグさんは，9人キョウダイの下から3番目，上2人は里子に出ており，チメグさんを含む6人

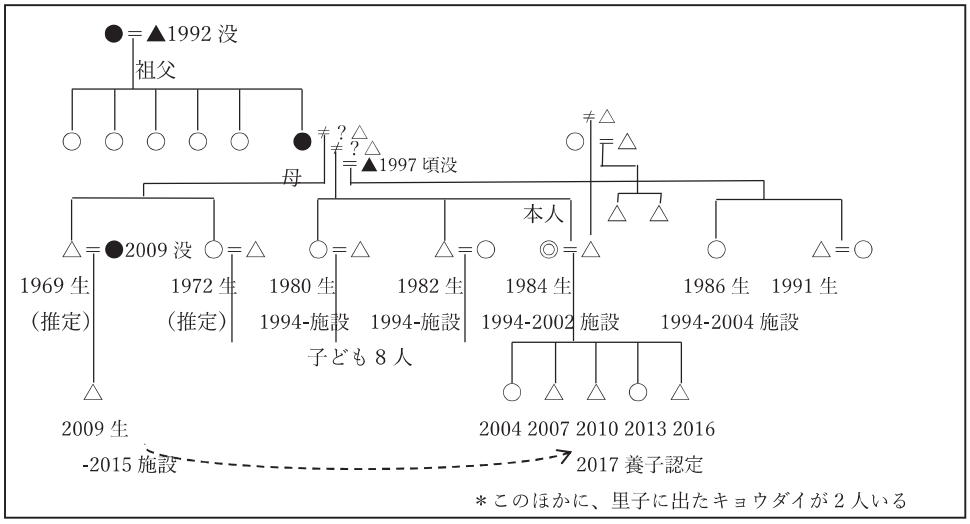


図２　チメグさん親族図［2017 年９月のインタヴューより植村が作成］

は母方の祖父[34]と生活し，一番下の弟だけは母親とそのパートナーで弟の父親と一緒に暮らした（**図２**参照）。母は時々，祖父の家に来たが，一緒に暮らしたことはない。父親には会ったことがなく，長兄・長姉や，自分より下の妹・弟とはそれぞれ父親が違う。一番上の兄は放浪生活や刑務所に入った時期があり，幼少期にあまりみかけていない。

一家の生活は，主に祖父の年金と，清掃の仕事に就いた長姉の収入に拠っていた。チメグさんと妹は幼稚園から教育を受けたが，小学校時代，服やノートが足りず恥ずかしい思いもした。また，夏はバイシン，冬はゲルに住んだので冬には暖を取るのに必要な石炭を拾いに行ったりして，[35]学校に通えない時期もあった。1992年に祖父が亡くなってからは，当時20歳だった長姉が年下のキョウダイ４人の面倒を見たが，心配した地域の人々がホローに相談し，ホローから施設に入れた方がいいのではと薦められ，下の４人は施設に入ることになった。

チメグさんと妹は，幼稚園から学校に通ったので，スムーズに施設に馴染んだ。入所後１年は，身分証ができず学校に入れなかったので施設内で教育を受け，翌年３年生に入り，７年生まで過ごし，８年生は夜間学校に通った。学校以外の時間は施設内で生活訓練を学んだ。当時は，女子は裁縫，男子は大工技術などを習った。身の回りのもの全般はつくれる。お金がなくクラスメイトとは遊べなかったので，友達は施設の友達だけだ。

母親は子どもに会いに月に１度は施設に来た。1997年頃，夫（妹たちの父親）が亡くなり，母はアパートの管理人の仕事に就いた。地下室に住み掃除やビルの管理をする仕事だ。ときどき施設から母に会いに行った。妹は母に抱きついて甘えたが，チメグさんは，恥ずかしくて甘えられなかった。

しばらくすると，２つの児童養護施設が合併[36]し，のちに夫となるアルタンさんと出会った。チメグさんより２歳年上のアルタンさんは，困窮に加え，母親の新しいパートナーである父親（３人兄弟。アルタンさんのみ母の前夫の子）がお酒を飲みすぎるため施設に入った。彼は，施設では音楽や靴づくりを習い，身につけた。その後のチメグさんは「当時周囲の青年の多くが進学していたから」と自動車修理の技術専門学校に進んだが，18歳になり，施設を退所した。［2017年９月インタヴュー］

事例B．ソロンゴさん（1986年生まれ。入所期間：1994-2004／7歳から18歳）

ソロンゴさんの母親はずっと学校の清掃の仕事をしていた。社会主義時代は，仕事があれば家は無料で借りられたはずだが，母には住む家がなく，幼少期は，伯母（母の姉）の家に住んだ。父親に会ったことはない。5歳下に弟がいるが，弟の父親は亡くなったと聞いている。伯母の家にいた頃，母が仕事で留守中，伯父（伯母の夫）がソロンゴさん姉弟に暴力をふるい，幼かった弟が床に落とされた。それを母親に話した日の夜中，母と伯父の大喧嘩になり，3人とも家を追い出された。

その後は，転々としながら暮らした。母が働いていた学校にも何度か泊まった。社会主義時代は，24時間保育や平日預かり幼稚園（月曜に登校し，金曜に家庭に帰る。週末のみ家庭で過ごす）があったので，土曜の朝から日曜まで母の職場に行き，学校の地下の部屋で暮らして，月曜に登園した時期もある。そのうち母は居場所を転々として暮らすなら子どもは施設に入れた方がよいと判断し，7歳で施設に入った。当時，弟はまだ2歳だったので別の，国の施設に入った。

母は「必ず会いに来るから，心配しないで」といったが，はじめは悲しくて1日中泣いた。しばらくすると泣かなくなり，いろいろな場所を転々とするより温かいところにいた方がいいと思うようにもなった。実際に，母は毎週会いに来てくれた。施設に入った7歳から10歳は学校に行ってないが，その後，高校まで施設から通った。

ソロンゴさんも，1999年の施設合併がきっかけで，のちの夫になる2歳年上のバータルさんと出会う。13～14歳頃から付き合っていた。施設では，歌と踊りが好きで，将来歌手になりたいと思っていたほどだという。掃除，裁縫，子どもとの交流や世話などは全般的に学んだが，社会のなかでどう生きたらいいのかなど，退所後に必要となるいくつかの教育には欠けていたし，退所の意向や進路に自分の意思は反映されなかったという。そして18歳になったため，施設を退所した。［2017年9月インタヴュー］。

事例C．エルデネさん（1991年生まれ。入所期間：1999-2012／8歳から21歳）

1999年に母親を病気で亡くし，子どもたちの面倒を見る人がいなくなったため，兄・妹と一緒に施設に入った。彼女の場合は，両親がいなくなったため施設に入ったと理解している，としてそれ以上のことは語らなかった。施設にいるときから，絵を描くことが得意だったので，木彫人形の上に絵を描く人形づくりの技術専門学校に進んだ。エルデネさんの時代は，保護される子どもの数が減り，18歳以降の青年への支援策も出されていたため，2012年に21歳で技術専門学校を卒業するまで施設に残れた。［2017年8月インタヴュー］。

事例D．セオラさん（1993年生まれ。入所期間：1999-2014／6歳から21歳）

エルデネさんの妹。養育者が亡くなり，施設に入った。親戚などの縁もないようだ。施設にいた時から裁縫が得意だったので，裁縫を専攻し，技術芸術専門学校に進学した。学生時代にも夏休みの間に裁縫の会社を手伝いに行って，仕事を覚えていった［2019年6月インタヴュー］。

事例Aチメグさんと夫のアルタンさん，事例Bソロンゴさんとその夫バータルさんは，私たちの調査対象者のなかでは最も年上に位置する（調査開始時30代前半）。彼らは社会主義時代に生まれ，施設に入るのは子どもの権利保護法の可決（1996年）や教育大にソーシャルワーカー養成課程が設置される（1997）前であり，施設入所期間はストリートチルドレンがもっとも増加した時期に重なる。

施設に入ったことは，「今振り返ると入れてよかった」（チメグさん），母親と一緒にいたかった

が子どものいる環境として「いろいろな場所を転々と移動するより，温かいところで過ごせるほうがいいと思うようになった」（ソロンゴさん）と述べている。

一方，彼らより少し若い事例C.エルデネさん，事例D．セオラさん世代（調査開始時20代後半）になると，保護される子どもの数が減少し，18歳以降の移行期にしばらく施設を利用できる制度ができ，学生の間は施設に残れるようになった。そのため，この世代には18歳になると同時に住む場所を失わないよう，大学や技術専門学校への進学を選択したと答えた人もいた。このことは，結果的にではあるが，施設出身者や施設に馴染む人は比較的高学歴であることや，家庭内の仕事などにも一通りの技術があることにつながっているかもしれない。学生時代の専攻とその後の仕事に関連がない人もいたが，セオラさんのように，現在まで裁縫の技術が彼女の生活を，経済的（収入），空間的（ときに居住），価値的（仕事の楽しみ）に支える重要な軸になった人もいる。

3. 都市の隙間にスルっと入る

では，施設を退所してから現在まで，青年期の彼らはどのように自身の生活空間を切り開いたのだろうか。聞き取りからは，都市に様々な形で存在する物理的な隙間や，様々な関係性のなかでつくりだされた隙間から自身の生活の場を見つけていったことが分かる。[37]

事例A．チメグさん，アルタンさん

2002年に退所したA.チメグさんは，当時健在だった母ではなく，幼少時に同居していた長姉のもとに戻り，そこから学校に通った。しばらくして，先に施設を出た彼（夫アルタンさん）が「住所確定所」[38] に移動したと聞いたので，彼を探しに行き，そのままそこで一冬（2～3か月）一緒に過ごした。2003年に妊娠が分かった。妊娠中も学校に通い，技術専門学校を2年半かけて卒業した。そして，生活訓練センター[39] にいる2004年に長女を出産した。

最初の子を持ったチメグさん夫婦（20歳と22歳）は，1年間はアルタンさんの親の家に住んだ。当時，彼の親は教育大学の水道管理の仕事をしており，大学寮の一室で生活していた。彼女たちもそこに住んだ。しばらくして夫家族とトラブルになり，彼女は夫の実家を出て，夫とも別居した。その後，ゲル地区のシェアハウス（国際NGOが開設した女子寮）にいた妹宅に子どもと身を寄せた。妹は，2004年に18歳で施設を退所し，技術専門学校，その後大学へと進学していく。施設のときの友人姉弟と同居した時期もある。そういう仲間は「親戚みたいな存在」だという。その後，日本の支援者が妹にゲルを買ってくれて，妹が敷地内にゲルを建てさせてくれる人を見つけたので，そこに妹と弟と住んだ。夫との別居は2年続いたが，彼は仕事をする度にお金をもって子どもに会いに来たため，再度一緒に暮らすようになった。彼には決まった仕事がなく，夏は道路舗装，冬は別の仕事と，その時々の仕事をする時期もあったが，[40] 施設にいた頃から交流のあったキリスト教教会で働きはじめると，一家は教会保有の敷地（ハシャー）に住むようになった。［2017年9月インタヴュー］

調査時の家族構成は，チメグさんと，夫，6人の子ども（長女13歳，長男10歳，次男（養子）9歳，三男7歳，二女4歳，四男1歳半）の8人だった。夫婦の実子は5人，次男は養子で，チメグさんの長兄の息子である。自分たちで子育てをしながら暮らせている，ということだった。

ここで語られただけでも，①姉の家，②住所確定所，③生活訓練センター，④夫の実家：大学寮，⑤妹が住む市東部のゲル地区の女子寮，⑥施設の友達との同居，⑦妹のゲル，⑧市西部のゲル地区で教会所有のハシャー，と市内のさまざまな隙間を転々としながら暮らしている。そこでは，様々な関係性と空間への柔軟な対応が見られ，単に「家族だから一緒に住む」のではない。

「入る」「出る」の背景を見ると，例えば，恋人の消息を追って①から「出て」，脆弱ながらも社会につくられた子ども・青年サポートの場（②③）を拠点に，学生を続けながら子を持つ親になっていった。母子となり④に「入る」が，夫の父親が，チメグさんがもっていた古いゲルを売ってお酒を飲んだことから夫家族とトラブルとなり，彼女は夫の実家を「出た」。当時，長女に病気が見つかり，手術にお金がかかる時期だったため，他に移ることを決意したという。その後，より関係が近かった妹や「いまや親戚のように思っている」という施設時代の友人（⑤⑥）との同居を経て，ゲルに住む（⑦）。そして別居していた夫との関係を修復して⑧に移動している。そこには，青年から母となったチメグさんがその時々で優先したものも見えてくる。

同時に興味深いのは，「ゲル」である。日本の支援者が買ってくれたわけだが，それを彼女たちは，「ゲルを建てさせてもらえる人＝場所」を見つけて住んでいる。ゲル地区の住まいを研究した滝口は，遊牧的な価値観が継承される相互扶助的な土地利用の形態として，ハシャー内に他者が一時的に住まうことを許容する「割り込み居住」に注目している。拡大家族の同居や間借・賃貸とは異なり，依頼者と受入者は，三親等以上の親族ないし非血縁者，知人などの関係であるが，金銭のやり取りのない，一時的な同居だという。[41] そこには，ウランバートルという都市に存在した柔軟性のある，一種の助け合いが見える。これまで，退所年齢を迎えると施設から「身一つで都市に投げ出された」と言われることもあった施設退所者の自場形成を考える上で，可動性の高いゲルの活用や一時的な共住を許容する空間や土地の利用法のなかに人々の能動性や都市住民の関係的作法が見られる点は重要だ。

事例B．ソロンゴさん，バータルさん

ソロンゴさんは2年遅れて学校に入り，高校を20歳で卒業したため，施設を退所した18歳時点ではまだ高校生だった。当時，施設の周辺のゲル地区にキリスト教NGOが建てたゲル女子寮が3～4カ所あった。親身に相談にのってくれたNGOのアメリカ人支援者が寮に誘ってくれたが，弟がまだ施設にいたので，女子寮には入らなかった。すると，彼らがゲルを買い，ゲルを建てる場所も紹介してくれた。そのため退所後は母と弟と暮らせるようになった。

母と弟と暮らせるようになったのは嬉しかった。特にゲルを頂いた時，長らく友人のゲルを転々として苦労した母がゲルをもてることに幸せを感じた。高校卒業まではNGOから1人月2万Tg，3人で月6万Tgの支援を受けて生活した。卒業後は支援がなくなるので，NGOの学費支援で美容師の学校に6か月通えた。子どもができて仕事をやめるまで美容室で働いた。

バータルさんとは，施設でつきあいはじめたが，年上の彼は先に退所し，親と住んでいた。2004年にソロンゴさんが退所してからもしばらくは会っていたが，彼が転職して連絡が途絶えた。2007年，バータルさんの消息を知る友人が彼のゲルの場所を教えてくれたので，再会できた。その後はバータルさんがソロンゴさんたちのゲルに入る形で，自然に4人で暮らすようになった。彼は働いていたのでお金も入れてくれていた。そして，子どもができたので，出産前に入籍した。

出産後，母親がお世話になったNGOに現状報告し，今後の相談をするなかで「ゲルは必要？」と聞かれた。子どもができ，母や弟との別居を考えていた時期だったので，夫婦はゲルを支援してもらった。長女が5歳になるまではバータルさんの両親のハシャーに夫婦のゲルを建てて住んだ。その後，ソロンゴさんの弟が仕事で地方に行くことになり，母親が一人暮らしになるので，夫婦でもとのハシャーに戻った。

以降，現在までハシャーには，ソロンゴさん夫婦のゲルと母親のゲル，物置と犬小屋，トイレが建てられている。土地の登記はしていない。［2017年8月，9月インタヴュー］

ソロンゴさん一家の場合，施設入所前は家がなかったため，親戚や知り合いの家，職場，幼稚園等の様々な場所を「転々とした」。施設退所後のチメグさん母子もいろいろな場所を転々と住んだが，逆に言えば，これらの点となる空間は，彼女たち母子が路上に投げ出されないためにみつけた都市の多様な隙間である。

しかし，施設入所後も母親との関係が途切れていないこと，退所時にキリスト教系の国際NGOとつながったことから，家族支援を得られた。それは，一定の経済的支援と弟を含む家族で住める家（ゲル）と場所（ハシャー）となり，現在に至るまで彼女たち家族の生活の拠点となった。夫もまた，施設時代からの友人であり，苦労を分かち合い家族を支える信頼関係が築かれている。

2017年調査当時，夫婦と子ども2人（9歳娘, 4歳息子）の4人家族だった（その後，二女が誕生）。バータルさんは地方の鉱山でエクスカベーターをしており，春4・5月から11月頃，地面の土が凍るまでは，20日泊まり込みで仕事をして10日間ウランバートルに戻る。[42] 冬の間，鉱山の仕事はないので，別の仕事の誘いがあれば出るが，そうでなければ，家族一緒に暮らす。施設退所後の生活を支えてくれたのは，誰か／どのような存在かと聞くと，何より夫のバータルさんだという。

いつも2人で話しあい，協力してきた。バータルは2人で話したことを少しずつ実現している。働いてお金を稼ぎ，いつも子どもたちが怪我や病気をしないよう，食べるもの，着るものも気にかけて支えてくれる。彼は友人であり子どもたちの父であり，私の大きな支えです。母も常に私を支えてくれたし，モンゴルの子どもを支援してくれたNGOにも感謝しています。今の暮らしに不満はありません。車がほしいとか，将来はアパートに引っ越すか，大きな庭のある土地を買ってゲルか大きなバイシンを建てようとか，子どもが少し大きくなったら私も働きたいとか希望はありますが，それらは少しずつ実現していけるものなので。　［2019年6月インタヴュー］

事例C．エルデネさん

両親が亡くなり施設に入ったエルデネさん姉妹はそれぞれが技術専門学校を卒業した21歳まで，施設で暮らした。先に，姉のエルデネさんが退所した。退所後しばらくは養護施設の「夏の家」の引率を手伝ったり，住み込みのベビーシッターをした。その後，同世代の友人たちの集まりで知り合った男性と結婚した。［2017年8月インタヴュー］

当初は，土地を借りて，自分たちで買ったゲルを建てて暮らした。その後，賃貸のバイシンに住んだ。バイシンを借りるのはやや高い。その後，夫の両親の家や子どもたちの学校に近い市西部のゲル地区に空きハシャーを見つけ，引っ越した。空きハシャーの見つけ方を聞くと，父母が，「いつ通りかかっても誰もいないから空いているかも」と教えてくれたので，ホローに連絡し，借りたいと相談したところ，家主にきいてくれた。1か月4万Tgで借りている。自分たちの土地はない。［2019年6月インタヴュー］

2019年当時の家族構成は，夫婦と娘2人だった（その後，2023までの間に長男と三女が誕生）。夫は施設出身者ではない。2017年調査時には，子どもが小さい間は外で働けないが，ずっと仕事を続けている義母に「女性でも母親でも仕事は持つべき，施設育ちだと働かなくても誰かに助けてもらえるのか」などといわれ，働くことへのプレッシャーを口にしていた。2019年調査時には，コンビニで働いていた。夜勤の日もある。夫とうまくいかずに悩んだ時期には，戻る実家がないため，子連れでシェルターに身を寄せたこともあった。そんなとき，日本の支援者たちの通訳だったツェツェグさんに相談したり，励まされたりしてきた。

事例Aのチメグさん姉妹が「割り込み居住」したのに対し，エルデネさんは家賃を払ってバイシ

ンを借りたり，ハシャーの土地を借りたりしている。ウランバートルにおける土地の価値の高まりや土地への権利意識が強くなったことの現れかもしれない。[43] とはいえ，ハシャーの囲いがあっても誰かが実際にその場所で暮らしている生活実態があるかを通りがかりの義父母が関心を寄せながら見ているように，都市の様々な隙間に人々が寄せる関心も見える。貸主にとっても土地は空けておくより，管理を兼ねて誰かが住んでいる方が安心という感覚もあるようだ。こうして借りた彼女の家にはときどき妹が身を寄せていることもあった。

事例D．セオラさん

2014年に施設を出たセオラさんは，姉の家に住んだり，住み込みでベビーシッターをしたことがあるというが，基本的には，裁縫の専門学校を卒業後，縫製の仕事を軸に生活してきた。最初は学生時代にインターンで関わった会社にいたが，退所翌年の2015年には，半年間，内モンゴルの縫製工場に行った。出稼ぎである。

内モンゴルの方が給料がいいのかと聞くと，給料は，量や質，デザインなどつくったものによって違うが，食事と住む場所は会社から提供され，働いている時間がかなり長いため，給料はそのまま貯金できたという。セオラさんが入ったのは，民族衣装をつくる会社で，いまは卒業式や結婚式などで思い思いのスタイルの伝統衣装を着るのが内モンゴルの若者に人気だという（**写真5**）。民族衣装の縫製は，分業ではなく，1人で一着をつくりあげるスタイルだ。彼女は，朝8時から夜1時まで働き，仕事が多い場合は泊りで縫製した。ハードな仕事だが，良いものをたくさんつくると給料も多くもらえるためがんばって働いたという。そのため，2017年から約2年，再度内モンゴルで働いていたが，向こうで知り合い，付き合っていたモンゴル人男性と結婚することになり，ウランバートルに戻ることにした，と幸せそうに話していた。[2019年6月インタヴュー]。

本節では，ウランバートル各地に広がるゲル地区で暮らす施設退所後の4事例7人の青年の足

写真５　当時，彼女のスマホには自分で手掛けた多くの民族衣装が残されていた。彼女の技術の高さを伺わせるバリエーションに富んだものであった。いま，モンゴルでも若い人たちの間に民族衣装への需要がある。2019年６月［撮影：植村］

跡を辿った。退所後，親元に戻ったのは2人，他はキョウダイを頼ったり，住所確定センターやNGOの寮，住み込みの仕事を見つけるなどして，学校あるいは仕事を探し，少しずつ生活の道を切り拓いた。また，所在が分からなくなった恋人を探し，一緒に暮らし始めた人もいる。他にも，都市の様々な隙間をつくりだし，身を寄せたり（青年だけ／子どもができてからは親子で），組み立て・解体の自由度の高い家（ゲル）を補完的に利用しながら柔軟に生活できる場所を確保してきた姿が浮かび上がる。その過程で，ウランバートルにおいて，遊牧文化の相互扶助的な土地利用を見せる「割り込み居住」や，親族や友人・家族などを家や土地に受け入れて共住する実践，あるいは土地・バイシンの賃貸といった複数の方法が用いられていることも明らかになった。

4. よりよく生きる

都市の隙間にスルっと入り，なんとかそれぞれが住む家をみつけ，食事や服などを整え，次世代の子どもの誕生をもって，「自場」の形成といえるのだろうか。本節では，2017年，2019年，2023年と，調査に行く度に少しずつ変化していく彼らの暮らしに注目したい。

事例A. チメグさん

チメグさんとは町中で何度も会って話を聞いたが，2019年にはじめて彼女の自宅を訪問した。市の西側にある人口の多いゲル地区で，ハシャーの敷地は広く，清潔で，バイシンが一軒，ガレージと奥にゲルが1つ建てられている。ガレージには，冬場に使う家財道具などを仕舞っているという。

バイシンで暮らしていたが，訪問の少し前に台所で火を出し修繕中だった。小火に気づいたときは，バイシンの扉を開けて大声で助けを呼んだ。近所や通りかかった人たちが手分けして消火活動を助けてくれたという。バイシンを修繕中なので，訪問時は初夏だったがゲルを組んで生活していた。ゲルにはストーブがあるので，もとより冬場はゲルの方が温かいので，現在でも冬はゲルを組んで暮らす。夏の間は，家のなかでストーブを使うと暑いので，ストーブを外に出し，外で料理し，外で食事をすることもあるという（写真6）。

そこには，必要な時に組み立てる，寒さに適している，しかし季節に合わせてゲルを軽くしたり，内部のパーツを外に動かして使うなど，ゲルの利便性と深く結びついた知恵と生活実践が見られる。加えて，こうした生活実践は，固定家屋であるバイシンは常に土地に建つが，ゲルは必

写真６　外から見ると密集地帯に見えるゲル地区も，中に入り暮らしの様子がわかると広々と感じる。また快適さや利便性が考えられ，様々な工夫が加えられた住空間である。2019年６月［撮影：植村］

要に応じて組まれたり片づけられる家だという特徴の違いを際立たせる。また，ハシャー内にあるバイシンとゲルの関係が，豊かさと貧しさや上下の関係にあるのではなく，並置や補完の関係にあることを強く認識させる。

私たちは，お金持ちではありませんが，いま，十分生活できています。私にとって，「子どもが元気に育っていること」が，十分であることなので，その点で十分暮らせています。施設を出たあとの私たちの暮らしを助けてくれた妹にも，日本の支援者にも感謝しています。自分たちの財産より，私は子どもの幸せを優先したい。子どもたちが元気でいてくれるなら，それでよいと思っています。　［2019年6月インタヴュー］

チメグさんの子どもたちは夕暮れときまで外（ハシャーのなか）で遊びまわり，お母さんの帰りが遅い近所の友達も一緒にご飯を食べていた。インタヴューでは，すぐに子どもができたので友人は施設でできた人たちだけと言っていたが，こうして食事のときに家族のなかに他人の子どもが混じったり，小火の際に一緒に消火活動をしてくれる近隣の人たちがいることも見える。[44] チメグさんが家でつくる素朴な自家製パンは，とてもおいしく，多くの子どもたちが賑やかに生活しながら掃除の行き届いたゲル生活に触れると，彼女が優先するものとその丁寧な暮らしが見えるのである。

事例B．ソロンゴさん，バータルさん

インタヴュー当初から，行き届いた掃除，おもてなしの料理を用意して迎えてくれること，子どもを大切にする姿勢，そして季節によって違う仕事したり勤務地の変化はあるものの働いて生活すること（バータルさん），子育てがひと段落したら仕事をしたい（ソロンゴさん）など生活の構えは変わらない。しかし，訪問を重ねる度に変化しているのは，セルフビルドによる住空間の拡張と生活道具や家財道具の変化である。

最初に訪問した2017年，ハシャー内には夫婦のゲルと母親のゲルの2つがあり，他には犬小屋と簡易トイレが設置されていた。2019年には，子どもがもう一人誕生して5人家族になった。そして，バータルさんが近所に住む友人たちの手伝いを得て新しく建てた綺麗なトイレが設置されていた。掘った地面をコンクリートで固め，定期的にバキュームカーを依頼して処理することにしたという。トイレ内には，「子ども用の方でしないで」とか「なかでタバコを吸わないで」という貼り紙があった。理由を聞くと，隣人宅のトイレが壊れたので，貸しているという。以前，自宅トイレが倒壊したときは隣人に借りたという。また，以前は土だった隣の庭の一部がコンクリートに変わり，ソロンゴさん夫妻の子ども達がその一角で自転車に乗っていた。子どもたちを庭で遊ばせてもらえるか聞いたら隣人は快諾してくれたという（**写真7**）。

住宅街であるゲル地区では，隣接する住民間でもこうした貸し借りが行われている。同時期，彼女たちは複数軒ある隣人のうち一軒との間に土地問題を抱えていていた。ソロンゴさんたちが長く住む土地は自分が登記した土地だから出て行ってほしいといわれたという。NGOが紹介してくれた場所なので，「割り込み居住」だったのかとも思ったが，当時はまだ私有化が広まっておらず，土地の登記も盛んではなかったためはっきりしないという。現在，この隣人は住んでおらず，ハシャーを人に貸して，時折様子を見に来るという。ソロンゴさん夫妻は，自分たちもこの場所を気に入っており，他に住む土地もないので簡単には出ていかない，そちらが出るならこの土地を買う，と伝えたら何も言わなくなったという。以降，この隣人とはなるべく土地の話題を避け，

写真７　コンクリートを敷いた隣人のハシャー内で遊ぶ。思い思いの改変を加えるゲル地区で，素早く道具（自転車）に適した環境（コンクリートの平面）を見つけるのがうまいことに感心する。2019 年６月［撮影：植村］

写真８　正面にテレビ。坂道の多いゲル地区でも移動しやすいベビーカーもきちんと屋内に収納されている。2019 年６月［撮影：植村］

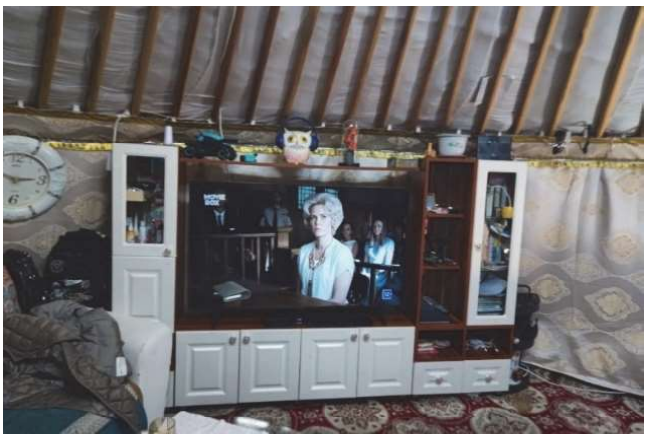


写真９　大型化したテレビ。オンライン授業でも不便はなかったという小学生の息子は，父・バータルさんに来客中だから小さな音にしなさいと言われながら，大画面でテレビをみていた。2023 年３月［撮影：植村］

現状を維持しているという。

コロナ禍を経て訪問した2023年になると，子どもたちの身長が伸びただけでなく，夫婦のゲルはさらに大きく，美しいものに変わっていた。テレビは以前よりずっと大きく（**写真8，9**），冷蔵庫も中型から大型の細長いものになっており，あまりに冷蔵庫が大きいためにその上部の梁を数本抜き，全体のバランスを取ってゲルを建てていた。コロナの間は小学校もオンライン授業だったため，自宅のwifiで，娘はタブレット，息子は母親のスマホを用いて授業を受けたという。

また，ゲル入口に，下駄箱や一部の家具を収納する小屋が連結された。まず小屋に入って靴を脱いでから家の中の空間であるゲルに入る形になっていた。これもバータルさんのセルフビルドである。ゲルに住む彼らの場合，冬と夏にゲルを建て直す。以前より，こうしたときは近くに住む施設時代の友人たちに手伝ってもらうといっていた。なかにはコロナ禍で仕事がなく生活が厳しくなった友人もいたそうだが，バータルさんは仕事があったので，給料日には困っている友人たちに食べ物などをもっていったようだ。これまで自分たちでなんとかしてきたから，市役所や他のところにはそこまで期待していない。事例Aのチメグさんも，施設のときの友人宅に身を寄せた時期があり，彼らのことを「親戚のよう」と話していたが，ソロンゴさん夫婦にとっても施設での友人関係は，退所後も家族や親戚のようなものと語られ，現在までの日常を支える大事なネットワークのひとつになっていることが見て取れる。

このように，彼らは自分たちの暮らしを「グレードアップ」させながら暮らしているが，「いずれは自分たちの土地を購入するか，アパートに移動したい」とも話しており，必ずしもこの場所に固定的な生活基盤を固め，構築するというような様子は見られない。様々な可能性を見ているようである。

事例C．エルデネさん

2023年，エルデネさんは4児の母となっていた。夫婦は，夫の両親と一緒に市北部の新興ゲル地区に土地を購入し，引っ越していた。急傾斜の丘にあり，近隣のほとんどが現在，土地を造成中で，地崩れしないようハシャーの周辺にはタイヤが埋め込まれ，少しずつ住環境が形成されていた。そこに，犬小屋，物置をおき，義父母はハシャー内に建てたゲルに住み，エルデネさん一家は自分たちで建てた美しいバイシンで暮らしていた（**写真10，11**）。

家は，夫，義父，義弟らが協力して建てており，外にデッキテラスをつくっている途中だった。セルフビルドでここまでしっかりしたバイシンが建つことに驚いていると，義父は大工だという。夫は，変わらず車修理の仕事をしており，市の中心街を抜けて反対側に出勤するため，朝早くから夜遅くまで仕事に出ている。子どもの学校の送迎は義父母が協力してくれているという。施設育ちであることや，様々な衝突が家族の中にあったとはいえ，4人の子を持つ優秀母[45]となり，ハシャーを共有しはじめたことで義父母との距離もよい形になっており，子育てを手伝ってもらえるようになったためか，4人目の出産間もないが仕事をはじめようとしていた。

事例D．セオラさん

2019年，結婚を控えて姉の家にいたセオラさんは，その後結婚して息子を出産した。しばらく夫の両親宅のそばで暮らしたが，夫があまり働かず，セオラさんの稼ぎだけで暮らす期間が続いた。お酒を飲むこともあったので，息子を連れて家を出た。「あの暮らしを続けるより，息子のことやこれからの教育にお金を使うために働く方がいいから」という。

幼い息子と2人になった彼女は，求人広告でアトリエでの仕事を見つけ，働きながら息子を育て

写真 10　ゲル地区なのでキッチンの流しに水道はない。ブルーのタンクにはきれいな水が入っている。2023 年 3 月［撮影：植村］

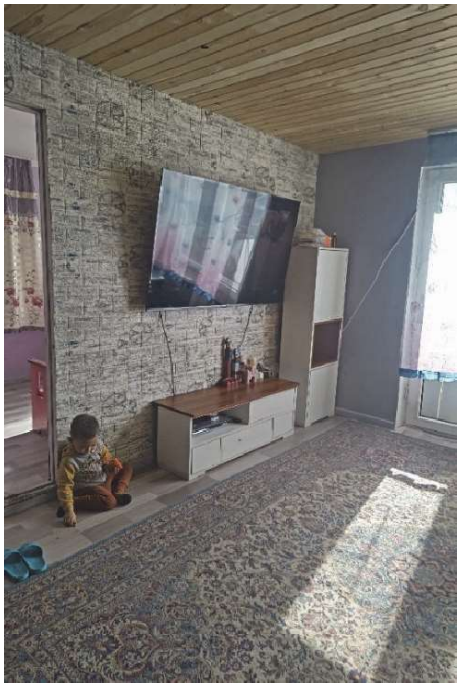


写真 11　広いリビングにはソファーベッドの向かいに，やはり大きなテレビが置かれている。奥は子ども部屋で，娘 2 人のベッドと勉強机，学用品が整頓されて綺麗に使われている。2023 年 3 月［撮影：植村］

ていた。調査に発つ前は，彼女は息子を24時間幼稚園に預け，平日は働いていると聞いていたが，市の中心地にある職場を訪ねると，職場の紹介で近くの幼稚園が見つかったため，朝預け，夕方迎えに行って息子と一緒に市内のアパートの地下の部屋（と聞くと薄暗く狭い部屋が想像されるかもしれないが，明るく空間も広い）に住んでいるという。

職場の社長は，伝統衣装デールを現代的なスタイルにデザインしなおし，モンゴルの若い世代を惹きつける，特別な時だけでなく日常で着るアイテムに伝統的な要素を取り入れたデザイン・アイディアを持った若き女性事業家で，以前はテキスタイルの販売事業をしていた。その後，デザインを学んで立ち上げたのが現在のアトリエだという。販売もしているが，オーダーメイドの注文がモンゴルの若い世代，内モンゴル，ロシアなどから入る。セオラさんの他に，7人の女性が働いている。新規事業として立ち上げた矢先にコロナ禍となり，国の助成金などの対象にならず経営は苦しかったが，生地を売るなどして従業員の給料を捻出し，1人も解雇せず凌いだという。

セオラさんは職場の人たちにも，施設で育ったことやシングルマザーであることを話しており，子どもの発熱時や幼稚園行事などに参加できるよう快く協力してくれたり，アドバイスがもらえて，とても良い環境で働くことができているという。

4人の経年的変化を追うと，彼らが「よりよく生きる」実践や選択をしていることが分かる。何を「よりよい」事柄とするかは，各人の考えや経験に基づく判断を含むため多様だが，常に暮らしやその環境に自分たちで手を加え，工夫を重ね，少し先の未来にも備えている点で共通してい

る。18歳～21歳という時期に施設を退所したあとの彼らの「自場」形成には，単に住む場所を確保する，食事ができる，仕事を見つける，家族をつくる，といった状態ではなく，各自が自己実現に向けて，あるいは「よりよく生きる」営みと選択の上に自分の生きる場＝自場の形成を続けている姿が見えてくる。

5. 協働的に紡ぎ出される「自場」

本章では，モンゴル社会の転換期に施設での生活を経験した青年たちのその後の生を追った。人々のライフヒストリーを通じて，都市のさまざまな場所を「転々とする」経験のなかに，彼らを取り巻く関係性と都市のなかにある様々な生きられる空間が浮かび上がった。

都市の隙間にスルっと「入る」実践には，むき出しの都市の路上に投げ出されないための知恵が見える。同時にその場所から「出る」局面には，キョウダイの家に身を寄せるなどして，「住み着く」より，恋人らの消息をもとに都市を探し回る，子どもに必要なケアができない状況なら義父や夫との暮らしから飛び出す，シェルターに移動して物理的距離を取るなど，時に関係性は切られ，自身の生活の場を別の環境へと引き離す実践も見られた。衝突必至の土地の話題を避けて現在の場を保持する，別居しても働いたお金をもって子どもに会いにいく，離婚しても職場の理解を得ながら子育てができる関係をつくっていくなどを含めると，自場の形成過程には，彼らがその時々で「よりよく生きる」ために優先しているものと，個人が単独で行うだけでなく互いの生活の場を協働的に支えあう他者との関係性が見えた。次世代の子どもたちを考慮した行動が多かったのは，聞き取りが青年期から仕事や家庭を持ち，あるいは自身が親になる時期に重なっている人が多かったことも影響しているだろうが，相互扶助を残しつつも，変化する都市を生き抜こうとする人々の技法のなかに，支援されるだけではない自立と協働による自場形成の特性があるのではないだろうか。I章で文化的葛藤として村井が述べた，寝泊まりできる空間（「隙間」）に困っている人が留まることを受け入れるドルマさんのエピソードは，まさにこうしたモンゴルの実践と技法を継承したものであり，それが日本の施設では「問題」視されることとあわせて興味深いところだ。今後，養護施設退所後の彼らの人生に対するリービングケアやアフターケアがあるとするならば，住まい，同居者，職場，季節に応じた対応などのしなやかな柔軟性を許容し，他者を受け入れ，場の（一時的な）共有を許す距離感や関係性を許容するものでなくてはならない。

人々が入った都市の「隙間」には，社会主義時代に近代都市としてインフラ整備されたアパート群や学校や寮の地下などにある空間である場合と，一定区画の土地とセットになったゲル地区とがあった。さらに，人（単独で，あるいは母子）がどこかに身を寄せるケースだけでなく可動性のあるゲル（家）ごと場所を見つけて移動する場合がある点は，遊牧文化を部分的にも継承する現代モンゴルだからこその，都市で生きる選択肢の多さにつながっていた。それは，II章で田村も指摘しているような，かつて日本の住宅政策のなかで生活の「上昇」を前提しながら段階的に高層アパートへの建て替えを行い，時を重ねることで老朽化していった「ハコモノ」としての住空間（あるいは「家族の住空間」）とは異なり，常に新陳代謝を繰り返し，ライフスタイルや家族・状況の変化に応じて柔軟に暮らしの場とともに形づくられる都市の姿でもある。

ゲル地区をはじめとする彼らの現在の居住地での生活実践において，共同水道場の利用やゲルの定期的な手入れ，セルフビルドによる空間拡張などの恒常的な働きかけは，一見手間がかかる「不便な」住環境に見えるが，その手間や柔軟性があるからこそ，彼らの生きる場が恒常的に周囲の人々との協働性とともに紡ぎ出されていることも見えてきた。こうした恒常的な営み自体が繰り返される都市に，多くの人々が生活の場を切り拓く協働的な隙間が確保されるのだとするなら

ば，モンゴルの人々の都市実践に学ぶところも大きいだろう。

筆者らが調査で往来を重ねるにつれて，ウランバートルの都市化は見た目にも進展しており，延々と続く交通渋滞，きらびやかなショッピングモールや暗証コードつきの門に囲まれたゲーテッド型タワーマンションも建ち並び始めている。しなやかな自場形成の背後に見られたモンゴル都市に残る遊牧的要素や人を隙間に受け入れ場の共有を許容する人々の生活技法は，今後どのような生活の場に継承されるのだろうか。

おわりに：アンケートと現地調査からみる児童養護施設出身者の分析

以上，主としてゲル地区に暮らす20 ～ 30代の施設出身の暮らしに見える「自場」形成の過程を追ってきたが，2017年からの4回にわたる現地でのインタヴューと2022年に実施したアンケート調査を併せて考察すると，現時点では以下の特徴が浮かび上がる。

①教育観

社会主義時代から続くと思われる教育程度の高さ。特に女性に高学歴の傾向がみられる。[46] また，養護施設の子どもでも高等教育や外国語教育を享受すべきとする認識がある。高校までで公的支援が打ち切られ，その後の教育支援が行き届かない日本の施設出身者と比較すると，彼らとの教育観の違いが窺われる。[47] 特に外国語教育への要望が高いのは，留学や出稼ぎなどで国外に出る可能性を視野に入れているモンゴルに特徴的である。

②仕事観

人々の仕事観に関係するが，学校・大学で取得した専門性や資格があってもよりよい条件なら特定の仕事に留まらない。鉱山関係以外の主産業の停滞もあり，学歴や保有資格に比して恒常的な職が少ない状況にあるが，場合によっては海外に働きに行ったり，子連れでの短期・中期の移住など，移動性の高さ，移動への肯定的見解がみられる。

③家庭観

生業や社会主義時代の影響もあり，男女ともに仕事をもつこと，家庭と仕事の両立が当然視されている。一方で，家庭内では，母と父に一定の役割分担が見られ，子育てに関して母子の関係，ないし母が担う役割は大きい。また施設出身者らは，家事や生活技術全般を施設で身につけたが，それらは家庭生活や子育てでも活かされていると考えていることがアンケート調査からわかった。

④近隣関係

自宅周辺の近隣関係の希薄さに比して親類・知り合いの協働関係の濃さ。住み込みや土地管理などの形態で，親戚や家族以外の人々との同居ないし誰かの土地に住むこともある。また，都市のゲル地区でも季節ごとのゲルの建て直しやハシャー（板で囲った敷地）内の建設作業等では常に協働体制が採られ，その関係はコロナ禍での食べ物や必要物の相互扶助とも重なっていた。これらの協働関係には，遊牧民の伝統的互助関係（ホト・アイル）にも通じるものが伺われる。

⑤インフラ

電気，水配給所や洗濯場等の設備，保育・学校制度や医療制度等の基本的なインフラが，今日のゲル地区では比較的整っており，人々は住まいや生活をより充実させようと常に手を加えている。この志向は同時期にインタヴューを行った遊牧民にも共通し，質素なゲル生活でも，内部の整理整頓が行き届き，太陽光発電やパソコン・携帯電話の利用は非常に活発であるし，遊牧にも積極的にオートバイのみならず車等も活用している。

以上は，決して施設出身者だけの特徴ではなく，一般の若い世代に共通する現代モンゴルの人々の行動パターンの一部として敷衍できると思われる。従来，否定的に語られがちであったゲル地区における暮らしのあり方とその変化を，今後も実証を重ねながら，「しなやかな自場形成」の場として追っていきたい。

謝　辞

本研究は，東京国際大学の研究助成「家族共同体の変容が及ぼすモンゴル養護施設児童の自立に関する研究」（2016年度）及び，JSPS科研費「モンゴル都市貧困母子の『自場』の形成過程―『当事者支援』から『生活者の協働』へ」（18K02162 ／ 2018―2022年度）の助成を受けたものである。私たちの研究協力者であるニーマ・ムンファジャルガルさん，ナラントヤ・ズモーリンさん，調査に協力してくださった皆様に心から感謝します。

注

1）唯一と言えるかもしれない先行研究として山下らの研究がある（山下英三郎・林令子「モンゴルにおける児童自立支援に関する考察：養護施設退所者の追跡調査から見えてきたこと」『社会事業大学紀要』2007：pp. 117-128）．彼らは退所後の青年たちの生活把握がなされていないことを問題視して6人の退所者を追跡インタヴューし，自立を支援するソーシャルワーカー養成を提言したが，若者自身の生活の形成過程については述べていない．

2）路上で生活するストリートチルドレンのこと．寒さを避けるために，ウランバートルの地下に張り巡らされた暖房用のスチームパイプ点検用のマンホールを住居としている子どももおり，このように呼ばれた．1998年ピーク時で約4,000人の子どもが路上生活していた．

3）島村一平，『憑依と抵抗』，晶文社，2022：p. 130.

4）外務省，「モンゴル基礎データー」，2023年8月15日．

5）松宮邑子，『都市部に暮らすモンゴル人：ウランバートル・ゲル地区に見る住まい空間』，明石書店，2021：p. 13.

6）その他，イフ・ホトなどの名称もある．イフは大きい，フレーは遊牧集団の駐営方式である環＝クリエンに由来する．その後，チベット仏教が普及すると移動寺院の意味でも使われるようになった．中国語では，フレーは「庫倫」，ロシア語では，モンゴル語で宮殿を意味するウルグーに由来し，「ウルガ」と呼ばれた．（佐藤憲行，『清代ハルハ・モンゴルの都市に関する研究：18世紀末から19世紀半ばのフレーを例に』p. 36の注1）．

7）フレーは，その後土地が汚れたなどの理由で2度移動し，最終的定住は1855年．

8）佐藤，前掲書，p. 12.

9）N.ツルテム監修，『モンゴルの曼荼羅（モンゴルの美術1）』，新人物往来者，1987：図155．撮影：杉山晃造，原図は作者不明，ガンダン寺所蔵）より転写．

10）包慕萍は，内モンゴルのフフホト建築史を例として，このような都市のあり方を「遊牧都市」と提示している．著書の「あとがき」でウランバートルに調査に訪れ，ビル群とゲル群から構成された景観を見た時に，今も遊牧都市が引き継がれている証に見えたと述べている．（『モンゴルにおける都市建築史の研究：遊牧と定住の重層都市フフホト』東方書店，2005：p. 294.）このような包の見解に対して，小長谷は建築群からだけではなく周囲との関係の築き方によって都市のあり方を考えるべきと指摘している．(小長谷有紀．＜書評＞（包慕萍著同上書）東洋史研究 2006，64(4)：pp. 769-778.）また，深見は包の論文の背景にモンゴル伝統文化への理想的幻想と遊牧生活への憧憬があると評している．（深見奈緒子，＜書評＞（包慕萍著同上書）建築史学，2005．45巻，pp. 215-225）しかし，遊牧と都市を拮抗させてきた既存研究に新しい視点を与えた包の問題提起の意義は今も大きい．

11）宮脇淳子，『モンゴルの歴史：遊牧民の誕生からモンゴル国まで』，刀水書房，2002：p. 238.

12）松宮，前掲書，p. 53.

13）石井祥子,「遊牧の国の首都ウランバートル」『草原と都市：変わりゆくモンゴル』，風媒社，2015：p. 100.
14）現在のゲル地区は丘陵地に広がっているが，当時は平野部に限られていた．石井，前掲書，p. 101.
15）松宮，前掲書，p. 55.
16）松宮，同上書，p. 57.
17）私たちのインタヴュー対象の一家族も二重登記に巻き込まれ，居住ゲルからの退去を迫られている状況にあり，困惑していた．ウランバートルの都市問題については，村井美紀，田村愛理，植村清加「モンゴル社会変革期における女性の「自場」形成：フェルト産業を中心にして」『東京国際大学論叢　人文・社会学研究』第4号，2019：pp. 37 ～ 38でも既に述べた.
18）2019年6月調査時の水の値段は，1ℓ = 1 Tgであったが，2023年3月では，1ℓ = 2 Tgになっていた．水は地下の貯水槽に給水車で毎日運ばれる．(2023 年3月の交換レート1 ¥ = 26.5 Tg).
19）島村一平，前掲書，第1部3を参照.
20）この土地は江戸時代までは，尾張徳川藩の下屋敷であったが，明治以降に陸軍の各種学校用地となった．そのため，筆者の幼少期には新宿の真ん中にあって緑深く，雉や梟などがまだ生息していた.
21）古賀繭子，定行まり子,「1940年代から1970年代における住宅及び団地内施設の実態：戸山ハイツの歴史的経緯に関する研究　その1」,『日本女子大学大学院紀要　家政学研究科・人間生活学研究科』第20号，2014：p. 63.
22）古賀繭子，定行まり子，同上論文，p. 63.
23）結局，組合は潰れて最終的には，精肉店や青果店などの個人商店街が公衆浴場のすぐ側にできた.
24）因みに，住宅難を解消するべく1955 年に設立された日本住宅公団が戦後初めて供給した鉄筋コンクリート公団住宅は，大阪の金岡団地900戸である．この団地は全て2DKでステンレス製ダイニングキッチンは若い層に憧れの的であったが，現在は老朽化により建て替えが行われている.「1956 ～ 第1号団地の誇りと記憶を引き継ぐ広場に集う，金岡団地」『古くて新しい団地の未来（1956 ～)』，UR 2015 Vol. 43 UR都市機構の情報誌，ur-net.go.jpより，2023年9月16日参照.
25）宮城まり子主演の資源回収業者（当時の呼称はバタヤ・ばた屋）の集落を舞台にした映画は，1956年の「ボロ靴交響曲」（白黒）と1958年の「オンボロ人生」（カラー）の2本がある．カラーと記憶しているので後者であろう．東京のバタヤ地区は，1950年代の文芸等に頻繁に登場したが，60年代の高度成長期に消滅していった．これについては，本岡拓哉,「戦後東京,「バタヤ」をめぐる社会と空間」『ジオグラフィカ千里』第1号（2019)，pp. 93-117．を参照されたい.
26）松宮，前掲書，p. 204.
27）ホトは「家畜の寝るところ」，アイルは「家，家族，隣人，近隣」の意.
28）松宮，前掲書，p. 236.
29）石井祥子，前掲論文，p. 111.
30）例えば，UNICEF, “Street and Unsupervised Children of Mongolia” 2003，モンゴルにおけるストリートチルドレンの現状」長沢孝司ほか編『モンゴルのストリートチルドレン』朱鷺書房2007，照屋朋子「モンゴルの『マンホールチルドレン』の保護活動に関する考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』27号-2，2020など.
31）デルゲルマー. A「児童養護施設に収容された子どもたちの状態」長沢孝司ほか編，前掲書, p. 79，照屋，同上論文，p. 180.
32）UNICEFは保護後も施設ではなくマンホールを選ぶ子どもや，退所後マンホールに戻るマンホールアダルトの存在を課題に挙げている（UNICEF 2003，デルゲルマー，前掲書，p. 95)．また，山下らは子どもたちがひとつの劣悪な状況（路上や家庭）からもう一つの劣悪な状態に移されるだけの「保護」や，施設生活を余儀なくされた後，一定の年齢になると十分なサポート体制もないまま退所させられることを問題視し，子どもと家庭を支援するソーシャルワーカーの養成が急務と指摘した（山下・林，前掲論文，2007：pp. 117-128).
33）山下・林，同上論文.
34）祖父はもと僧侶で地方出身者である．母のキョウダイは5人，全員ウランバートル生まれだが，現在，交流はない.

35）子どもの足では遠いが，ウランバートル市内・西側にある鉄道駅周辺では列車からこぼれた石炭が手に入ったため，兄や妹と一緒に拾いに行っていたという．

36）合併経験者らによると，2つの施設は全く運営タイプが異なる．チメグさん姉妹が最初に入った施設は，学校のあと外で遊んだり，自由に過ごせて楽しい思い出があるという．合併先施設は男の子や年齢が上の子どもが多かったからか，時間ごとに活動内容が決まっている管理主義的な体制だったという．

37）筆者がここで「隙間」と呼ぶのは，物理的空間および社会関係的につくられる空間を指す．例えば，転換期に出現したマンホールチルドレンが暮らした「マンホールのなか」は，国が用意した家ではない．それは，路上に投げ出された子どもたちが，厳冬期に零下30度以下となるウランバートルという都市の物理的な空間のなかで暖を求めて見つけ出した「都市の隙間」であり生活空間だった．同様に，地下室や屋上，空き地，寮や学校の一角等も人々に柔軟に活用される隙間空間である．また，誰かが他者を自分のスペースに受け入れることでつくられる，関係性によって生み出される生存空間も，ここでは隙間と表現している．

38）Address and Identification Center. 国連が1989年「児童権利条約」を採択すると，モンゴル政府は1990年に批准し「ストリートチルドレン一時保護法」を成立させた．1996年にはウランバートル市警察の関連機関として住所確定所を設立．市民の通告を受け警察がストリートチルドレンを保護し，家庭環境や住所等の調査や親と連絡を行い，子どもを親元に戻すか施設に入所させるか等を判断する．デルゲルマー，前掲書，p. 83.

39）LET：Labar and Education and Training Center. 行き場のない7歳から17歳の子どもに住居を提供し，教育と就職を支援する訓練センター．1999年設立．子どもたちはほとんどが住所確定所からくる（照屋，前掲論文，p. 179）．2003年には18歳以上の年齢に達したために施設を退所した若者のための職業訓練センターが設立され，職業訓練による自立支援がはじめられた（山下・林，前掲論文，p. 119）．World Visionなどの国際NGOが小規模グループホームの創設等を行い，18歳以上の子どもの支援活動を行った．

40）「定職がない」という表現ではあるものの，このような働き方，特に季節によって仕事が変わらざるを得ないケースは，調査で聞く限り，少なくはない．

41）モンゴル語では，「家族や宿営するail buukh」「ゲルの裾を合わせて生活するkhayaa niilulen amidrakh」という住文化に固有の共同生活を指す語彙で表現されるものを滝口らがこのように名付けたものである．滝口良，坂本剛，井潤裕「モンゴル・ウランバートルのゲル地区における住まいの変容と継承」住総研研究論文集，No. 43，2016：p. 117.

42）労働法が改正され，遠隔地の鉱山現場で交代勤務をする鉱山労働者に対し，2022年から14日勤務／14日休暇体制が保証されることになったが，その後の2023年調査時点でもバータルさんの職場にはまだ導入されていないようである．

43）ただし，社会主義体制下のゲル地区のハシャーは，国有という単一の所有制度に基づいたものではなく，国有の土地の利用権の譲渡や，住民の私的所有が認められる「生の財産」とされた家屋や柵は売買可能だった（滝口良「つぎはぎの所有――社会主義体制下のモンゴルの都心部における『生の財産』と居住空間の構成」，『北海道民族学』，第9号，2013：pp. 7-8）．ウランバートルの土地の権利意識や購入・売買が進んでいるのは確かなものの，ハシャーという居住空間を人々がどのように活用しているのかについては一つの現象として説明するべきではないのかもしれない．

44）社会主義時代，ウランバートルでは住民組織によるハシャーと近隣の土地の整備や街路の整備，衛生や火災予防を行う啓蒙活動が組織されてきた（溝口，前掲論文2013：p. 6）．住宅が集まる地区でもあり，現在でも衛生や火災予防に関して住民間の行動を方向づけるものが存在する可能性は高い．今回の調査で明らかにすることが困難だったゲル地区の住民関係やセルフビルド実践と周辺地域の相互反応等については今後の課題としたい．

45）モンゴルでは，4人子どもを出産した女性に「優秀母」勲章第2号が，6人子どもを出産した女性に「優秀母」勲章第1号が授与される．

46）これには，男性には学歴や資格がなくても生活できる様々な仕事があるが，女性が経済上の安定と機会を得るには学歴や資格が大事だとして，娘に高教育を与えてきたモンゴルの生活習慣や考え方にも要因があると思われる．

47）日本では2022年6月の児童福祉法改正案で，養護施設の支援上限年齢（原則18歳）が取り払われた（施行は2024年4月）．しかし，現状では彼らが大学以上の高等教育を受けるには，学費・生活費・居住場所・メンタルケア等さまざまな困難に直面しているのが実情である．

高齢者のワーキングメモリを測定する
——日本語版リーディングスパンテストを開発した芋阪満里子へのインタビューから——*

高　砂　美　樹
名　取　洋　典
鈴　木　朋　子

Measuring the Working Memory of the Aged: An interview with Mariko Osaka, the Developer of Japanese Reading Span Test

TAKASUNA, Miki
NATORI, Hironori
SUZUKI, Tomoko

Abstract

In the project of oral history research in the history of psychological testing, we interviewed Mariko Osaka, former professor of psychology at Osaka University. She has developed the Japanese Reading Span Test and has been applying it to various generations of people. This test is especially susceptible to working memory, which suggests that the test could be effectively applied to the aged. In the interview we recognized how she could develop the test and also found an important relationship between the basic research training and the attitude toward clinical phenomena during the phase of undergraduate and graduate course.

Keywords: Japanese Reading Span Test, working memory, Mariko Osaka, psychological test for aged, oral history

目　次

1. はじめに：ワーキングメモリを測る
2. 苧阪満里子氏インタビュー
　2.1　学生時代について
　2.2　大学院での研究，α 波，Task difficulty
　2.3　心理検査との出会い，ワーキングメモリの研究へ
　2.4　RST研究
　2.5　RSTの評価点の時代による変動と他テストとの比較
　2.6　高齢者版RST
　2.7　子どものRST，脳のネットワークへの展開
　2.8　RSTのノルムについて
　2.9　知能観，こころ観
3. インタビューを終えて

1. はじめに：ワーキングメモリを測る

私たちはこれまで知能検査や心理検査の開発に携わった人々に対してインタビューを行うオーラルヒストリー研究を行ってきた（例えば，鈴木・名取・高砂，2023）。オーラルヒストリーによる心理学史研究の意義については，資料としての価値を補完するという側面が強く，資料の少ない時代の情報や，パイオニア的な研究を行っている人々が記録にはとどめていないものの凝らしている工夫などを知ることができるほか，その時代には当然視されていた慣習なども描き出すことができる（高砂・鈴木・荒川・サトウ，2015）。殊に知能検査の開発にあたっては，多くの利用者が関わっていることもあり，その誕生や改訂は標準化されたものとして当然のごとく見なしてしまいがちであるが，その検査の背景にある時代の要請あるいは開発者の哲学については公的な文面から知ることはできないことが多い。

知能検査や心理検査の開発に携わった人々に対してインタビューを行うなかで，私たちは記憶課題に特化した検査の開発についても関心を寄せてきた。そもそも知能検査の歴史のごく初期から，数字の復唱課題や記憶力を問う課題が検査項目のなかに含まれていたことは知られている。短い限られた時間のなかで一時的に覚えていることができるかを問うこれらの課題は，知識を問う課題とは異なり，いわばワーキングメモリを問う課題でもある。

ワーキングメモリ（working memory）という用語は，古くはゴールトンの著書*English men of science*（Galton, 1874）にも出てくるが，そのちょうど100年後にイギリスの認知心理学者バドリーとヒッチによって書かれた論文（Baddeley & Hitch, 1974）によって，それまでの短期記憶に代わる新しい概念として提唱された。バドリーは健忘症の人々の記憶実験も行っており（Baddeley & Warrington, 1970），臨床的にも有効な記憶システムの理論化に早くから関心をもっていたことがうかがえる。さまざまな記憶研究者がいるなかで，私たちが苧阪満里子氏に話を聞こうと計画を立てたきっかけは，2020年に出版された『高齢者のもの忘れを測る：リーディングスパンテストによるワーキングメモリ評価』（苧阪，2020）を読んだことであった。この書籍は研究の概要を知ることができるだけでなく，そのまま検査用具として使用できるところが注目に値する。このユニークな検査法がどのように開発されてきたのか，著者の学部時代からの研究履歴とともにうかがうことにした。

2. 苧阪満里子氏インタビュー

インタビューの対象（インタビュイー）である苧阪満里子氏は，1950（昭和25）年生まれで，1973年に京都大学卒業後，京都大学大学院教育学研究科に進み，1984年に「知的活動時の脳波変化に関する基礎的研究」で教育学博士号を取得した。1985年に大阪外国語大学助教授，2001（平成13）年に同大学教授となったあと2007年に大学統合により大阪大学大学院人間科学研究科教授に移籍し，2016年春に定年退職している。

今回のインタビューにあたってはまだCOVID-19の影響が残ることから，オンライン（Zoom）にて2022年7月27日（水）の午後3時から1時間半ほどかけて行われた。インタビュアーは高砂美樹，名取洋典，鈴木朋子の3名である。事前にどのような趣旨でインタビューを行うものかについてメールで知らせ，事後に文字起こしをしたものを送って固有名詞などの確認は行っている。以下のインタビュー原文においては，長文になることもあり，恣意的に小見出しをつけて区切ったものを掲載した。

2.1　学生時代について

高砂：先生のご略歴のところでうかがいたいのは，東大にしても，京大にしても，心理を教える学部が2つ以上ありますね。

苧阪：そうなのです。私の学歴としては京都大学の教育学部ですが，当時は教育心理学教室と言っていました。

高砂：そうすると，先生としては，どなたが恩師に当たりますか。

苧阪：卒業論文のときは倉石精一[1] 先生という，河合隼雄[2] 先生の前にいらした臨床心理学の先生でした。大学院は，梅本堯夫[3] 先生と百名盛之[4] 先生です。

京都大学には文学部と教育学部と2つの心理学の研究科があります。文学部のほうが古くから伝統があり，そこの教育学講座から教育心理学講座が生まれました。教育学部ですけれども教育心理学教室がありまして，そのもとには，私がまだ在籍していたころは臨床心理学と教育心理学が並行してありました。独立したような体制はとっていませんでした。私は教育心理学教室に属していましたが，共通の授業もありまして，臨床心理学の講義や，実習を受けました。大学院でも大学院コロキアムという授業がありまして，領域を問わず大学院生の発表を聴き，もちろん発表もしました。私自身は教育心理学で卒業論文を書きました。

私がテストに対して違和感がなかったのは，一つには，2回生の頃に心理学のイントロダクションの心理学実習と呼ばれる実験実習があり，梅本先生の記憶実験や知能テストなどのテスト演習の授業がありました。また，それに加えて臨床心理学の検査実習もありました。その実習では，ロールシャッハ法やTATのような臨床心理検査も経験しているのです。そうした実習が後々の役に立つこともあって，つい10年ぐらい前には，その当時に実習を経験したPFスタディを使って脳の画像を撮ったこともあります。というように，いろいろな勉強をさせてもらいました。

大学院では，教育心理学講座で修士課程と博士課程を修了しました。その時には河合隼雄先生が来られていて，直接の私の指導というわけではないのですが，私の学位論文の主査は梅本先生，副査は河合隼雄先生でした。

すごくユニークだったのは，2回生のイントロダクションが，文学部と共通にやっていたことです。ずっと続いていたわけではなくその後は無くなったのですが，文学部の学生達と共通に実習を受けました。文学部は柿崎祐一[5] 先生がいらして認知，特に知覚研究の専門の方が多かったですから，重さや長さの弁別とか，そういう実習も受けました。

文学部，教育学部だけではなくて，その当時は教養部がありまして，そちらにも先生方がおられたのです。例えば社会心理学の木下冨雄[6] 先生や発達の中島誠[7] 先生です。さらに，また，大学院時代には東京大学ご出身の中谷和夫[8] 先生という数理心理学がご専門の先生が来られました。

高砂：専修大学に行かれた先生ですか。

苧阪：そうです。東京大学へ行かれた後に，専修大学へ着任されました。中谷先生からは多変量解析の授業を受けました。私は，それで勉強させてもらったおかげで，脳波の多変量解析に違和感なく入っていけました。大学生時代に受けた授業というのは，その場で役に立つわけではなくとも，本当に何十年後かにとても役に立つというか，そういうものが身に付いているというのはとてもいいなと自分でも思います。

高砂：先生は博士論文で脳波を取られていると思いますが，そのときには記憶ですか。脳波のどのようなことをターゲットにされたのですか。

苧阪：実は，私は卒業論文のときから脳波を取っているのです。脳波測定，特に記録は，困難を伴う時代でした。脳波というのは自発的に発生しています。高砂先生ご専門ですよね。

高砂：でも，私は動物研究だったので……脳波は，今のようなきれいなものではなくて，べたべたに髪にくっつけられてやっていたころのことです。

苧阪：私もそうです。私は学部の4回生のときに，誘発電位の加算平均装置が日本光電から初めて導入されました。早速，大学院生と一緒に使わせていただきました。ATAC201というのです。

人間の脳波というのは，アルファ波などはすごく振幅が大きいものですから事象関連電位はそこに埋没してしまいます。数マイクロボルトの単位です。だけどそれを何回か重ねると，脳波のアルファ波などをランダム化してしまって，刺激に対して1秒間以内に出てくるような有意な反応だけを取り出し加算して明らかにできるのです。ATAC201は，2チャンネルしかなくて，2つの領域の誘発電位ですが，それが自動的にできるようになった装置です。100回ぐらい同じ刺激を，参加者さんには大変恐縮なことをしていたと思うのですが，見ていただきました。その装置がありましたので，卒業論文のときに，人間の誘発電位にはどのような特徴があるのかというのが分からなかったのですけれども，ともかく測定しました。

その当時には，すでに1930年代にベルガーのアルファ波の発見以後，脳波に知能の差（知能テストで測定した結果）が認められると指摘されてきたので，どうなのだろうという興味がすごくあったのです。そこで普通クラスの中学生と特殊教育を受けている中学生たちで測定してみたらと教育大の先生に勧めていただき測定しました。測定は初めてですからそれほど適切に測定できたわけではないのですが，30人位に参加してもらいました。そうすると，知能テストの得点が低い値の中学生たちの中には，同じ年齢の普通クラスに通う中学生とほとんど差がない人が何人かいるのです。これはどうしてなのだろうという疑問点もあって，脳波や誘発電位がどの程度，人間の脳の認知機能や働きを表現するものだろうというような疑問を持って，大学院に入りました。余談ですが，最近になってこの時に参加していただいた中学生の一人から話を聞けました。実験を憶えていてくれていたようです。

2.2　大学院での研究，α波，Task difficulty

苧阪：大学院に入ったら，誘発電位や事象関連電位よりもまずアルファ波をやってみないといけないと思ってアルファ波の研究をしました。アルファ波の指標のなかでもリズムに関心があったので，アルファ波ピーク周波数を手掛かりにして研究をしていきました。ただ，ピーク周波数というのは，最近は注目されているのですけれども，そのころはほとんど注目されていなかったの

です。

パワーポイントを見ていただいたほうがいいかもしれません（ここでパワーポイント資料提示）。こういうアルファ波のパワースペクトルの一番高いところの周波数が課題によってどのように変わるかというのを見ていったのです。Task difficulty，つまり容易な課題と難しい課題でどのようにアルファ波が変わるのか，ピーク周波数はどのように変化するのかが自分の中での疑問だったのです。Task difficultyの定義というと，解答を得るのに長くかかるから難しい課題かというとそうでもありません。では，容易な課題と難しい課題はどう違うのか。ひょっとしたら二重でやらないといけないものはとても難しいのではないかという考えを自分の中で持っていました。

例えば，容易な課題は数字を加算していくだけで，難しい課題はどうするかというと，その中で素数のみを加算するというものです。1から順に例えば7は素数かなと考えて，それを加算するのです。このような数字の課題に対して，左右半球差も比較しました。空間的な課題で容易な課題というのは図形を単に比較するだけで，難しい課題は心的に回転させて同じかどうかということで，やる人がすごく大変だったのですがこのようなことをやってみたのです。その結果，難しい課題でピーク周波数のシフトが大きいという結果が出たので，これがPsychophysiology誌に1984年に載りました。[9)]

このような結果が得られたのですが，Task difficultyというのは容易な課題と難しい課題で，難しいというのはどういうことかというと，素数かどうかの判断をしながら加算結果を保持して，心的な空間課題というのは図形を心の中で回転させながら元の図形を保持するということで，二重に処理をしていかないといけない，操作と保持の2つをやらないといけないということです。

ではこれは何だろうというのですごく自分で考えていたところ，ちょうどワーキングメモリの概念が出てきたのです。1980年に次に紹介するテストが開発されていますので，ちょうどそのころでした。それで，難しいと言っているけれども，いわゆるワーキングメモリが必要かそうでないかによって随分課題の難易度が違うということに気づきました。ここのような脳波の研究について学位論文を書き，それを『ワーキングメモリの認知神経心理学的研究』（苧阪，1994）にまとめました。

2.3　心理検査との出会い，ワーキングメモリの研究へ

鈴木：心理検査の出会いは，学部2年生のときの他の心理検査との出会いからということになりますか。

苧阪：最初はそうなのですが，ただ京都大学の教育心理学研究室というのは，ご存じだと思いますが，NXという知能検査（現在はNX検査）の開発が行われてきました。私は直接分析したわけではないのですが，学部生時代に大学院生が高等学校などにデータを取りにいくお手伝いをしたりしていました。SXを開発されている頃だと思います。

高等学校へ行って練習試行の説明で，「おかあさん」の「あ」のところが空白になっていて，「あ」を入れたら意味のある言葉になりますねと話をしたら，高校生は生意気だから，「おかみさん」でもいいのではないかと言われて，どうしようかと思ったことをいまだに覚えています。

鈴木：それはやはり誤答に分類されるのですか。

苧阪：そうですよね。誤答です。でも「おかみさん」でもいいなと思い，とりあえず思いつく文字を記入するようにと説明しました。しかし，本試行の中の単語には意味が二つ以上になる言葉は含まれていませんでした。また，幼稚園児の知能テストの測定の手伝いをしたことが結構あります。鈴木ビネーのひもの結び方や3つの仕事などを実施しました。3つの仕事は面白く，また身

体を動かすので幼児の緊張もほぐれますので，私は今でも幼児の実験のときは3つの仕事も別にやったりしています。また，反対方向から見たらどのように見えるかという，いわゆる三つ山問題に類似した課題も加えています。

このような次第で，検査というものに関しては割とすんなりと，ごく当たり前のように，絶対的なものではないけれども評価は評価として重要である，何を評価しているかということに対してはできるだけ理解を深めることが必要だと思いました。個人差というのが私の中では結構大きな役割を占めています。

それからワーキングメモリの測定に入っていきました。リーディングスパンテスト（Reading Span Test，以下RST）というのは，アメリカのカーネギーメロン大学でメリディス・デイネマン（M. Daneman）[10] が当時所属していたカーペンター（P. Carpenter）とジャスト（M. Just）の研究室で開発したテストです。そのRSTが短期記憶（Short Term Memory，以下STM）を測定するテストとどう異なるのかというと，ワードスパンテストというのは，「桜，雪山，犬」と聞いて，しばらくおいて「何でしたか」とその再生を求めるものです。RSTはそうではなくて，「庭の木に桜が咲いた」「夜行列車に乗り雪山へ行った」「散歩に出掛けて犬と出会った」と口に出して読みながら1つだけ単語を覚えてくださいとうことで，その中の単語だけを覚えるテストです。そしてRSTにより測定されたワーキングメモリの個人差にどのような特徴があるかを見て，それによってワーキングメモリというのはどのような特徴を備えていて，高い人と低い人は何が違うのかということを考えていく研究を続けてきました。1990年ぐらいからですから，だいぶ長いですよね。

余談ですが，以前にシンポジウムで話したとき，一般の方に混じって高校生が招かれていたのです。高校生だけ特別に終了後に違う部屋で質問させてやってくださいと言われるから，私と登壇した先生方もそれに付き合ったことがありました。高校生はどのような質問をするのかと思ったら，なぜ同じことを長く続けてやれるのかというものでした。彼らはどんどん違うことをやります。同じことをどうして続けられるかと尋ねてきたのです。何と答えたかは忘れました。

高砂：ワーキングメモリのことで少し確認したいことがあります。私は動物実験なのですが，80年代に入るぐらいから，動物のほうでも，脳損傷でワーキングメモリとリファレンスメモリということで，うちの研究室で盛んにやっていました。そのときにまだ定訳がなかったので，リファレンスのほうが参照記憶という大枠の記憶で，ワーキングメモリのほうは作業仮説と同じだから作業記憶といってみんなで論文を書いていました。ところが，90年の頭だったと思うのですが，心理用語集のようなものが当時の文部省の関係で出てきたときに，「ワーキングメモリ」が「作動記憶」という訳になっていました。みんなでとても違和感を覚えて「これに従うの？」と言っていたころに，苧阪直行先生の本に片仮名で「ワーキングメモリ」と書いてあるのを見て，「これでいいではないか」とみんなで思ったことがあるのです。苧阪先生は，この用語についてどのように思われますか。

苧阪：単に作業だけするようなところでもないし，作動というか，ワーキングメモリという単語自体はコンピューターの概念の中にもあるのですけれども，何か作業だけの領域というものではないと思いまして，そのものでいいのではないかということで「ワーキングメモリ」をずっと使ってきました。

高砂：そうなのですね。

苧阪：はい。特に呼び変えたりしないのですけれども，「分からない」と言われるといけないから，数年前までは時々，括弧して「作動記憶」と書いたり，「作業記憶」と書いたりしていました。最近はあまり言われることもないので，「ワーキングメモリ」とそのまま使っています。

高砂：ありがとうございます。

2.4　RST研究

苧阪：そのような次第で，ワーキングメモリ研究にRST測定を続けてきました。途中，文の一部を変えましたが2002年[11]が2回目の改訂版です。当初は，バインダーにとめています。これは見ていただくのが一番いいです（資料参照，2穴ファイル，片面に1文の文章が印刷されている）。

鈴木：手作り感があります。

苧阪：白紙に文を書いて，その中で「母」というところに線が引いてあります。「電車に乗り遅れたので母に車で送ってもらった」というものです。2文条件から5文条件まであって，これは「3文」と書いてあるから，次から3文ですということです。大学生を主としてやっていましたから，大学生対象のものです。ここにたくさんの付箋があるのは，次のページにすぐに移らないといけないからです。紙をスムーズにめくれるように，こうしています。

1992年には，日本語文と英語文を使って，ワーキングメモリが言語に依存しないことを報告しました。[12] 1994年には心理学研究に，苧阪直行と共著でRSTの測定結果を掲載しています。[13]

最近は，パソコンで提示して，マウスを使って次の文の提示をしています。PCの画面の前に座っている人が実験参加者です。側面でマウスを持っている人が実験者です。PCに提示された文章を口に出して読んでもらって，読み終わったらすぐに次の画面に切り替えます。そして，3文条件だったら3文を繰り返して，その後，「3つの単語は何でしたか」と質問します。例えば，「水泳をしているためか，母は最近とても元気である」「その花は熱帯の植物なので，北国の寒さには弱い」「雷のため，電車の切符の販売機が故障した」のあとに「では，3つは何でしたか」というように，です。読みながら3単語を記憶する事は，意外と難しいのです。RSTの他にもリスニングスパンテスト（Listening Span Test：LST）も作成していまして，その場合は聴き取りですので，赤線を引くわけにもいかないので先頭の単語にしていますけれども，その先頭の単語を覚えてくださいというテストです。

このテストが開発当初から興味を持たれたのは，言語の読解力との相関が高かったからです。これを開発したころ私は大阪外国語大学にいましたので，学生さんは言語に興味のある方が多くて，また言語学の先生もおられたので，いろいろ教えてもらうこともあって，何かと工夫しました。

言語読解力はどのような能力と相関するのかというと，短期記憶と相関するのではないかと多くの研究者により検討されました。ワーキングメモリという概念を認知心理学に取り入れたアラン・バドリー[14]自身も記憶の心理学者ですから，そうした疑問を持っていました。しかし，多くの研究で短期記憶と言語読解との間にそれほど高い相関が得られていませんでした。ところがこのテストは非常に高い相関があることがわかったのです。

実際に私が大学生を対象にして読解力テスト（当時センター試験と呼ばれていた大学入学共通テスト国語の問題）の成績とRSTの相関を試したところ，0.69 ～ 0.78の高い相関が得られています。ところが，その同じ参加者の人たちのRSTの評価値と数字と単語の短期記憶の評価値の間には有意な相関は認められませんでした。

ちなみに大阪外国語大学は外国語学習が主な特徴でしたので，英語が不得意という学生は少なかったです。英語専攻の学生さんのRSTのスパン平均値は3.18でした。デイネマンが実施した結果でも，大学生は3.1で同じくらいの値でした。カーネギーメロン大学はどちらかというと理系ですけれども，それでも結構同じぐらいの値でした。

2.5　RSTの評価点の時代による変動と他テストとの比較

苧阪：このように3.0ぐらいが平均値だということでやってきたのですが，大学生のRSTの評価値がだんだん悪くなってきました。これは問題だと思います。

それで仕方がないので，2002年に少しだけ変更しました。文章が難しそうなところをなくしたのです。そして細かい話で恐縮ですが，言語学的に言いますと，英語と日本語では文の構造が全然違います。デイネマンが作成したRSTでは，ターゲット語はファイナルワード，最後の単語です。英語の最後の単語というのは，エンドフォーカスという特徴があって，その文の中で重要な位置を占める単語が来るという特徴があります。ところが日本語はそうではなくて，重要な単語がいろいろなところに出てくるという特徴を備えています。また，日本語では最後の単語の多くが動詞になります。

そういうことも加味して，文の中の重要な単語，フォーカス語と非フォーカス語というのを分類して，それぞれをターゲット語にして比較するテストなども開発しています。フォーカスRSTと，ノンフォーカスRSTの比較です（Osaka *et al.*, 2002）。そうするとやはりフォーカス語がターゲット語になると正答率は高くなるのです。そうでなかったら低くなるので，それを調整したのが2002年版のものです。最近はもっと点数が低下しているから，いっそのこと変えずに来たら違いがよく分かってよかったのかなと思うのですが。

鈴木：点数の低下というのは，年代によって学力が落ちているということですか。

苧阪：そうなのです。学力というか言語読解力が落ちていると思います。

2007年に大阪外国語大学と大阪大学が統合されましたので，私は大阪大学の人間科学研究科に所属を変えました。それで阪大で参加者を募集してRSTを受けてもらったりしたことがあります。理工系の男子学生が多かったと思うのですが，RSTの評価値があまり高くなかったです。彼らが理系だからでしょうか。

アメリカのワーキングメモリの心理学研究者のエングル[15]達は，リーディングスパンテストは文を使っているので文の理解力と関係があるのはないかと考えて，文ではなく算数課題にしたオペレーションスパンテストを作成しました。最近，それを使っている人が多いです。文章は作りにくいからでしょうね。算数課題は（2×3）－3＝4などで，これが正しいかどうかの判断と，その数式の最後に書かれた単語（例えば，植物）を記憶する課題です。こうした数式の正誤判断と単語の記憶を2桁から増加させます。すると，オペレーションスパンテストも言語の読解力と相関が認められています。

そうしたら，結局RSTのような複合スパンテストは何を測っているのかということで，先ほど言っていましたが，一般的な短期記憶の測定ではないということです。このように，複合スパンテストは，文を読んだり，数式を回答したりしながら，その一部を記憶するという二重課題に必要なワーキングメモリの測定ということになります。

ワーキングメモリの容量は，短期記憶の容量に比較して少ないことがわかっています。短期記憶の容量は，G. A. ミラーの論文でのマジックナンバー7±2というのが有名ですが，私の指導教官でした梅本堯夫先生は心理学の記憶の講義のなかで短期記憶は7が基本で，1週間が7日以上あったら絶対デートの記憶も覚えられないと言って学生さんを笑わせてられました。

ただ，ワーキングメモリになるとそんなには覚えられません。だいたい，3±1ぐらいです。その3というのは，RSTの平均値ともよく合うのです。

2.6　高齢者版RST

高砂：先生，例の高齢者のもの忘れの例題は，最新版になるのでしょうか。

苧阪：はいそうです。これは高齢者を対象として作りましたので，1文条件から作成しています。大学生を対象とするものは2文からやっているのですけれども，高齢者版は文章も比較的短めです。高齢者の方も，あまり難しくてできなかったら，やる気もなくすだろうと考えた次第です。

高砂：そうですね。

苧阪：高齢者版は2020年に出版した本に掲載されています。[16]「テストに対するきっかけ」を質問されましたが，本の中に綴じこんだのは，私が学生時代に，知能テストを実施するために幼稚園によく通っていたので，子どもたちと向き合って話すときや，回答しているときの様子を見ることが記憶に残っています。どんなことを思いながらやっているのかなどいろいろなことを考えるのです。それがあるものですから，パソコンで，横を向いてディスプレイだけを見ながら解くということに対して，本当はそうではなくて実際に面と向かい合ってできたらいいなという気持ちがありました。特に高齢者さんの場合は，ディスプレイが見にくいこともあるかもしれないから，紙芝居版がいいということで出版社さんに無理をお願いして作ったのです。ところが作った途端にコロナ禍になって実施できなくて残念なのですけれども，できれば高齢者施設や物忘れ外来あるいは施設などでやる場合には，こういうものを見ながらやってもらって，評価値だけでなくテストを受けながらの様子が，何かの助けになればと思って作ったものです。本の中には，実施方法の説明があまり皆さんに伝わっていなかったので，それも書かせていただいたわけです。

高砂：元々の文章はどのようにして選ばれているのですか。

苧阪：文章は，成人版という大学生を対象にしたものは，中学校と高等学校の国語のテキストからとってきたものが多いです。それを文の難易度評定（文の分かりやすさ）を評定して，その中から，難易度があまり偏らないようなもので，しかも読みやすさ，口に出して読んでもらうのであまり難しくてはいけないということで選びました。その後，少し修正したのは，フォーカス語が他にあって，そうではない単語を選んでいる個所もあるので，それを少し易しくしました。それから，メリディウス・デイネマンが作成した英語のRSTをもらっていましたが，そこではターゲット単語が名詞以外に，動詞や副詞があります。日本語の文末語は動詞がほとんどなので，文末語以外の文中単語を選んで，できるだけそれに準拠するように選択しました。

やり始めたころ，読み間違いがないかチェックしました。びっくりするような間違いをする人もいまして，「女中」を「オンナナカ」と読まれたり，「何だこれは」と思うようなものがあります。最近見慣れない言葉だったでしょうね。本当に読めない大学生もいるのです。ワーキングメモリは教育，学習の中でものすごく重要だと思うので，その視点をぜひ教育現場でも重要視してもらえたらいいなと思います。

2000年から2010年ころ，ワーキングメモリというのが定着していなかったので，言語聴覚士の研修会に招かれたときには，RSTの説明をしました。しかし現在では言語聴覚士の方々にもワーキングメモリという概念はかなり取り入れられて，テストも使ってもらっています。

高砂：先生，先ほどのリーディングスパンテストのデイネマンさんの外国のほうでも，高齢者について応用されるようになったのは最近のことですか。

苧阪：そうですね。ただ高齢者にワーキングメモリ，リーディングスパンテストを使って脳の実験をするケースは，それほどないのです。先ほど紹介しましたOSTを使った論文がありましたが，RSTに関しては私が2003年にfMRI測定を使った研究が始めてだったと思います。このような脳の画像（以下の文献から資料提示：Osaka *et al.*, 2003, 2004, 2007, 2013）を撮って，脳のどの領域が

こうしたワーキングメモリには非常に重要かを示すものです。
高砂：先生はいつから高齢者のほうを始められましたか。
苧阪：高齢者研究については，2012年に論文が出ました。[17] これ（資料：LST遂行時の脳活動）は高得点群と低得点群の比較で，これが私の重要視している問題です。高得点群と低得点群の比較をして何が違うかということですが，実際にとても違うのがACC（anterior cingulate cortex）といって前帯状皮質です。これが高齢者の画像です。高齢者はほとんどACCの活動増強が認められないのです。機能が衰えているというわけではなくて，使うべきときにACCを働かせていないという特徴があります。特に，この前頭とACCとPPC（posterior parietal cortex，後部頭頂皮質）間のネットワークが非常に大切なのではないかと思っています。そして，これが高い得点群の人はネットワークを緊密に使っています。ところが，低い人というのはこの緊密さが少ないようです。そして，高齢者になるとこの緊密さが落ちていきます。そういう図式で表しているのです。
高砂：帯状回，前頭前野のこのあたりはアセチルコリン系か何か考えているのですか。何が動いているのでしょうか。
苧阪：結局は，注意を必要なものに向けられていないという感じなのです。例えばRSTの文章だったら，1文中に単語は2～3個出てきますよね。たとえば「週末には家族と一緒に大掃除をした」というと，「週末」なのか，「家族」なのか，「大掃除」なのかということです。その中で「大掃除」がターゲット語だと注意を向けることが重要です。何が重要で，注意を向けないといけないのは何かということを理解することです。こうした点が，若年者でもワーキングメモリ評価値の高い人と低い人の差をもたらしています。また，それをもっと極端にしたのが高齢者です。

要するに，高齢者は記憶が劣ると皆さんは思いがちで，覚えられないと言うのですけれども，そうではなくて，ほとんどがワーキングメモリの問題だということです。この本にはそのような問題について書きました（資料提示：加齢とワーキングメモリについて。何のために2階に上がったのか。買い物に行ったのに，買い忘れをする→つまり，行動（処理）しながら記憶（保持）する，こころのメモ帳→ワーキングメモリの問題）。2階に上がったら，若い人でも忘れますけれども。
高砂：ありますね。
苧阪：高齢者さんのRSTのエラー反応を見ていたら特徴があります。例えば「公園で子どもたちが遊んでいました」という文章を読んでいただいて，その中でターゲット語「公園」だけを取り出して報告するように言っているのだけれども，再生したのは「子ども」になっています。もっとユニークなのが，「私は桜の咲く4月が好きです」と言って「桜」だけを報告してもらったらいいのですけれども，そのまま「私は桜の咲く4月が好きです」と言ってしまったりします。何を覚えていいのか分からなかったというのが，一番彼らの訴えるところなのです。「年末には家族で大掃除をします」と読んでもらうと，ターゲットが「分からない」と言われるけど何となく分かっていたのか，「家族で大掃除をします」というように家族から始まる文を最後まで報告したりします。

（テストの動画を視聴しながら）「家の修理にはひと月はかかるだろう」というのは少し詰まったこともあるのですけれども，単語だけ，「ひと月」でよかったのですが，「ひと月はかかるだろう」と後の文を言ってしまうのです。

要介護の施設にいる人にもやってもらったことがあります。その時はリスニングスパンテストでしたので，報告するのは最初の単語です。

（テストの動画を視聴しながら）最初の単語は何でしたかと質問しています。だから「サクラ」だけでいいのだけれども，「サクラが2本咲いています」とすらすらとおっしゃいます。きちんとこれだけ言えるのですから，高齢者の方は記憶力が悪いということではなさそうです。注意を向

けてそれだけを取り出すというのが苦手なのだと思うのです。このようなことが問題なのではないかと思います。

2.7　子どものRST，脳のネットワークへの展開

苧阪：こうした誤りが子どもたちでも見られるのです。（「男はびっくりして叫びました」の刺激に対して「おとこは」と子どもが答える動画を視聴しながら）これは，1文条件を実施しているところです。この6歳前半の男の子は，1文だとうまく先頭の単語だけを報告することができました。次に2文にします。（「雪が夜にどっさり降りました。魚は海で泳いでいます」の刺激に対して「雪が夜どっさりおちました。魚は海で泳いでいます」と子どもが答える動画を視聴しながら）このように，6歳の男の子ですが，1つだけ取り出すというのは苦手で，文章全体を報告することは，少し間違ったりもしていますけれども，できています。ですから，このように注意を何かに焦点化してそれだけをピックアップしていくということが年少の子供たちはまだ苦手のようです。注意の制御機能がワーキングメモリには非常に重要なのではないかと考えています。

名取：面白いですね。

鈴木：ありがとうございます。子どもと高齢者が同じような間違いをするというか，そこが面白いですね。

苧阪：そうなのです。子どもの言葉の発達というのはもっと早いです。4歳から6歳は幼稚園児ですが，言葉を覚えたり，それに必要な音韻ループはもっと早くに発達するようです。また，一般的な記憶力というのはもっと早くに発達するけれども，ワーキングメモリはその中でも発達が遅いのです。年少，年中，年長と，ワーキングメモリの制御が可能となっていくのですが，小学校へ行く前ぐらいにはある程度出来上がるようです。

高齢者の人は記憶力が低下すると考えられていますが，文章を記憶することはできるようです。また，自分の住所や生年月日は結構覚えているのです。加齢によりまず低下するのは，ワーキングメモリのようです。ワーキングメモリは日常生活の中に必要なことが多いため，極端に低下すると社会生活が困難になってきたりします。そこで，何らかの強化法と言われていますけれども，私自身はそれほど特別な強化は重要視していません。

先ほど脳の領域役割を示しましたが，領域を単独に見るのではなくて，領域間のネットワークの緊密性というか，機能的コネクティビティーの緊密性を考えることで解決できるかもしれません。そのため，最近はネットワークの解析を試しています。どこまでできるかは分かりませんが，このような状態です（資料提示）。

2.8　RSTのノルムについて

鈴木：ありがとうございます。先生，私は臨床心理学が専門なのですが，知能テストを例として考えると，基準を標準化されたテストだと作ると思うのです。例えば知能検査だと，何歳何か月から何歳何か月の間の平均のようなものを作って，そこと照らし合わせながら検査を臨床で使っていけるように整えると思うのです。高齢者の物忘れを測る先生の検査は，平均値を読み取っていく形になるとは思いますが，何歳だとどのぐらいであるというような判定値が出るようなものが用意されていないように思います。それは，これから作られるようなものでしょうか。

苧阪：やはり年齢とはけっこう相関はしています。ただ，今のところデータがあるのが，この4歳，5歳，6歳はリスニングスパンテストです。それから，小学校は実施計画を立てたところ，コロナの前で現在は見合わせている状態です。あとは，高齢者の60歳代，70歳代，80歳代くらいまでは

この本に書いたようなデータがあります。

ただ重要なのは，ワーキングメモリ測定はもう少し早期から必要なのではないかと思います。よく言われているように，認知症も早期発見が重要です。成人でも20代がピークで，30代の後半になると落ちかけています。40代，50代の年齢層のデータが取れておらず，取ってくださるところがあればぜひお願いしたいと思っているところです。

鈴木：あなたの得点だとどのぐらいの年齢に位置しますというようなのができると，がっかりもするかもしれないですけれども，面白いですね。

苧阪：意外とデータが少ないのです。高齢者さんはシルバー人材などいろいろありますが，小学校，中学校の現場は取りにくいです。

鈴木：先生のテストは，一般的な知能検査との相関はとらないわけですか。

苧阪：あまり知能検査とは相関しないと言われているのですが，必ずしもそうではありません。高齢者さんのテストですけれども，NXテストで測定するとやはり成績の低下はすごく激しいです。それから，知能テストというよりも，むしろ抑制機能などを見るストループテストも高齢者になるとぐんと成績が悪くなるのですけれども，そういう場合との相関はあります。私の場合は，多人数のデータを取るというよりも，脳機能とネットワークの様相を見ることが主になっていますので，人数が制限されます。

鈴木：先生のご関心がどちらかというとネットワークと脳のほうにあるのですね。

苧阪：そうです。もちろんこのテストを基にして，こういうテストできちんと成績が出るかどうかということはとても重要だと思います。

しかし，どのような機能なのかということを分かってからでないと，例えばどのように訓練していくのかという問題があります。一方的に脳を活動させたらいいというわけではないと思います。脳を強化するためにいろいろなことをやりましょう，手足の運動をやりましょうなどありますが，そこに何を求めていったら一番スムーズにいくのかということを考えていかないといけないと思っています。できるだけ情報は提供したいと思っていますから，お役に立つようであれば臨床場面でもお使いください。

鈴木：ありがとうございます。臨床場面で高齢者の方だとやはりMMSEを使ったりとか，長谷川式を使ったりして簡便な認知症のスクリーニングをするか，前頭葉の障害だとFABなどを使ったりすることが多いように思います。これらのテストだと，医者が作った検査ということもあると思うのですが，障害群と健常・高齢者群とで差があるところ，カットオフポイントを求めて判断できるように少人数の対象者から基準をつくって，それが認知症の中で当たり前のように使われている気がします。このような検査の開発の手続きを考えても，先生のように脳のほうの機能から先にアプローチする検査がなかったように思うので，うかがっていて新鮮な，先生ならではの脳の研究のほうから検査が生まれたというようなことをすごく感じました。とても面白くお話をうかがいました。

苧阪：ありがとうございます。実際に本当にどういう機能がというのはやはりよく考えないと，単に覚えられないというだけではないということです。何に注意していないのかということも考える必要があります。高い得点群の人と低い得点群の人の差というのは，脳の機能も，先ほどACCと言っていましたが，ACCが働かない，低下しているというわけではなくて，使う時が重要です。文章を読んでいるときにしっかり使わないといけないのです。

また，高い得点群と低い得点群の眼球運動を測定しているのですが，RSTの実施途中で文章を読んでいるときにどこを見ているかということが分かります。ターゲット語は，文中の「学校」

ですが，高い得点群の人の眼球運動を見ていると，「この生徒たちは毎日重い辞書を持って学校に通っている」という文章の中で「学校」というところに長い時間，しっかりと目が当てられているのです。ところが低い得点群の人はどういうわけか，「学校」のところももちろん見ているけれども，それ以外のところに結構長い時間，停留しているということがあります。その結果，侵入反応，「辞書」という単語もあるのですが，「辞書」を報告してしまったりします。ですから，もう少し注意を向けるものが何なのかということが分かるという，もっと理解力は高まる可能性があるのではないかと思います。なぜ他の単語に眼球が向けられているのかというと，注意の焦点化というか，注意を適切に制御できないことが原因なのではないかと思います。

鈴木：質問ばかりして申し訳ないのですが，ADHDの人ではどうなるのでしょうか。

苧阪：ADHDの人は，一つに向けるというのが苦手かもしれないと思います。だから逆に，もちろんこの低得点群の人がADHDということではないですが，向けられないのでいろいろなところに目が動いてしまっている，肝心なところにはいかないのかもしれません。あるいは，赤い線が付いているから，そこばかり見ているかもしれません。

ただ，先生が言われたように，ADHDの方など，いわゆる注意制御が困難な場合はワーキングメモリと関わりがあるのではないかと思います。

鈴木：ありがとうございます。

2.9　知能観，こころ観

鈴木：先生の知能観をお願いします。

苧阪：知能というのは複合的なもので，テストは言語性知能，空間性知能もあります。一方で，知能テストで測れないような側面というのもやはりあると思います。ただ，ある程度は相関していると思うので，それと複合的に使って補足するようなものと考えていただいたほうがいいと思います。

ベーシックなところは知能テストで，そこから先で，もう少し特徴を捉えるために，より理解を高めるためにRST等のテストを使ってもらえたらいかがかなと思います。ただ，先ほど言っていたように，このテストは実際には3文条件ぐらいまではそのまま何もしなくても大学生ぐらいなら答えられるのですが，4文や5文になったら何らかの方略を使わないと結構難しいのです。方略を使ったかと聞いたら，高得点群の人は方略をよく使っているのです。その方略が1種類ではなくて2～3種類ぐらいの方略を使っています。それに対して低得点群の人は方略をほとんど使わない，使っても気付いていないのか，使うにしても1種類ぐらいで，圧倒的にリハーサルに依存しているのです。リハーサルというのは，強固な記憶方略です。

方略の使用が高い低いというのは実際にはどういうことなのかというと，方略を適用するということは，何か工夫しないとうまくいかないと自分自身をモニタリングできている，自分自身の今のやるべきことがきちんと見えているというか，モニタリングできているということなのです。方略が有効かどうかのモニタリングです。いわゆる高得点群は，自己認知と言いますか，自己をモニタリングすることが良好であるということも言えるのではないかと思います。

私の研究室出身の研究者が，どのぐらいできたかということと実際の得点との相関をとったのですが，よくできている人ほど「自分はこのぐらいできているだろう」ということがわかっていて，成績と合致していました。

だから，最後のご質問の「こころ観」というと，強いて言うなら，こういうモニタリング，自己を自分で認知できることが大切なのではないかと思います。他者を知ることももちろん必要だ

けれども，自己を知るというのも重要なことだと思います。このテストはその視点からも役に立つのではないかという気がするのです。

他のテストと併用して使っていただくということがもちろん必要で，ワーキングメモリだけではなくて，認知症の方には単純な記憶テストも実施してもらってその方の記憶の特長を確認することが重要です。私はもの忘れ外来で共同研究者にRSTを実施してもらっているのですけれども，その際には認知症の一般的な検査もされて，それに加えてRSTを実施してもらうようにしています。

鈴木：本日は長時間，ありがとうございました。

3. インタビューを終えて

このRSTは2文から5文までの文章を読み上げながら，それぞれの文に記された1か所の単語を覚えるというシンプルな検査でありながら，成人でもスパン（正しく覚えられた単語数）の平均値は4に届かず，高齢者では2前後になる。このように比較的レンジ（最大値と最小値の差）が小さいなかで安定した値がでることは検査項目としても信頼性が高いものと考えることができる。その日本語版のテストを開発するにあたっては，文法的に語順が異なる英語版とは違う発想があったことを知ることができて興味深かった。

インタビューのなかの例にもあったように，2階に何か用事があったはずなのが，別のことを考えながら，あるいは階段を上ることに神経を使いながら，「あれ，何しにここに来たのだろう」と自分のもの忘れにあきれることは日常的によくある。これは記憶力の低下というよりもワーキングメモリの使い方，注意の向け方の失敗ということで，少しほっとする知見でもある。しかし今回のインタビューでは，言語能力とも関連するRSTの平均値は昨今の学生を対象にしたものでは少しずつ下がってきているというお話であり，学生に教育をする立場としては考えさせられるところでもあった。

筆者の一人（高砂）にとって，苧阪満里子氏は神経生理心理学の世界の大先輩であるとともに，苧阪直行氏と二人三脚で認知心理学を研究されているなど，基礎研究の印象が強い方であったが，今回のインタビューで臨床研究へのアプローチが学部・大学院などかなり早い時期から行われていることに気づかされた。オーラルヒストリー研究の意義として，「心理学というある個別学問の実践がどのように行われてきたのかについて，発表された記録だけではわからない部分を個々の研究者の体験を拾い集めることで浮かび上がらせることができる」（高砂ら，2015，p. 19）という意味で，今回のインタビューは心理学における基礎研究と臨床応用の示唆に富む事例を提供してくれるものとなった。

注

＊ 本研究は，科学研究費補助金（19K0336 心理検査開発者オーラルヒストリーによる日本心理検査史）の助成を受けた．

1）倉石精一（1909-1988）：1932（昭和7）年東京帝国大学文学部心理学科卒業，1936年東京帝国大学文学部副手．群馬師範学校教授，群馬大学教授を経て，1954年京都大学教育学部教授，1973年京都大学定年退職（名誉教授）．その後，岡山大学教授，関西大学教授を務める．専門は思考心理学，教育心理学，教育相談（大泉，2003）．

2）河合隼雄（1928-2007）：1952（昭和27）年京都大学理学部数学科卒業．1959年フルブライト留学生として米国カリフォルニア大学へ留学，1962年スイスのユング研究所に留学．天理大学教授を経て，1972年京都大学教育学部助教授，後に教授，名誉教授．2002（平成14）年文化庁長官．専門は，臨床心理学，

ユングは心理療法，日本文化論（大泉，2003）.

3）梅本堯夫（1921–2002）：1948（昭和23）年，京都大学文学部哲学科心理学専攻卒業．1952年京都大学教育学部助教授，後に教授，名誉教授．専門は，教育心理学，音楽心理・記憶の研究（大泉，2003）.

4）百名盛之は1972年に京都大学教育学部に設置された視聴覚教育講座に苧阪良二とともに所属した.

5）柿崎祐一（1915–1994）：1941（昭和16）年，京都帝国大学哲学科心理学専攻卒業，同大学院進学．1942年海軍技術研究所研究部実験員，後に同研究所実験心理研究部技師．1947年京都市立児童院嘱託．大阪市立大学助教授を経て，1953年京都大学文学部助教授に着任，後に教授，名誉教授．専門は知覚心理学，両眼視の研究（大泉，2003）.

6）木下冨雄（1930–）：1956（昭和31）年京都大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了．大阪女子大学助教授を経て，1979年京都大学教養部教授，後に京都大学総合人間科学部長，名誉教授．専門は社会心理学，リスク科学（大泉，2003）.

7）中島　誠（1924–）：1948（昭和23）年京都大学文学部哲学科心理学専攻卒業．京都学芸大学助手，講師を経て，1954年京都大学文学部助手，講師，助教授，教授．1988年京都大学名誉教授，後に佛教大学教授．専門は発達心理学，乳幼児期言語の研究（大泉，2003）.

8）中谷和夫（1936–2020）：1959（昭和34）年東京大学文学部心理学科卒業，1961年同大学大学院人文科学研究科心理学専門課程博士課程進学．京都大学教養部助教授，東京大学文学部教授を経て専修大学教授．専門は認知心理学.

9）Osaka（1984）参照.

10）Daneman, Meredyth：1973年ウィットウォータースランド大学卒業，トロント大学にて修士号取得した後，1981年カーネギーメロン大学で博士号取得，トロント大学名誉教授.

11）苧阪（2002）参照.

12）Osaka & Osaka（1992）参照.

13）苧阪・苧阪（1994）参照.

14）Baddeley, Alan（1934–）：1962年ケンブリッジ大学博士号．ブリストル大学，ヨーク大学教授他．記憶研究においてワーキングメモリのモデルを提唱したことで知られる.

15）Engle, Randall W.（1946–）：1973年，オハイオ州立大学にて博士号取得．ジョージア工科大学教授.

16）苧阪（2020）参照.

17）Osaka *et al.*（2012）参照.

参考文献

Baddeley, A. D. & Hitch, G. (1974). Working memory. G. H. Bower (Ed.), *Psychology of Learning and Motivation*, Vol. 8. Academic Press, pp. 47–89.

Baddeley, A. D. & Warrington, E. K. (1970). Amnesia and the distinction between long- and short-term memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 9, 176–189.

Galton, F. (1874). *English men of science: Their nature and nurture*. London: Macmillan.

大泉　溥（2003）．日本心理学者事典　クレス出版.

Osaka, M. (1984). Peak alpha-frequency of EEG during a mental task: Task difficulty and hemispheric differences. *Psychophysiology*, 21, 101–105.

苧阪満里子（1994）．ワーキングメモリの認知神経心理学的研究：脳波からのアプローチ　風間書房.

苧阪満里子（2002）．ワーキングメモリ：脳のメモ帳　新曜社.

苧阪満里子（2020）．高齢者のもの忘れを測る：リーディングスパンテストによるワーキングメモリ評価　新曜社.

Osaka, M., Komori, M., Morishita, M., & Osaka, N. (2007). Neural bases focusing in working memory: An fMRI study based on group differences. *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience*, 7, 130–139.

Osaka, M., Nishizaki, Y., Komori, M., & Osaka, N. (2002). Effect of focus on verbal working memory: Critical role of the focus word in reading. *Memory & Cognition*, 30, 562–571.

Osaka, M. & Osaka, N. (1992). Language-independent working memory as measured by Japanese and English

reading span test. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 30, 287–289.

苧阪満里子・苧阪直行（1994）．読みとワーキングメモリ容量：リーディングスパンテストによる検討　心理学研究，65 (5)，339–345.

Osaka, M., Osaka, N., Kondo, H., Morishita, M., Fukuyama, H., Aso, T., & Shibasaki, H. (2003). The neural basis of individual differences in working memory capacity: An fMRI study. *NeuroImage*, 18, 789–797.

Osaka, M., Yaoi, K., Minamoto, T., & Osaka, N. (2013). When do negative and positive emotions modulate working memory performance? *Scientific Reports*, 3, 1375, 1–8.

Osaka, M., Yaoi, K., Otsuka, Y., Katsuhara, M., & Osaka, N. (2012). Practice on conflict tasks promotes executive function of working memory in the elderly. *Behavioural Brain Research*, 233, 90–98.

Osaka, N., Osaka, M., Kondo, H., Morishita, M., Fukuyama, H., & Shibasaki, H. (2004). The neural basis of executive function in working memory capacity: An fMRI study based on individual differences. *NeuroImage*, 21, 623–631.

鈴木朋子・名取洋典・高砂美樹（2023）．子どもが描く人物画の変遷：DAM グッドイナフ人物画知能検査日本版開発者・小林重雄へのインタビューから　横浜国立大学教育学部紀要　I．教育科学，6，134–154.

高砂美樹・鈴木朋子・荒川　歩・サトウタツヤ（2015）．オーラル・ヒストリーを用いた日本の心理学史の試み　応用社会学研究（東京国際大学），25，15–24.

中国語の語彙について
――新語・流行語をめぐって――

瀬戸口　　勲

Vocabulary in the Chinese Language
— in Relation to Neologisms and Buzzwords —

SETOGUCHI, Isao

Abstract

Language is closely related to the systems, politics, ideologies, and other aspects of a society and develops under their influence. The Chinese society underwent a significant change in terms of its language after China introduced market economics under the reforms and open-door policies instituted from 1979. That change entailed the creation of huge volumes of “neologisms.”
This study considers neologisms as newly coined words and phrases and discusses “neologisms” that found their place in people’s lives, predominantly in spoken language, over the passage of time and the buzzwords that were created among them from the 1990s to about 2010. It organizes, by year, the Neologism (Buzzword) Dictionary—a representative of the neologism dictionaries published throughout China in competition with each other at the time—and presents the characteristic features of each year’s dictionaries. Two of these dictionaries are compared in concrete detail to confirm how neologisms were recorded. Furthermore, this study reveals several issues through the various dictionaries and considers them from the perspective of Chinese language education.

Keywords: Neologisms, Buzzwords, Vocabulary in the Chinese Language, Spoken Language, Chinese Society, Chinese language education

要　旨

言語は社会の制度や政治・思想などと深い関わりがあり，その影響を受けて発展する。中国では1979年以降に実施した改革開放路線の下で市場経済が導入されると，言語の面でも中国社会に大きな変化が生じた。それが大量の「新語」の誕生である。

小論では新語を新しく生まれた語，言葉という意味でとらえ，時間の経過の中で人々の生活の中から主として口頭語として定着した「新語」とその中から生まれた流行語を1990年代から2010年辺り迄を取り上げる。当時競って中国全土にわたり発行された新語辞典の中から代表的な『新語（流行語）辞典』を年代順に整理して，それぞれの特色を提示する。その中の二書については具体的に比較作業を行ない，新語の収録状況を確認する。また，各種辞書を通していくつかの問題点を浮き彫りにし，中国語教育の立場から考察する。

キーワード：①新語，②流行語，③口頭語，④中国語の語彙，⑤中国社会，⑥中国語教育

目　次

1. はじめに
2. 新語・流行語について
　2.1　80年以降の新語・流行語
　2.2 『中国新語・流行語小辞典』と『現代漢語詞典（第7版）』の比較
3. 『大陸流行詞語800條』について
4. おわりに

1. はじめに

瀬戸口（2022）では，“普通话”（標準語）の中で北京語の語彙がどの程度採用され，定着しているかをテーマの中心とし，その扱われ方について図表化して整理分析を行った論文を発表した。その結果，『現代漢語詞典（第7版）』（2016）の中で北京語の語彙の採用は減少傾向にあるものの，その多くが口語の中に組み入れられていることが明らかになった。同時に，1978年，改革開放政策の実施により，中国の社会も著しい変化を遂げた。語彙においても，必然的に大きな変化が生じている。本論文では，1980年から2000年までを範囲として新語・流行語に焦点を当て，中国全土で広がりを見せた代表的な語彙を取り上げ，（A）香港・広州から流行した語，（B）経済的な影響を受け流行した語に分類してまとめた。

今回は前掲論文の内容を踏まえ，1980年後半以降，中国各地で続々と発行された新語・流行語関連の辞書を紹介し，各辞書の特徴と編集上のいくつかの問題点を指摘したい。また，1980年代以降より，日常生活の中に浸透し，既に常用語として認知され，定着している語について，中国語教育の立場から「新語・流行語」について検討し，言語研究分野における「新語・流行語」についても考察する。

2. 新語・流行語について

現代中国語では「新語」のことを“新词”とか“新词语”という言い方をする。もともと“词语”には単語やフレーズという意味も含まれているので，“新词”より“新词语”の方が幅広い意味を持つが，両者は同様の意味で使用されていることが多い。「新語」とは1980年以降，改革開放政策を実施してから新しく生まれた語ばかりを指しているのではない。1949年，中華人民共和国成立後，その時期その時期の社会的な背景を反映して新語は誕生している。

新語の激増について『中国語新語辞典（三訂版）』（吳侃編著，2000）では，①中国革命勝利及び一連の変化，②文化大革命，③改革・開放政策という三つのピーク（変革期）に分類している。小論においても，同書のこの三つの分類を基に新語について検証する。

①と②の時期に生まれた語が時間の経過及び社会の変化とともに，人々の生活に「新語」として，すっかり定着しているものもあるし，人々に忘れ去られ，死語になったものも少なくない。

小論では上記③を取り扱うが，ここ数年来の新語の増え方には，想像をはるかに超えるものがある。その上，これからも社会の経済及び科学技術の発展にそって，年々増加の一途をたどることは明らかである。そこで，小論では新語・流行語を1980年代後半から2010年頃までの範囲に限定する。

①の文化大革命時の新語や流行語は，当時の世相に合致した政治用語が多く，政府主導で作られた語であることが分かる。例えば，“文革”（文化大革命の略，プロレタリア文化大革命）”，“无产阶级”（プロレタリアート），“挨斗”（つるし上げられること），“整人”（人を批判したり，陥れたりすること），“红卫兵”（紅衛兵，文革中に造られた組織），“臭老九”（九番目の臭いやつ，文革中の知識人に対する蔑称），“走资派”（資本主義の道を歩む実権派の略）などがあげられる。

『新華新詞語詞典（2003年版）』（商務印書館辞書研究中心編）には，辞書の編纂目的として，以下のように記している。

①改革開放政策が実施され，中国社会に大きな変化が起こり，それに伴ない，新事物や新概念が次々と出現，②社会生活の変化を受けて，新語が増え続けて毎年1000語が誕生していること，③それらの新語のほとんどが新聞や雑誌などに頻繁に現れるようになり，一般の辞典では収録されていないことなどを挙げている。

1978年，鄧小平の登場により「改革開放」路線に政策が転換され，80年代から市場経済が導入されると，これまでと異なり新語や流行語は政府主導ではなく，民間から作り出されたものが増えてきた。それが徐々に社会全体に広まり，人々のコミュニケーションだけの利用にとどまらず，新聞，雑誌，テレビ等の公共の報道機関等でも使用され，より一層拡大発展して来たのである。

新語の中から生まれた流行語は時間が経過しないと断定できない側面もあるが，新語が氾濫している時代でも流行語は比較的長く残っていることが少なくない。

「流行語」という語彙が『現代漢語詞典』[1]の中に見出し語として採用されたのは，第5版からであり，比較的新しい語彙と言える。日本で出版されている『中日辞典（第3版）』（2016）では，まだ「流行語」は収録されていない。今のところ，新語と流行語を明確に区分することは難しい点も存在することから，多くの場合，新語・流行語を一つのカテゴリーとして整理される[2]。

小論もこの考え方にそって，新語・流行語を明確に区別してまとめるのではなく，それらの語が日常生活の中に根付き，定着しているものを整理分析する。

1990年代，流行語として，コミュニケーションの場や新聞（北京晩報など地方の新聞），雑誌な

どで目立って使用された語には次のようなものがある。（例語の多くは，北京語言学院出版社発行の『1991汉语新词语』及び『1992汉语新词语』による[3]。

①炒，②玩，③火，④侃，⑤练，⑥宰（宰客，宰人），⑦倒（倒爷，洋倒爷，博倒，学倒，公倒，私倒，科技倒爷，国际倒爷），⑧潮（华商潮，民工潮，黑潮），⑨族（擦车族，擦鞋族，卖脑族哈日族），⑩热（出国热，外语热，计算机热，招牌热），⑪洋（洋倒爷，洋食），⑫软，硬（软件，硬件），⑬假（假药，假酒，假商标），⑭大王（服装大王，帽子大王），⑮大款，⑯大腕，⑰贩子（二贩子，票贩子，人贩子，信息贩子），⑱消费（投资消费，劳务消费，医疗消费），⑲下海（下海-经商），⑳入关，㉑打的（打面的），㉒走穴（明星走穴），㉓打假（打击假药·打击假商标），㉔扫黄（扫黄源，扫黄办），㉕回扣，㉖公关（公关小姐，公关部，公关学），㉗股票（股海，股民，股东，股市），㉘彩票（福利彩票，体育彩票），㉙甜活（买卖），㉚名优（省优，部优，国优），㉛新大件（房子，小汽车，电话）

以上，31語の中で『現代漢語詞典（第7版）』(2016)[4]に収録されている語は，①炒，③火，④侃，⑥宰，⑨族，⑩热，⑫软，硬，⑲下海，㉑打的，㉓打假，㉔扫黄，㉖公关の計12語である。

未収録の語は，②玩，⑤练，⑦倒，⑧潮，⑪洋，（⑫软，硬，⑬假，⑭大王，⑮大款，⑰贩子，⑱消费，㉓打假，㉔扫黄，㉗股票，㉙甜活の計15語である。

また，⑬假，⑭大王，⑮大款，⑱消费，⑳入关，㉗股票などは，すでに日常生活に定着しているため，辞書の中にあえて収録する必要がなかったと推測される。

2.1　80年以降の新語・流行語

改革開放政策の下で中国社会に新語の激増現象が起きたことは前項でも指摘したが，ここでは，当時新語に関する辞書が全国各地で陸続として出版されている状況を踏まえ，以下にその代表的な辞書をいくつか紹介する（出版発行順による）。

ほぼ同時期に中国各地で発行された各新語辞典の特徴を説明し，整理することにより，学習者が編集上の差異を理解することになり，それぞれの調査目的に合った新語辞典の選択が可能となる。

①『汉语新词词典』（刘庆隆等编　上海辞书出版社，1986年）

言語学者として著名である呂叔湘[5]氏の序が記されている。本書は中国語の新語が1654項目収められている。当時の新語（“巴士”—英語Busの音訳。“彩电”—彩色电视の略）だけでなく，“臭老九”，“红卫兵”，“四人帮”などの文革時代の語も採用されている。

②『新词新语词典』（李行建等主編　语文出版社，1989年）

1949年から1989年代後半に至るまで，新語5300余を収集している中型の新語辞典である。単に当時の新語を簡明に紹介しているだけでなく，必要に応じて例を提示して，説明を加えた実用的価値の高い工具書である。本書では，「新しく作られ，新しい概念を表す語，フレーズや語句，または古い語も新しい意味を有している語」として新語を定義づけている。

③『常用新词语词典』（张寿康 主編 经济日报出版社，1991年）

20余人の共同編集による辞書である。1949年以降に現われ使用されている新語を収めている。日常生活の中で多く使用されている語を収集しているが，その一部に，ここ数年来，新語には属していないが，広く採用されている外来語も収録したとの説明がある。表紙をめくると，著名な周祖谟氏の直筆のコメントが寄せられている[6]。

この短い推薦文からも，当時，新語が著しく増加し，工具書の必要性が急務であったことを伺い知ることができる。

④『新词语词典』（北京市语言学会編　人民邮电出版社，1993年）

“新词语”として文化大革命時の一部の語彙も収録されているが，改革開放政策後の新語を極力取り入れている。「北京市語言学会」は主に大学や教育機関に従事している教員や研究者で組織されている学会である。編者は新語が氾濫している今日，多数の外国人の中国語研究者や中国語学習者に適切な工具書を提供しないと，教学・研究の両面で困難を招くことになり，新語辞典の出版は現状において，最も必要であると前言で指摘している。

⑤『汉语新语汇词典』（郭熙主编　江苏教育出版社，1993年）

大陸（中国大陸は以降「大陸」と略称）ばかりでなく，台湾・香港地域の新語を積極的に収集して編んだ工具書である。後方に漢語拼音方案，大陸・香港・台湾における科学技術用語の対照表が付されている。

⑥『中国新語流行語辞典』（張一帆・小島朋之　日中通信社，1995年）

計149個の新語・流行語を収集した本書は，中国文の説明と日本語訳が付されている。更に，例文の大部分を新聞から引用しており，ところどころに関連のある写真が掲載されて，中国語の新聞や雑誌の読解に役立つ一冊である。また，監修者が最新の新語や流行語を網羅しており，中国語の初心者はもちろんのこと，ビジネスにも有用な参考書であると推奨している。

⑦『市場経済下の最新中国新語辞典』（陳岩編　北九州中国書店，1995年）

収集した語について，特に最近2～3年来流行している経済活動に関係のある新語を主としている。その範囲として，(1) 経済活動の新しい内容を表すもの，(2) 古い言葉の復活，(3) 流行語，この他，一部のよく使われている経済，法律用語も収録した。

⑧『中国流行新词语』（欧阳因编　中国人民大学出版社，2000年）

2000項目の新語を収集，英語，ピンイン，注音字母と発音表記が付されているばかりでなく，中国語の例文にも英訳が施されている点が他の書物と大きく異なっている。著者は英語で説明することにより，国内外のみならず，香港・台湾を含めた利用者に対して手軽で親しみやすい工具書の提供を目的として編纂している。

⑨『中国語新語辞典　三訂版』（金丸邦三監修　吴侃編著　同学社，2000年）

見出し語数計6076語（内，本文5710語，付録366語）を収録している。収録の範囲を1978年以来の中国の主な全国紙とし，新語の基準を『現代漢語詞典』（1985年）に採用されてないものを新語として扱うとしている。第4版，第5版と版を重ね，第5版は見出し語数計9012語（内，本文7967語，付録1045語）が収録されており，収録語彙数も大幅に増加している。

⑩『汉语新词新语年編（1997-2000)』（宋子然主編　四川人民出版社，2002年）

1997年から2000年に生まれた新語と新しい意味で使用されている語の合計700を収録している。本書は単に新語だけの解釈のみならず，例文を提示し，編者自身の見解を加えている。

⑪『新华新词语词典 2003年版』（商务印书馆辞书研究中心编 商务印书馆，2003年）

1990年以降に社会生活の中で現れた新語，特に情報，財経，環境保護，医薬，体育，軍事，法律，教育，科学技術の分野における新語を計2200語とそれに関連する語を4000語収録している。この辞書の最大の特長は，当時の新聞や小説，雑誌から新語・流行語を抽出している点とその項目に関連する語をまとめて整理していることである。例えば，“的士（出租汽车)”の項目には，語の説明や実例の他に，“的哥”，“的姐”，“的票”，“的星”，“的爷”，“出租车”と関連語を並べている。

“族”も同様に関連語として“飘族”，“漂族”，“背包族”，“本本族”，“波波族”，“持卡族”，“打工族“，“工薪族“，“哈狗族”，“哈韩族”，“哈日族”，“海归族”，“绿卡族”，“买车族”，“上班族”，“有车族”，“月票族“，“追星族”というように，学習者を含む読者にとって便利で，知識の広が

りも提供する構成になっている。また，新語項目に英訳が付され，関連するイラストがいくつかあり，編集にも工夫が見られる。

⑫『汉语新词新语年编（1997-2000)』（宋子然主编　四川人民出版社，2002年）

1997年から2000年に生まれた新語と新しい意味で使用されている語の合計700を収録している。本書は単に新語だけの解釈のみならず，例文を提示し，編者自身の見解や原文の注釈に丁寧な説明を加えている。これまで出版されている辞書と異なる点は年代によって新語を提示していること，また新語の年代については，語彙史研究の面において極めて重要であるという認識の上で新語の選択している点などは，辞書の編纂に一石を投じていると思われる。

⑬『中国新語・流行語小辞典』（郭雅坤・内藤達志　明石書店，2010年）

一般辞書には載っていない新語・流行語を約200語収集している。それらの語を通して，中国の世相が理解できるように丁寧な説明が付されている。

以上13冊の各辞書の中で，⑥『中国新語流行語辞典』，⑦『市場経済下の最新中国新語辞典』，⑨『中国語新語辞典』，⑬『中国新語・流行語小辞典』は日本国内で出版されている。

中国において社会の大きな変化は，新語・流行語が増え続け，それが暮らしの中で定着してくると「新語」をまとめた辞書の出版の機運が社会全体の中で自然に高まってきた。1990年代は言語研究に従事している専門家の間でもその必要性が強まった。このことが上記に示した辞書の出版が相継いだ一つの要因だと考えられる。

辞書の編纂は，一般的には単著での出版は数少なく，多くの場合，編集グループを組織したり，関係者から原稿を募ったりして，各分野における新語の収集から作業が開始されることになる。当然のことながら，人々が日常よく使用している口頭語にも注意を払う必要があるが，それら全てを新語辞書に収録することは不可能である。したがって編者の人選，地域の差（方言の影響を受けやすい広州，香港など）によっては，新語の選択の面において，若干の違いが生じることは否めない。しかしながら，全体を通して言えることは，収録された語には，政治用語が多い感はあるが，新語・流行語として，全国的に認知度が高い語をピックアップし，収録している。上記提示した各辞書については以下の4点に整理することができる。

1）中国人の研究者，教育に従事している人達の手で編纂されている。
2）大半の辞書が新語として収録しているのは1949年の中華人民共和国成立以降の語が多い。誕生区分を明確にし，編集することができれば，利用者にとって必要な項目を効率よく調べることができる。
3）中国語の「新語」の収集には日本人だけでは無理な面がある。新語は当時の世相を反映する語が広く採用されるので，中国の社会や文化に関して正確な知識を持っている中国人と日本人の共同編集が必要である。
4）1990年後半からの新語辞典は，それ以前のものとは異なり，編纂方針及び目的がより明確に示され，編集方法にも計画性と独創性が見られる。

以下に上記⑬の『中国新語・流行語小辞典』に掲載された新語・流行語が『現代漢語詞典（第7版)』(2016）の中で，どれくらい採用されているかを調査する。⑬を比較調査の対象としたのは，(1）日本人学習者の立場から中国語の新語・流行語を通して中国の社会が理解しやすいように編集され，項目の選定が適切であること。(2）共著者の二人（郭雅坤･内藤達志）は，各々が現地（郭は日本･内藤は中国）に滞在した経験の持ち主であるため，その国の社会や文化に通じていること。

(3）両氏は，かつて中国情報紙の記者兼編集者としての経験を有していることから，中国の社会を熟知していること。(4）新語・流行語の項目別に解説が丁寧である。

以上，四点の理由からである。

『中国新語・流行語小辞典』は計11章から構成されている[7]。

第1章　格差広がる中国社会の光と影（1 ～ 13）
第2章　さまよえる就職・住宅難民（14 ～ 24）
第3章　新時代のさまざまな愛のかたち（25 ～ 45）
第4章　中国社会の闇と病巣（46 ～ 65）
第5章　ITの進化と酒盃（66 ～ 88）
第6章　進む環境汚染，高まるエコ意識（89 ～ 101）
第7章　新時代，新ビジネスの表と裏（102 ～ 122）
第8章　過熱する投資ブームの功罪（123 ～ 127）
第9章　高齢化社会と若者文化のあれこれ（128 ～ 143）
第10章　観光・レジャー大国となった中国（144 ～ 151）
第11章　新しいライフスタイルと文化（152 ～ 172）

2.2 『中国新語・流行語小辞典』と『現代漢語詞典（第7版）』の比較

ここでは，『中国新語･流行語小辞典』と最新の現代中国語の規範である『現代漢語詞典（第7版）』との比較を実施して，『中国新語・流行語小辞典』の新語・流行語がどのくらい収録されているかを調べる。

表１　『中国新語・流行語小辞典』と『現代漢語詞典』の比較表

項目	中国新語・流行語小辞典	現代漢語詞典 第7版
1	蚁族 高学歴のワーキングプア	○
2	富二代 成金二世	×
3	留守人口 出稼ぎ者の留守家族	×
4	流动人口 地方出身の出稼ぎ労働者	○
5	蜗居 ウサギ小屋	○
6	家电下乡 農村部の家電販売促進キャンペーン	×“家电”有り
7	富翁 借金してまでも派手にふるまう人	×
8	白骨精 エリート女性	○ 意味が異なる。
9	低保 社会最低生活保障	×
10	辣奢族 熱狂的に高級ブランドを追い求める人	×
11	灰领 グレーカラー	○
12	炫富 富をひけらかす	○

13	两免一补 義務教育における貧困家庭に対する補助政策	×
14	房奴 住宅ローン返済に苦しむ人々	×
15	炒房 不動産の転売	○
16	合租族 ルームシェアをする人々	×“合租”有り
17	洋漂族 外国人労働者	×
18	北漂一族 北京で仕事を探す芸能人，北京に席籍がないクリエイター	×“北票”有り。 意味は同じである。
19	电恒 電話での不採用通知	×
20	辣面 何度も面接の機会を求め歩く	×
21	裁员 リストラ	○
22	下课 クビになる	○
23	自由职业者 フリーター，自由業者	×“自由职业”有り
24	小时工 パート労働者	○
25	裸婚 ジミ婚	○
26	剩女 婚期を逸した女性	×
27	婚活 結婚相手を探す行動	×
28	嫁晚族 公務員との結婚を望む女性	×
29	陪拼族 ショッピングにおつきあいをする男性	×
30	光棍节 シングルの日	×
31	人造美女 整形美人	×“人造”有り
32	北大荒 北京在住の30歳を過ぎても男性を知らない女性	×
33	花心 浮気	○
34	黄昏恋 高齢者の恋	○
35	爱情帐户 恋し愛する二人の共同の預金口座	×“帐户”有り “帐”＝“账”
36	异地婚姻 上海人とほかの地域出身者との結婚	×“异地”有り

37	无效婚姻 婚姻届を出していない結婚	×“无效”有り
38	急嫁族 急いで嫁になりたがる大卒者	×
39	恐丑症 醜いことをおそれる病	×
40	恐婚族 結婚が恐い人	×
41	全职先生 無職で家事一切をこなす男性	×“全职”，“全职太太”有り
42	已婚（单身族） 既婚の身でありながら，独身生活を送っている人	×
43	半糖夫妻 週末婚カップル	×
44	七厘散 離婚をちらつかせ亭主関白の地位を保つ	×
45	老公寄存处 デパートにおける夫の避難所	×
46	三排外国人 3つの法を犯している外国人	×
47	山寨 コピー	○
48	傍名牌 有名ブランドまがいのコピー商品	×
49	钓鱼执法 悪質なおとり捜査	×“钓鱼”有り
50	躲猫猫 留置場での不審死	○
51	买官 官位を買うこと	○
52	裸官 海外逃亡のための手立てを用意している幹部	○
53	跑官 官職や出世のためにかけずりまわる	○
54	楼歪歪 手抜きによる欠陥建築	
55	虚高现象 水増し	×“虚高”有り
56	献礼工程 突貫工事で進めるプロジェクト	×“献礼”有り
57	医托 悪徳医師と結託したブローカー	×
58	黑色经济 ヤミ経済	×“黑色”有り
59	潜规则 暗黙の了解	○
60	摇头丸 エクスタシー（ドラッグ）	○

61	饭局 会食	○
62	血霸 血液売買のブローカー	×
63	贪内助 汚職行為を助勢する妻	×
64	黑哨 八百長審判	○
65	水货 ニセモノ	○
66	网络成瘾症 ネット中毒	×“网络”有り
67	网上购物 ネットでの買い物	×“网上商店”有り
68	网商 オンライン経営者	○
69	网络新贵 ネットで儲けた人	○
70	网恋 ネット恋愛	○
71	在线 オンライン	○
72	网聊 チャット	○
73	网上小说 インターネット小説	×
74	雷人 強い驚きをあらわす	×
75	拇指族 親指でのキー操作にすぐれた人	×“拇指”有り
76	伊妹儿 E メール	○
77	拍照手机 カメラ機能のついた携帯電話	×“拍照”有り
78	网祭 ネット墓参	×
79	刷博 アクセスカウントの水増し	×
80	红客 中国人ハッカー	×
81	视频 動画	○
82	垃圾邮件 迷惑メール	×“垃圾”も無し
83	高清频道 ハイビジョンチャンネル	×“高清”有り
84	彩铃 着信メロディー	○

85	三维动画 3Dのアニメーション	○
86	手机新闻 携帯新聞	×“手机”有り
87	等离子电视 プラズマテレビ	×“等离子”有り
88	双向收费 中国の携帯電話料金システム	×“双向”有り
89	桑拿天 猛暑	○
90	沙尘暴 春の砂嵐	○
91	绿色食品 無公害食品	○
92	白色污染 白い色のゴミ	○
93	绿客 スマートかつクリーンな生き方の人たち	×
94	走班族 徒歩通勤者	
95	慈善拉破 役に立たない慈善機関からの品物	×“慈善”有り
96	蓝天计划 青空を取り戻す環境運動	×
97	返璞族 自然に戻ろうと考える若者たち	×
98	节能住宅 省エネ住宅	×“节能”有り
99	低碳生活 二酸化炭素削減をめざす生活	×“低碳”有り
100	三化草地 「退化」「砂漠化」「アルカリ化」した草地	×
101	绿色出行 クリーンな環境を意識しての出勤形態	×“绿色”有り
102	过劳模 働き過ぎの模範的労働者	×“过劳”有り
103	红眼航班 睡眠時間中に運航するフライト	×“红眼”有り
104	卧舱式旅馆 カプセルホテル	×
105	人材租赁 人材派遣	×“人才”有り
106	空中教室 テレビ授業	×“空中”有り
107	仲介服务 仲介サービス	×
108	海归派 学問や技術を身につけ海外からもどった留学生や技術者	×“海归”有り

109	电荒 電力不足	○
110	隐形经济 ヤミの経済	×“隐形”有り
111	灰色收入 副収入	○
112	九点现象 夜9時まで営業時間をのばすこと	×
113	美丽产业 美容・化粧品産業	×“美丽”有り
114	双赢 ウィンウィン	○
115	知情权 情報を知る権利	×“知情”有り
116	引智 海外の頭脳を引き入れること	×
117	三高一低 エコロジー時代に逆行する企業	×
118	生探 優秀な生徒のスカウト	×
119	超前消费 過剰な消費行動	×
120	龙头 リーダーシップ	○
121	抢滩 市場に乗り込む	×
122	猎头 ヘッドハンティング	○
123	套牢股 塩漬け株	×“套牢”有り
124	基民 ファンドに投資する人	○
125	救市 市場救済	○
126	股票家教 株について教えてくれる人	×“股票”有り
127	财商 儲ける能力を表す指数	×
128	末富先老 社会が豊かになる前に老人の割合が増えてしまった状況	×
129	托老所 老人ホーム	○
130	421家庭 現代中国の典型的な家族構成	×
131	宅男 オタク	○
132	角色扮演 コスプレ	×“角色”有り

133	时尚一族 いまどきの若者たち	×“时尚”有り
134	哈日族 日本の流行が好きな人びと	×
135	麦霸 マイクを離さない人	×
136	酷 すごく	○
137	啃老族 親のすねをかじる子供	○
138	潮人 最先端の流行にめざとい人びと	×
139	动漫 アニメーション	○
140	瘦身族 ダイエットを心掛けている人	×“瘦身”有り
141	超女 スター誕生番組で生まれたアイドル	×
142	粉丝 追っかけ	○
143	傍大款 金持ちにすり寄り利益を得ようとする女性	○
144	出境游 海外旅行	×“出境”有り
145	和谐号 高速列車	×“和谐”有り
146	红色资源 革命に由来する観光資源	×
147	申遗 世界遺産登録申請	×
148	世博会 万博	×
149	主题公园 テーマパーク	×“主题”有り
150	小长假 ３連休	×
151	自驾游 自家用車での旅行	○
152	排队日 マナーを守って列に並ぶ日	×“排队”有り
153	第三地 お気に入りの場所	×
154	血拼 ショッピング	○
155	买单 お会計	○
156	泡吧 時間をつぶすこと	○

157	快餐 ファストフード	○
158	熬点 おでん	×
159	打包 お持ち帰り	○
160	小私族 流行を楽しむ人びと	×
161	贺岁片 お正月映画	○
162	谋女郎 巨匠監督の主演女優の呼び方	×
163	八挂新闻 ゴシップ報道	×“八挂”有り
164	炒作 ブームを作る	○
165	甲型流感 新型インフルエンザ（HIN1型）	×
166	亚健康 健康と病気の中間にある半健康状態	○
167	过电 宴会中の乾杯	×“过电”触電の意味
168	黑马 意外に能力をもっている人	○
169	刷卡 クレジット払い	○
170	丁宠家庭 子どもをもうけずにペットを飼う家庭	×
171	三哈女 創造力に富んだ女性	×
172	干物女 ひものおんな	×

上記2冊の辞書の比較結果については，以下のようにまとめられる。

『中国新語・流行語小辞典』に収められた172個の中で『現代漢語辞典（第7版）』に採用されたのは，53個，未採用が74個，語の部分採用（例：家电下乡→家电）が45個である。採用可が全体の約3分の1，語の部分採用を加えると約3分の2を占めていることになる。この点から言えることは，『中国新語・流行語小辞典』は，上記の11章に分類してまとめた項目及びその内容から見ても，当時の中国社会の世相を的確に反映した語が収録されていると判断できる。

3.『大陸流行詞語800條』について

1993年に出版された本書は1980年代後半以降，台湾と大陸の経済交流や人的往来の拡大により，これまで台湾が中国に対して「交渉しない・談判しない・妥協しない」（不交渉，不談判，不妥協）といういわゆる「三不政策」が，1990年，李登輝総統の誕生により，民主化を進めるなか，中国との関係の見直しも進行した[8]。その結果として，両岸の交流がますます活発になり，民間レベル

の交流―学会参加，文化事業への参加，経済活動の活性化により，人々の往来が拡大の方向に向かったのである。ところが大陸と台湾は同じ中国語（大陸では“普通话”，台湾では“国語”と名称は異なる）を使用していると言っても，台湾では，中国との政治体制の違いから大陸で使用される大量の新語・流行語を解せない現象が現実のものとなった。そういう状況の中で何佑安氏[9]の手によって台湾の人々の往来と貿易の促進を図るための，ハンドブック的な小冊子が編纂，刊行されたのである。収集された800項目の中，1980年代後半から日常的に用いられた比較的理解しやすい語は，（1）一刀切，（2）一风吹，（3）一国两制，（4）人民公社，（5）下水，（6）下放，（7）小康，（8）土包子，（9）大团结，（10）大锅饭，（11）小皇帝，（12）小报告，（13）小集团，（14）大男大女，（15）牛栅，（16）文革，（17）文化，（18）外流，（19）台胞，（20）打招呼，（21）半边天，（22）四个伟大，（23）白猫黑猫，（24）右派，右派分子，（25）老外，（26）同志，（27）老同志，（28）老中青三结合，（29）老三篇，（30）向前看，（31）向钱看，（32）多面手，（33）成分，出身，（34）抓，（35）吹喇八，（36）坐班，（37）找对象，（38）走后门，（39）批林批孔，（40）赤脚医生，（41）抓革命，保生产，（42）吹，（43）拉，（44）四人帮，（45）官倒，（46）官商，（47）法盲，（48）盲流，（49）两面派，（50）东郭先生，（51）武大郎开店，（52）风，（53）红太阳，（54）红卫兵，（55）政治运动，（56）南巡讲话，（57）思想改造，（58）计划生育，（59）倒爷，（60）个体户，（61）纸老俗人虎，（62）臭老九，（63）高干，高干子第，（64）特权，特权阶层，（65）救世主，（66）接班人，（67）第三者，（68）研究研究，（69）贫下中农，（70）单位，（71）过热，（72）万金油，（73）普通话，（74）无产阶级，（75）帽子，（76）阶级斗争，（77）稿，（78）干部，（79）雷锋，（80）爱人，（81）解放，（82）极右，（83）极左，（84）新时期，（85）新动向，（86）解放思想，（87）极左思潮，（88）愚公移山，（89）意思意思，（90）对象，（91）搞帽子，（92）热潮，（93）墨水，（94）调整，（95）整人，（96）整风，（97）头头，（98）独生子女，（99）简化字，（100）离休，（101）临时工の計101語である。これらの流行語彙は以下のように整理できる。

1）時代の経過とともに使用頻度が低くなったもの：（6）下放，（11）小皇帝，（13）小集团，（14）大男大女，（19）台胞，（38）走后门，（58）计划生育，（60）个体户，（98）独生子女
2）現在でも使用され続けられている語：（1）一刀切，（25）老外，（10）大锅饭，（13）小集团，（45）官倒，（59）倒爷
3）死語同然となった語（文化大革命中の政治用語が数多い）：（4）人民公社，（15）牛栅，（16）文革，（22）四个伟大，（24）右派，右派分子，（44）四人帮，（54）红卫兵，（39）批林批孔，（55）政治运动，（62）臭老九，（69）贫下中农，（74）开产阶级，（76）阶级斗争，（82）极右，（83）极左，（95）整人，（96）整风
4）『現代漢語詞典（第7版）』（2016）に収録されている語：（8）土包子，（10）大锅饭，（11）小皇帝，（20）打招呼，（25）老外，（31）向钱看，（32）多面手，（33）成分，出身，（36）坐班，（38）走后门，（66）接班人，（67）第三者，（70）单位，（80）爱人，（100）离休　これらは，当時流行語だった語がすでに共通語として定着していることを意味している。

このように見て来ると，流行語の移り変わりを通して，中国社会における変化の一側面を伺い知ることができる。この小冊子は，当時の台湾や香港の人々にとっては，大陸との観光事業，貿易促進事業などにおいて利用価値の高い，有用なものだったに違いない。一方，広東語から派生してすでに大陸の社会全体に定着している“打的”，“炒鱿鱼”，“买单”などの流行語が同書に収録されていないのは，方言の影響を受けた語ということで採用しなかったのか，その他の理由があるのかは不明である。

4. おわりに

その時々に新語が生まれ，その中から一部流行語として民間で広まり，多くの人たちに使用される。一部の若者だけに通じるものではなく，老若男女の間でもその語が日常生活の中に溶け込み，公共の場でも使用されれば，流行語として定着する。「新語・流行語」関連の出版が数年の1回だけの発行では時代遅れの感は否めない。せめてガイドブック的な新語の常用語だけを集めた簡明な辞書や範囲をせばめた，分かりやすい辞書の出版があると気軽に利用して，コミュニケーションの場で活用することが可能となる。そのことは，言語の表現力の向上にもつながると思われる。

最近では，趙蔚青（2020），趙蔚青（2021）などに見られるように，年末に雑誌やメディアなどでも新語のトップテン，ネット上の流行語のトップテンなども発表されている[10]。

そのため，最近，中国でも問題になっている流行語“躺平”（寝そべり状態，何も努力しないこと），“元宇宙”（メタバース），“疫苗接种”（ワクチン接種），”新冠病毒”（新型コロナウィルス）などは辞書には未収録であったとしても，マスコミなどの報道を通して，日本でもその新語・流行語の意味と背景を知り得ることができる。

ネット社会の現在，中国においては今後ますますネット用語が増え続けることは容易に予想される。私たちが共通語だと思っていた語“坐班”，“一刀切”，“超级市场（超市）”，“收音机”などの語が1980年代に新語として生まれている。これらの常用語から発生当時の社会や人々の生活などを調べることも意義のあるテーマだと思う。

大学における中国語教育の中で「流行語」をどのように扱い，どの範囲まで教えるべきかなどについては，今後，新語・流行語に関する論文の発表が広がりを見せている現在，「中国語教育学会」などでも研究発表が続出すると思われる。新語・流行語の分類についても注1に示した張黎（2017）の視点（「流行語」と「新語」はもともと二つの概念があるが，ほとんど同時期に言及されるので，同一概念とされているが実際はそうではない。流行語と新語の関連性について図で示し，その両者には共通部分があると指摘している）は興味深いものがある。張氏が指摘している新語・流行語の共通部分とそうでない部分について検討したい。併せて大陸と台湾の語彙の差異について，新語・流行語の相違点，更には政治体制の異なる大陸と台湾の法律用語についても今後の語彙研究の中に取り入れ，研究を進めたい。

注

1 現代中国語の規範化を編集目的とした中心的な辞書である。1978年に第1版が発刊され，その後，第2版（1983），第3版（1996），第4版（2002），第5版（2005），第6版（2012）と修訂を重ねながら，現在，第7版（2016）が刊行されている.

2 張黎（2017）は，新語と流行語の関連性について，「新語」と「流行語」を二つの概念としてとらえるが，両者には共通部分があると指摘している.

3 北京語言学院（北京語言大学の前身）は，対外中国語教育で名高い教育機関であり，大学出版社からは現代中国語に関する出版物が数多い.

4 植松希久磨（2017）は，「『現代漢語詞典』は，1978年の初版本が出版されて以来，現代中国語の規範化に重要な役割を果たしており，第6版から第7版の新語は約400語を収録している.」と述べている.

5 元中国社会科学院語言研究所所長（1994年～ 1998年）

6 “语言中不断出现新词语,此书搜罗宏富,诠释简明,不冗不繁,颇切实用.”

（言語には絶えず新しい語が登場しており，この書物は語の収集，引用が豊富で，解釈が簡潔であり，冗長でもなく，極めて実用に適している.）
周祖謨：元北京大学教授（1914年～1995年）

7（　）の中は選定項目の語数を表している.

8 若林正丈・家永真幸『台湾研究入門』(2020) 210ページ.

9 何佑安氏は本書のプロフィールによると，大陸の作家であり，歴史学者である．10数年前から，精力的に執筆活動，小説の英訳，日本語訳に取り組んでいると記されている.

10 趙蔚青氏は『咬文嚼字』や「国家言語資源モニター研究センター」が公表した年度ごとの流行語に関する論文を発表している．データから得られた流行語についての説明も詳しく紹介されている.

参考文献

1）中国社会科学院语言研究所编『现代汉语词典（第7版)』商务印书馆　2016年.
2）金丸邦三監修・吴侃編著『中国語新語辞典（三訂版)』同学社　2000年.
3）商务印书馆辞书研究中心编『新华新词语词典 2003年版』商务印书馆　2003年.
4）北京・商務印書館，日本小学館共同編集『中日辞典（第3版)』小学館　2016年.
5）于根元主编『汉语新词语』北京语言学院出版社　1991年.
6）于根元主编『汉语新词语』北京语言学院出版社　1992年.
7）刘庆隆等编『汉语新词词典』上海辞书出版社　1986年.
8）李行建主編『新词新语词典』语文出版社　1989年.
9）张寿康 主編『常用新词语词典』经济日报出版社　1991年.
10）北京市语言学会编『新词语词典』人民邮电出版社　1993年.
11）郭熙主编『汉语新语词典』江苏教育出版社　1993年.
12）張一帆・小島朋之『中国新語流行語辞典』日中通信社　1995年.
13）陳岩編『市場経済下の最新中国新語辞典』北九州中国書店　1995年.
14）欧阳因编『中国流行新词语』中国人民大学出版社　2000年.
15）宋子然主编『汉语新词新语年编（1997-2000)』四川人民出版社　2002年.
16）郭雅坤・内藤達志『中国新語・流行語小辞典』明石書店　2010年.
17）何佑安『大陸流行詞語800條』遠流出版公司　1993年.
18）若林正丈・家永真幸『台湾研究入門』東京大学出版会　2020年　210ページ.
19）瀬戸口勲「中国語の語彙について――北京語との比較を中心に」『東京国際大学論叢――人文・社会学研究』8号 2023年.
20）張黎「中国語における流行語の意味的バリエーションについて」『鹿児島国際大学大学院学術論集』2017年11月.
21）植松希久麿「中国語における新語の研究――『現代漢語詞典第7版』の語彙を中心として」『「東洋研究」編集委員会編』大東文化大学東洋研究所　2017年.
22）趙蔚青「2020年中国の新語・流行語」『日中語彙研究第10号』愛知大学中日大辞典編纂所　2021年.
23）趙蔚青「2021年中国の新語・流行語」『日中語彙研究第11号』愛知大学中日大辞典編纂所　2022年.
24）ビラールイリヤス・姜雪寧「流行語から見る中国社会の表現の変化」『長野大学紀要第33巻（第2・3号併号)』2012年.

研究ノート

初中級日本語学習者との接触場面における母語話者の発話調整行動

――「会話パートナー」活動でのやりとりから――

久保亜希
篠崎佳恵
柴田冴

Conversational Adjustment Features of Japanese Native Speakers in Contact Situations with Pre-Intermediate Japanese Language Learners: Cases of Interactions during "Conversation Partner" Sessions

KUBO, Aki
SHINOZAKI, Yoshie
SHIBATA, Sae

Abstract

This study investigates how Japanese native speakers (NS) with no experience in Japanese language education adjust their own and interlocutor's utterances in one-on-one natural conversations with non-native speaker (NNS) during "Conversation Partner (CP)" sessions, which allows international students to practice conversation with Japanese students at Tokyo International University. The analysis shows that NSs paraphrased their Japanese words and sentences using simple Japanese before communication problems arise. In addition, NSs often confirmed their own understandings by summarizing or completing NNS's incomplete and/or inaccurate utterances, and in this case adjustments were more likely to succeed. On the other hand, adjustments were less successful when

NSs replaced the NNS's English with Japanese or when the NS replaced its own Japanese speech with English. We observed different characteristics from previous studies conducted on Japanese language educators, and these findings will help optimize our educational guidance for future CP staff and general Japanese native speakers.

Keywords: Adjustment, Japanese native speaker with no experience in Japanese language education, Pre-intermediate Japanese language learners, Contact situation, Easy Japanese

目　次

1. はじめに
2. 先行研究
　2.1　NSの発話の調整
　2.2　発話の調整の分析アプローチ
　2.3　本研究の位置づけと研究課題
3. 調査概要
　3.1　調査方法
　3.2　調査協力者
　3.3　データ概要
　3.4　分析方法
4. 結果
　4.1　データの概観
　4.2　事前自己調整
　4.3　意味交渉中に生じたNSの調整
　　4.3.1　NNSの発話が原因で生じた意味交渉での調整
　　4.3.1.1　調整の出現頻度と成否
　　4.3.1.2　成功率が高い調整方法
　　4.3.1.3　成功率が低い調整方法
　　4.3.2　NSの発話が原因で生じた意味交渉での調整
　　4.3.2.1　調整の出現頻度と成否
　　4.3.2.2　成功率が高い調整方法
　　4.3.2.3　成功率が低い調整方法
5. まとめと今後の課題

1. はじめに

近年，母語話者（以下，NS）が非母語話者（以下，NNS）の理解を促すために使用語彙や文法を調整する「やさしい日本語」が注目されている。これは生活者として日本に定住する外国人のために，日本語教育文法の観点から，媒介語としての日本語を再考したものである（庵，2009）。外国人定住者が増加しているにも関わらず，多言語化していない日本社会では，全国の自治体や就労現場，教育機関等で，「やさしい日本語」の利用が広まり，有用性も示されている。その一方で，「やさしい日本語」はNS同士の会話で使用される日本語とは性質が異なるため，NSであっても適切な運用にはその習得が必要であるとされる（徳永，2009）。しかしながら，これまで行われてきたNSとNNSとのコミュニケーションについて行われた研究の多くは，第二言語習得の立場か

らNNSの言語運用力に着目している。NSによる日本語の使用実態や，「やさしい日本語」などのNNSを意識した言語調整が実践されているかどうかは中心的な研究の対象とされておらず，その実態は明らかではない。

この「やさしい日本語」が使用されている場として，東京国際大学で行われている「会話パートナー（以下，CP）」制度がある。これは，外国人留学生と日本人学生が日常会話を通して異文化交流の機会を提供する場として設けられた場で，留学生が日本人学生と日本語の会話練習を行うことができる。留学生のための日本語の支援の場の提供を主な目的として開始されたが，日本人学生にとっても「やさしい日本語」を学び，実践することができる場としても活用されている。実際にCP活動に参加した日本人学生からは，「活動を始める前と後で自分が留学生に使う日本語に変化があった」と回答がされていた。日本人学生はCPとして外国人とのコミュニケーションを学ぶ過程で，自らの言語使用を客観的に捉えなおしていたことがわかり，NSの学びの場として有用ではないかという可能性が指摘されている（久保他，2020）。

このように，CP活動は留学生だけでなく，日本人学生にとっても有意義な活動であるといえる。しかしながら，実際に日本人学生と留学生との会話において，どのようなやりとりが行われているかは明らかになっていない。CP活動において，日本人学生と留学生がどのようにやりとりをして会話を進めようとするのか，そして会話の進行に困難をきたした場合，どのように調整を行うのか，もしくは行えないかを明らかにすることは，今後のCPへの指導のほか，多言語社会でのコミュニケーション方略を模索するうえでも重要であると考える。

このような背景を踏まえ，本研究では，CP活動でのやりとりを対象に日本語教育の経験がないNSがNNSである留学生との会話において，どのように発話を調整してコミュニケーションを行うのか，発話の調整に問題を抱えているのかを明らかにすることを目的とする。日本語教育についての経験や知識がない，もしくはほとんど持っていない日本人学生を対象に研究を行うことは，一般社会での接触場面においてどのようなコミュニケーションが行われるのかを明らかにするうえで，大変有意義であると考える。

2. 先行研究

2.1　NSの発話の調整

前述のように，NSとNNSとのコミュニケーションについては第二言語習得の立場からNNSの言語運用力に着目したものが多いが，その中で，NSの発話に着目した研究を概観したい。NSが接触場面においてどのような調整行動をとるのかについては，NNSとの接触経験の多寡との関連で述べたものが目立つ。NSの調整行動と接触経験の関係を分析したものに村上（1997），増井（2005），柳田（2010），雷（2021）がある。

村上（1997）は，NSを日本語教育経験の有無と接触経験の多寡によって4群に分け，日本語上級レベルのNNSとの間で双方向性のインフォメーションギャップタスクを課して「意味交渉の方法」（「訂正」，「貢献・完成」，「精密化」，「確認チェック」，「明確化要求」）の頻度を調べた。その結果，「意味交渉の方法」の頻度が最も高かったのは日本語教師ではないが接触経験が多い群（留学生別科等の職員）で，特に「精密化（NNSの発話に対してNSが情報を加えて繰り返したり完成させたりする）」の頻度が高かったという。そして，これは調査協力者が彼らの職務で留学生と関わる必要があることが多く，「本当に意味のあるコミュニケーション」を日常的に行っていた結果ではないかと考察している。

接触場面における日本語を「共生言語」と捉えた増井（2005）は，NSもまたNNSにとって理解しやすい日本語の運用方法を身に付けていく存在と位置付けて研究を行った。具体的には接触経験のない5人のNSを対象に，修復的調整[1]の方略が短期間の集中的接触（7～10日で5回）でどのように変化するかを分析した。NSが絵を説明し，各回初対面のNNS（日本語中級レベル）がその説明を聞いて同じ絵を再生するという描画タスク中の会話を分析した結果，接触経験を重ねるうちに意味交渉中の調整の頻度が増え，方法も多様化すること，特に言い換えの頻度が増えたことを報告している。

また，接触経験の有無に着目した柳田（2010）は，日本語教育の知識を持たないNSを接触経験の多寡で2群に分け，日本語上級レベルのNNSとの双方向性インフォメーションギャップタスクを課した調査を行っている。接触場面での「情報やり場面」におけるコミュニケーション方略を比較した結果，接触経験の多いNSは一文を短く発話することや，躊躇なく理解確認をしていること，自発的に発話修正を行うことを報告している。

接触経験の多寡に加え，学習者の日本語能力による相違に注目した研究には，雷（2021）がある。雷（2021）はNSを接触経験の多寡で2群に分けたうえで，相手のNNSの日本語能力によって「自己修復」[2]の使用回数，方法，発話連鎖に影響があるかを分析している。その結果，接触経験の少ないNSより，接触経験の多いNSのほうが「自己修復」の回数が多く，また接触経験の多いNSは上級NNSよりも初中級NNSに対して「自己修復」を有意に多く用いる傾向があること等を明らかにした。学習者の習熟度によって，NSが使用する「自己修復」には異なる傾向が見られるとしている。

このように，接触経験によってNSが調整の方略を学習していくこと，接触経験の多いNSには一定の傾向が見られることが明らかになっている。しかしながら，どのような調整方略が実際に意味交渉に利するのかは具体的には明らかになっていない。また，多くの研究では調査協力者のNNSが日本語中級レベル以上であるが，雷（2021）が指摘しているように，日本語レベルがより低い場合には，異なる調整行動が行われることも予測される。よって初（中）級レベルを対象とした研究の蓄積が必要である。

そのような中で，大平（1999）は，日本語入門レベルの学習者を対象にし，かつ意味交渉の成否と成功率に着目した点で興味深い研究である。日本語入門者クラスで行われたオーラルインタビュー（NSがNNSに質問する）をデータとして，質問と応答の連鎖におけるNSの「言い直し」による自己調整を対象に分析を行った。「言い直し」を「自己訂正」と「意味交渉」に大別し，さらに11の下位分類（「同義語，類義語の使用」「対義語の使用」「パラフレーズ」「具体化」「一般化」「単純化」「詳述化」「文構造の変化」「アプローチの変化」「他言語の使用」「繰り返し」）に分類したうえで，その頻度と成功率を分析している。その結果，最も頻度が高かったのは「繰り返し」であったこと，一方で「繰り返し」は成功率が低かったこと，そして最も成功率が高かったのは英語などの他言語を使用した場合であったことを報告している。これは，日本語レベルが低いNNSに対して，成功率が高い調整方法を明らかにした点で注目に値するだろう。しかしながら，この研究では調査協力者であるNS 5名のうち3名が日本語教育経験を有しており，その知識が方略の使用に影響した可能性が大いに考えられる。日本語教育経験のないNSへの教育をどのように行うべきか，日本語教育経験のないNSの実態を明らかにしたうえで，対応を検討する必要があるだろう。

2.2　発話の調整の分析アプローチ

次に，接触場面の会話データの記述・分析アプローチに関わる研究に目を向けたい。例えば，宮崎（1999）は，第二言語習得研究の立場から，NSとNNSの接触場面でやりとりに支障が生じた際の調整行動に着目し，そのモデル化を行っている。Schegloff *et al.*（1977）やMcHoul（1990）等の会話分析の研究に基づき，調整行動のパターンを「調整軌道」と呼び，発話の不適切さを誰がマークするかという観点と，誰が調整を行うかという観点から，4つのタイプに分類している。すなわち，問題のある発話に対して他者が指摘をし，問題がある発話をした話者が自身で調整をする「他者マーク自己調整型」，問題のある発話に対して自身が指摘･調整をする「自己マーク自己調整型」，問題のある発話に対して自身が指摘をするが他者が調整をする「自己マーク他者調整型」，問題のある発話に対して他者が指摘・調整をする「他者マーク他者調整型」である。さらに，調整軌道に入るための「調整マーカー」の分類と，調整の連続性や参加者の多様性に関わる「調整デザイン」の分類を行い，調整行動を包括的に理解するための方法を提示した。この研究は第二言語習得研究の立場から調整行動をモデル化しようとするものであるが，NSの調整行動を分析する際にも有用である。

2.3　本研究の位置づけと研究課題

本研究は，本学のCP活動で日々行われている「日本語教育経験のないNS」と「初中級NNS」の接触場面を対象とする。2.1より，このような組み合わせの会話データを用いてNSの言語調整を分析した研究はあまり行われておらず，本研究はこれまでの研究で明らかにされてこなかったこの部分に光を当てることとした。また，分析方法として「調整軌道（宮崎，1999）」の概念を取り入れ，タイプ別の特徴や成功率をとらえることで，新しい知見が得られるのではないかと考える。

そこで，本研究では接触場面の会話において，日本語教育の経験を有していないNSがどのように会話を調整するのか，どのような調整方法の成功率が高いのかを明らかにするため，以下の2点を研究課題とした。

(1) NSはやりとりに支障が生じる前に，どのように自分の発話を調整しているのか。
(2) NSはやりとりに支障が生じた場合，どのように意味交渉を行い，調整しているのか。

研究課題（1）に関して，具体的にはどのような調整方法が多く用いられるのか，またそれらがどの程度成功しているのかに注目した。なお，研究課題（1）で分析対象とする「やりとりに支障が生じる前の調整」を本研究では「事前自己調整」と呼ぶ。研究課題（2）に関しても研究課題（1）と同様に調整の方法と成否に注目したが，さらに意味交渉がNNSの発話が原因で生じたのか，NSの発話が原因で生じたのかという観点と，また，その問題に対してNSとNNSのどちらがマークをしたのかという観点からも区別して分析を行った。

3.　調査概要

3.1　調査方法

本研究では，日本語教育経験者ではないNSの調整行動を概観することを目的として，CP活動中の日本人学生と外国人留学生のやりとりを記録した。会話データの収集にあたり，まず各学期の開始前に行われる事前研修で，CP活動に参加する日本人学生の中から協力者を募った。その後，協力者となった日本人学生が，各学期のCP活動中に任意でCP活動に参加した外国人留学生への調査説明と協力依頼を行い，同意が得られた場合に会話を録音又は録画した。これと同時に，

研究者らが担当する日本語科目のクラスでも，研究者ら自身による調査協力者の募集が行われた。研究者による調査説明を経て協力者となった留学生は，協力者の日本人学生が担当する勤務シフトの中から都合の良い日時を選んで調査に参加した。

また，CP活動における自由会話のデータ収集以外に，調査協力者となったNSとNNSに対して，CP活動開始前及び終了後にアンケート調査を実施した。NS対象の事前アンケートでは，CPとしての活動歴や接触経験の有無等に関する背景調査を行い，事後アンケートではNNSとの会話中に困難を感じた点，自分の発話で意識した点等について調査した。一方，NNSに対するアンケートは，調査協力に同意したやりとりの直後にNSの協力者が回答を依頼し，日本語学習歴や，対話者（NS）の発話を理解するうえで実際に役立った調整行動（言い換え，繰り返し等）について記述してもらった。

3.2　調査協力者

NSの調査協力者は全員が日本語教育が専攻ではない日本人学生（女性）で，日本語教育に関する授業を受講した経験なども持っていなかった。4名中2名は，データ収集時点でCP活動への参加が初めてであったが，4名共NNSとの接触経験を有していた。NNS 6名は，日本語学習歴1年から3年程度の外国人留学生で，本学で開講されている日本語科目の初級後半，もしくは中級前半クラスに在籍する学生であった。収集した会話データ中の日本語でのやりとりから，全員の日本語能力は初中級レベル相当と判断した。以下，調査協力者の属性を**表1**にまとめる。

3.3　データ概要

調査協力者のNSによって録音又は録画された6組の会話データの総時間数は104分55秒（1組あたりの平均時間約17分49秒）であった。調査は2021年から2022年にかけて行ったが，途中コロナ禍の影響でCP活動の対面実施を中止していたため，収集した6組の会話データのうち，ペア1～3の3組はオンライン，残り3組は対面での会話であった。CP活動の利用者は，日本人との会話練習を目的とする学生の他に，履修している日本語科目の課題遂行を目的とする留学生もいるが，本研究では接触場面での自由会話におけるNSの発話調整行動に注目しているため，前者のみを分析対象とした。また，CP活動では，その設置目的に鑑みて原則日本語の使用が求められた。しか

表1　調査協力者について

会話ペア番号	ペア1	ペア2	ペア3	ペア4	ペア5	ペア6
NS	NS1	NS2		NS3		NS4
年齢	20	19		19		20
性別	F	F		F		F
CP活動歴	4期目	2期目		1期目		1期目
接触場面での使用言語	日本語/英語	日本語/英語		英語		日本語
NNS	NNS1	NNS2	NNS3	NNS4	NNS5	NNS6
年齢	22	24	19	22	21	20
性別	F	M	F	F	F	M
国籍	ネパール	アメリカ	モンゴル	ハンガリー	ベトナム	バングラデシュ
日本語学習歴	2~3年	1~2年	3年以上	1~2年	1~2年	1年未満

し，会話中にメモを取ることや，パソコン及びスマートフォン等での画像検索，辞書の利用に対する制限はなかった。

3.4　分析方法

収集した会話データの一部は，任意で記録者本人によって文字化されたが，最終的な処理と記号の付与は研究者が行った。文字化したデータの中から，事前自己調整（NSが意味交渉が生じる前に自ら発話の修正を行っている箇所）と意味交渉（NSまたはNNSの発話が原因で会話が中断し，NSとNNSが互いに聞き返しや理解チェックによって意味交渉を行っている箇所）を抽出した。次に，意味交渉場面でのやりとりを宮崎（1999）を参考に3つの観点から分類した（**図1**）。まず，意味交渉が生じた原因となる発話を特定し，その発話がNSによるものかNNSによるものか，つまり，意味交渉が「NSの発話が原因」で生じたものか「NNSの発話が原因」で生じたものかに分類した。次に，その原因となった発話に対して，聞き返しや質問などによって指摘している発話を特定した。この発話を，自己発話に対して自ら問題を指摘した場合は「自己マーク」，相手から指摘があった場合は「他者マーク」と分類した。最後に，調整された発話を抽出した。この発話は，自己発話の問題に対して自ら調整した場合を「自己調整」，相手が調整した場合を「他者調整」と分類した。調整の原因となった発話に対して，NSが複数の異なる調整を順に試みた場合があったが，異なるターンで行われた場合は，調整の連鎖全体を通して1回の調整と捉えるのではなく，別の調整としてカウントした。

なお，聞き返しや質問によるマークが行われず，すぐに調整を行う場合も散見されたが，その場合は調整を行った話者自身が，調整前の発話に問題があると判断したと考えられるため，その調整を行った話者がマークをしたものとして分類した。

次に，事前自己調整として抽出した発話と，意味交渉の中から抽出した調整をその方法によって分類した。接触場面におけるNSの調整行動の特徴を明確化するために，本研究ではNSによる調整方法の上位カテゴリーを2種類（言い換え，繰り返し）に分類し，さらに先行研究（大平1999；増井 2005；柳田 2009）を参考に10種類の下位カテゴリーを生成した。また，言語以外の方法によって調整を行うやりとりも見られたため，この場合は「その他」とした。本研究における調整発話の分類を**表2**に示す。

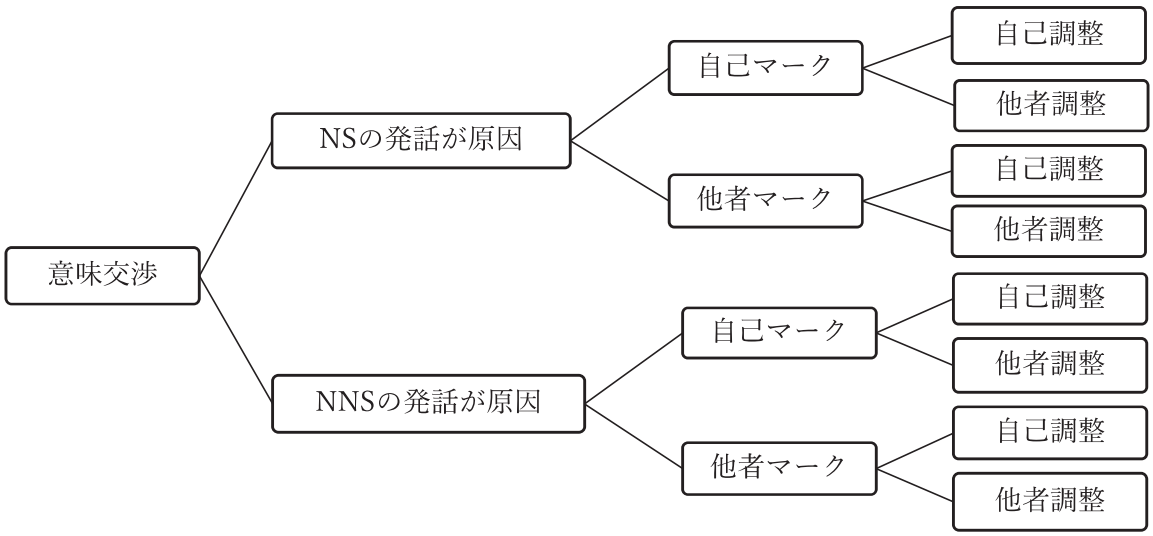


図1　意味交渉場面でのやりとりの分類

表２　NS による調整発話の分類

上位カテゴリー	下位カテゴリー	定義
言い換え	英語→日本語	英語を日本語で言い換える
	日本語→英語	日本語を英語で言い換える。英語で説明する。
	日本語→日本語	日本語を他の日本語で言い換える (単語レベルの言い換え、スタイルシフト)
	説明	どのような意味なのか、文レベルで説明をしている
	要約・完成	要約・完成。相手が話した文を短く言い換える。情報をまとめる。発話が不明瞭な時やうまく話せていない時に文を完成させる。
	訂正	文法的な誤りや語彙的な誤りを正す
繰り返し	繰り返し	発話をそのまま繰り返す
	統合繰り返し	統合繰り返し。直前の発話を組み合わせて繰り返す。
	部分繰り返し	部分繰り返し。直前の発話の一部を繰り返す。
	調整発話の繰り返し	調整発話を繰り返す
その他	-	言語以外の調整（絵を描く、インターネットで調べる）

表２の10種類の下位カテゴリーに分類される調整発話がどのようなものを指すのか，会話例とともに順に解説する。

(1) 英語→日本語

英語を日本語で言い換える調整発話。会話例１（「recommend」→「おすすめ」）のような単語レベルの言い換えだけでなく，文レベルの言い換えも含まれる。

会話例１（以下，会話例中の調整の原因となった発話に点線，調整発話に実線）

01　NNS-2:そうですね, あ::, 神社.【NS-2】さん, えーと, 私はまだ日本まだたくさん
02　　日本見えません. だから【NS-2】さん, あ::: oh my god, recommen...
03　NS-2:　あ:, レコメンド, オススメかな?オススメ.
04　NNS-2:あ: お願いします.

(2) 日本語→英語

日本語を英語で言い換えたり，英語で説明したりする調整発話。会話例２（「就活」→「job hunting」）のように英単語をそのまま言い換える場合もあるが，英語で言葉の説明を加えることもある。

会話例２

01　NS-3:　へ::そっか. 今は, 就活?
02　NNS-4:就活?
03　NS-3:　就活, job hunting してる?
04　NNS-4: あ::yeah. はい.

(3) 日本語→日本語

日本語を別の日本語の表現に言い換える調整発話。聞き手が理解できなかった言葉や表現を「やさしい日本語」に置き換える方法以外に，会話例３（「一緒に帰るんですか?」→「一緒に帰るの?」）のように丁寧体から普通体（またはその反対）へのスタイルシフトもこのカテゴリーに分類される。

会話例3

01	NS-3:　え:::, あ:, 【人名 A】と【人名 B】もベトナムに帰るんでしょ?
02	一緒に帰るんですか?
03	NNS-5:ん?
04	NS-3:　一緒に帰るの?
05	NNS-5: うん, はい.

(4) 説明

どのような意味なのか，文レベルで説明をしている調整発話。会話例4のように相手が理解できなかった言い方に例を追加したり，意味交渉のきっかけとなった言葉の属性説明（増井，2005）をしたりしている場合は「(4) 説明」となる。

会話例4

01	NS-2:　え, すごい, 何か国語しゃべれるの?何個.
02	NNS-3:ん:: ((顔をしかめて))なんかこ?なんこ?
03	NS-2:　えっとなんこ, しゃべれる?ことば. 例えば英語とか, 日本語とか.
04	NNS-3: あ:, さん?に?英語, 日本語と思います.

(5) 要約・完成

相手が話した文を短く言い換えたり，情報をまとめたり，発話が不明瞭な時やうまく話せていない時に文を完成させたりする調整発話。会話例5では，NNS-2が一文で短く話せなかった内容をNS-2 が端的にまとめて調整している。

会話例5

01	NNS-2: あ, あ, 今日は, あ:授業があります.
02	えー, 私の日本語クラス,私の日本語の授業は, まだ終わりです,
03	でした, と, ん: 後で, あ:: 他の授業があります.
04	NS-2:　あ:, じゃさっき日本語の授業が終わって, 次にまた他の授業が
05	あるんだね.
06	NNS-2: そうです.

(6) 訂正

文法的，あるいは語彙的な誤りを正す調整発話。会話例6のように動詞を正しく言い換える発話や，非文法的な表現，漢字語彙の読み間違いを正しく言い直すなどの行動を指す。

会話例6

01	NNS-3:あの昼ご飯の後で: あの人力車: に: 行きました?
02	NS-4:　人力車に乗りました?
03	NNS-3:　あ: 乗りました乗りました. はい. あ: [とっても¥楽しかった¥.
04	NS-4:　[とっても楽しい: へ::

(7) 繰り返し

直前に発話された言葉や表現をそのまま繰り返す調整発話。会話例7の3行目のように，既出の発話と同じ言い方が採用された調整方法である。

会話例7

01	NS-3:	3人で?
02	NNS-5:	ん?
03	NS-3:	3人で? 【人名A】と【人名B】と.
04	NNS-5:	(いや)
05	NS-3:	あ家族と?
06	NNS-5:	家族と.（笑い）

(8) 統合繰り返し

直前の発話の一部を組み合わせて繰り返す調整発話。会話例8では，3行目にNS-1が直前のNNS-1の発話をそのまま繰り返すことで内容を確認し，4行目で新たに提示された「経済に」という情報を追加しながら再度繰り返すことで，2行目の発話を調整している。

会話例8

01	NS-1:	え:: (2) 国際関係だよね, 学部は.
02	NNS-1:	はい::, でも::, あ::ちょっとチェンジしたい.
03	NS-1:	チェンジしたい?
04	NNS-1:	はい, 経済::に.（笑い）
05	NS-1:	経済にチェンジしたいの?
06	NNS-1:	はい.

(9) 部分繰り返し

直前の発話の一部を繰り返す調整発話。会話例9では，2行目でNNS-2が発した内容の中から，NS-2は「東京の神社」のみを取り出して上昇調で繰り返している。

会話例9

01	NNS-2:	あ, ん:, あ(3) 私はえーっと:: 東京のあ: じん, あいえいえ, すいません,
02		にほ, 日本, 神社, 好き, から, 東京の神社, あ: 見た: ほしい:です.
03	NS-2:	東京の神社?
04	NNS-2:	東京の神社.
05	NS-2:	うんうんうん, に, 行きたいのかな?

(10) 調整発話の繰り返し

直前に行われた調整を繰り返す発話。会話例10では，一度3行目でNS-3が「点数」という言葉を「スコア」と英語に言い換えて調整しているが，4行目でNNS-5が「（てんすく）?」と上昇調で発話し，不理解表明が行われたため，5行目で再び「スコア」という調整発話が繰り返されている。

会話例10

01	NNS-5:	お?, [合格?
02	NS-3:	[で::も::, なんか, すごく難しかった. から:, でも前とほとんど
03		同じ. 点数, スコアだった.
04	NNS-5:	(てんすく)?
05	NS-3:	スコア.
06	NNS-5:	score, うんうん.

調整は上記の10項目とその他に分類したが，実際の調整ではNSが1回の調整発話で複数の方略を組み合わせている場合（例えば「要約･完成」しながら文法を「訂正」している調整）もあった。このような調整は複数の調整を組合せた方略として分類した。

最後に，調整の結果の成否を分析した。CP活動における接触場面でのコミュニケーションは，調整によりやりとりが成功したと捉えられる場面とそうでない場面があった。調整発話の種類によって，やりとりの成否にどのような差が見られるのかを観察するため，本研究では，調整の成否を次のように定義した。まず，正しく行われた調整に対して，NNSが相槌を打ったり理解を示したりした場合，また会話が問題なく進んでいる場合は調整の結果を「成功」と捉えた。次に，相手が調整内容を理解できなかった場合，また調整内容自体が間違っている場合は「失敗」と捉えた。適切な調整の直後にNNSから明確な反応がない場合は「不明」と定義した。NSが行ったすべての調整発話について，研究者3名がそれぞれの成否を個々に判定し，意見が合わなかったものは3名全員で協議のうえで結果を決定した。

4. 結　果

4.1　データの概観

まず，分析対象とした会話データの概観を示す（**表3**）。

データから事前自己調整を抽出したところ，計19回の調整が観察された。次に，会話データから意味交渉を抽出したところ，全部で139回観察された。そのうち，NNSの発話が原因で生じた意味交渉が117回見られ，そのうちNSが調整を行った回数は66回，NNSが調整を行った回数は47回であった。なお，調整が行われなかったやりとりは4回見られた。一方，NSの発話が原因で生じた意味交渉は22回見られ，そのうちNS自身が調整したのは17回，NNSが調整を行ったのは5回であった。意味交渉のほとんどがNNSの発話が原因で開始されており，それに対してNSが積極的に調整を行っていたことが推察される。

さらに，それぞれの意味交渉が誰に指摘されて開始されたのか，つまり誰がその発話を問題のある発話としてマークしたのかを分析するため，自己マークによって開始されたか，他者マークによって開始されたかに分類した。その結果，NNSの発話が問題で開始された意味交渉では，NSが他者マークをしたやりとりが48回見られた。一方，NNS自身が自分の発話に問題があることを指摘する自己マークは69回見られた。NSがNNSの発話の問題を指摘するよりも，NNSが自分の発話に問題があることを積極的に示す傾向が見られた。一方，NSの発話が原因で開始された意味交渉では，NSによる自己マークは4回，NNSによる他者マークは18回と，NNSが不理解を表明して開始されたものが多かった。

表３　事前自己調整と意味交渉における調整の頻度

	意味交渉						事前自己調整
	NNSの発話が原因			NSの発話が原因			
	NSによる他者マーク	NNSによる自己マーク	小計	NSによる自己マーク	NNSによる他者マーク	小計	
NSの調整	30	36	66	3	14	17	19
NNSの調整	17	30	47	1	4	5	
無調整	1	3	4	0	0	0	
合計	48	69	117	4	18	22	19

4.2　事前自己調整

まず，意味交渉が生じる前にNSが自分の発話を修正した事前自己調整の結果を述べる（**表4**）。

表４　事前自己調整の調整方法の頻度とその成否

上位カテゴリー	下位カテゴリー	成功	失敗	不明	合計
言い換え	日本語→日本語	10	1	2	13
	日本語→英語	1	1	1	3
	説明	3	-	-	3
	合計	14	2	3	19

事前自己調整は19回と頻度は多くなかったが，その中でも一番多く見られたのは「日本語→日本語」への言い換えの13回で，成功率は77％（成功10，失敗1，不明2）であった。次に多かったのは「説明」の3回で，すべて成功をしていた。「日本語→英語」も3回見られたが，成功は1回のみであった。

では，一番多く見られた「日本語→日本語」がどのように調整されていたのか，その例をあげる。この言い換えで一番多く見られたのは，日本語の表現をより簡易な表現に言い換える調整であった。

会話例11　事前自己調整での「日本語→日本語」の成功例

01 NS-2:　それ以外だと: あ, 私【県名】しゅっし，【県名】に, 住んでるんだけど,
02 NNS-2: あ:【県名】.
03 NS-2:　そう，【県名】にも: なんかね, たくさん温泉があるんだよね, 温泉.
04 NNS-2: あ::そうですか.

この例では，NS-2が自分の「出身」と述べようとしたところを，「住んでいる」という，より簡易な語彙で言い換えていた。NS-2は，NNS-2が「出身」という語彙が理解できないのではないかと推測し，不理解が表明される前に言い換えたと考えられる。

もう一例，「日本語→日本語」の調整例をあげる。

会話例12　事前自己調整での「日本語→日本語」の成功例

01 NS-3:　私写真を:Instagram で:見ました.お寿司?どんぶり?どんぶり?
02 NNS-4:（あ:: はいはい.）
03 NS-3:　そうそう. おいしかった? [おいしかったですか?
04 NNS-4:　　[はい, はい

この例のように「おいしかった？」という普通体の発話を「おいしかったですか?」と丁寧体で言い直す発話も見られた。相手が不理解を示す前に言い換えを行うことで，スムーズなやりとりにつながったと考えられる。しかしながら，この例では言い換えを行う前に，「はい」という返答がされていることからもわかるように，元の発話でも理解に影響はなかった可能性も考えられる。

このように，事前自己調整では日本語を用いた言い換えが行われており，NSが「やさしい日本語」を用いて調整をしようとしたことがわかった。NNSもその調整された発話に対して相槌を打つなどの反応を示しており，NSの事前自己調整がNNSの理解に役立っているのではないかと考えられる。

4.3　意味交渉中に生じたNSの調整

次に，意味交渉中のNSの調整に注目する。**表３**で示したように，本研究では意味交渉が117回観察され，そのうちNSが調整した回数は66回，NNSの調整は47回であった。本研究ではNSの調整方法を明らかにするため，「NSの調整」に注目して分析を進めた。

4.3.1　NNSの発話が原因で生じた意味交渉での調整

4.3.1.1　調整の出現頻度と成否

ここでは，NNSの発話が原因で生じた意味交渉，つまり，NSがNNSの発する情報を読み取る必要がある場面でNSがどのように調整をしたのか，その結果を報告する。

NSの調整方法を分析した結果を**表5**にまとめた。「言い換え」による調整は62回（単独52回，言い換え同士の組合せ7回，繰り返しとの組み合わせ3回）見られた。一方，「繰り返し」による調整は7回（単独4回，言い換えとの組み合わせ3回）で，調整のほとんどが「言い換え」によるものであることがわかった。一番多く使用された調整方法は「要約・完成」，「訂正」の各20回で，どちらも単独での使用が14回，他の調整方法との組み合わせでの使用は6回見られた。次に多く観察されたのが「英語→日本語」の17回（単独14回，組み合わせ3回）であった。続いて，「説明」が6回（単独のみ），「部分繰り返し」が5回（単独3回，組み合わせ2回），「日本語→日本語」が4回（単独3回，組み合わせ1回），「統合繰り返し」が1回（単独のみ），「調整繰り返し」が1回（組み合わせのみ）であった。

調整の成功率[3)]を算出したところ，「訂正」は85％（成功15，失敗3），「要約･完成」は80％（成功13，失敗3，不明1）と高かったが，「英語→日本語」は64.7％（成功10，失敗5）と比較的低い

表５　NNSの発話が原因で生じた意味交渉での調整方法の頻度とその成否

		NSによる他者マーク				NNSによる自己マーク				合計
上位カテゴリー	下位カテゴリー	成功	失敗	不明	計	成功	失敗	不明	計	
言い換え	要約・完成	6	1	-	7	5	1	1	7	14
	英語→日本語	1	-	1	2	7	5	-	12	14
	訂正	9	1	-	10	3	1	-	4	14
	説明	1	1	-	2	2	1	1	4	6
	日本語→日本語	2	-	-	2	1	-	-	1	3
	日本語→英語	1	-	-	1	-	-	-	-	1
繰り返し	部分繰り返し	1	-	-	1	2	-	-	2	3
	統合繰り返し	1	-	-	1	-	-	-	-	1
言い換え+言い換え	英語→日本語，日本語→日本語	1	-	-	1	-	-	-	-	1
	英語→日本語，訂正	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	要約・完成，英語→日本語	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	要約・完成，訂正	2	-	-	2	1	1	-	2	4
言い換え+繰り返し	要約・完成，調整繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	訂正，部分繰り返し	1	-	-	1	-	-	-	-	1
	日本語→日本語部分繰り返し	-	-	-	-	-	1	-	1	1
	合計	26	3	1	30	24	10	2	36	66

傾向が見られた。

次に，NSによる他者マークによって開始された調整か，NNS自身による自己マークによって開始された調整かによって成功率が異なるのかに注目した。それぞれの成功率を算出したところ，NSによる他者マークは成功率が86.7％（成功26，失敗3，不明1）であったのに対し，NNSによる自己マークは成功率が67.7％（成功24，失敗10，不明2）と低い傾向が見られた。これは，後述するように「英語→日本語」の言い換えによる調整の成功率が53％と半数程度であることが影響していると考えられる。

4.3.1.2　成功率が高い調整方法

では，これらの調整がどのように行われたのか，まず成功率が高かった調整に着目する。

NNSの発話が原因で生じた意味交渉では，「要約・完成」が多く使用され，成功率も高かった。成功率は，自己マークで開始された場合も，他者マークで開始された場合もどちらも高く，相違は見られなかった。下記に会話例をあげる。

会話例13　意味交渉での「要約・完成」の成功例

01	NNS-2:	でも, あ: 私の国に, あ:, と, すみません, 私の国, あ:, と,
02		Oh my god. ((頭を振る))
03	NS-2:	(笑い) 大丈夫だよゆっくりで(笑い) .
04	NNS-2:	私の国で, 日本に行った時, 私の, ホテルは, 東京です.
05	NS-2:	じゃあ日本に初めて来た時はホテルで,東京のホテルで,す,アレか.
06	NNS-2:	そうですね, 日本人, あ, もう一度お願いします.
07	NS-2:	あの: 初めて日本に来た時は, その東京にあるホテルで,
08		過ごしてたっていうか, 住んでた, だよね? [東京のホテルで.
09	NNS-2:	[うんうん.
10	NS-2:	うんうん, そこから【地名】に移動したのかな.
11	NNS-2:	そうです.

まず，1行目でNNS-2が「でも , あ: 私の国に , あ:, と , すみません , 私の国 , あ:, と」と何か述べようとしているが，うまく述べられず「oh my god」と自分の発話に問題があると自己マークをしている。続けて「私の国で , 日本に行った時 , 私の , ホテルは , 東京です」と発話を続けようとしているが，断片的な発話になってしまっている。NS-2はその発話からNNS-2の発話意図を読み取り，7-8行目で「あの: 初めて日本に来た時は , その東京にあるホテルで , 過ごしてたっていうか , 住んでた , だよね?」と，NNS-2の発話を統合してまとめ，調整に成功している。この会話では，5行目で調整を一度断念しており，NSは言い換えに苦慮している様子が見られるが，「だよね?」と相手に確認をしながら進めるなど，工夫しながら調整しようとしていた。

このように，「要約・完成」による調整では，NNSが断片的に述べている発話をわかりやすくまとめたり，文として適切な形で完成させたりして発話する様子が見られた。成功率は比較的高く，NNSの発話意図が読み取れる場合にはこの調整によって発話を円滑に進められている様子が観察された。

次に，「要約・完成」と同じく，成功率が高かった「訂正」の例を紹介する。この会話例は，NNSの文法の誤りを正しい発話に修正した例である。

会話例14　意味交渉での「訂正」の成功例

01	NS-2:	あ::確かに. じゃぁ東京でもいいけど, なんかどこか遊びたいところ
02		とかも, 特にない? 東京でもいいけど.
03	NNS-2:	あ, ん:, あ (3) 私はえーっと:: 東京のあ: じん, あいえいえ, すいません,
04		にほ, 日本, 神社, 好き, から, 東京の神社, あ: 見た: ほしい:です.
05	NS-2:	東京の神社?
06	NNS-2:	東京の神社.
07	NS-2:	うんうんうん, に, 行きたいの[かな?
08	NNS-2:	[とお寺, うん.

この会話では，NS-2のどこか遊びに行きたいところがないかという問いに対し，NNS-2が3-4行目で「東京の神社, あ: 見た: ほしい: です.」と非文法的な発話で答えている。NS-2は5行目で「東京の神社?」と相手の発話の一部を繰り返して他者マークによって問題点を指摘し，それに続く発話を引き出そうとしているようだが，NNS-2からの修正は見られず，7行目でNS-2が「に行きたいのかな」と訂正をしている。このNSによる訂正によってNNSの発話意図が確認され，その後NNSは「とお寺」と補足をしたうえで「うん」と意思疎通が完了したことを確認している。

このように，母語話者が文法や語彙を訂正する場合は，NNSもその調整をスムーズに受け入れ，発話が円滑に進む様子が観察された。このような誤りは意味理解自体には支障がない場合が多かったため，コミュニケーションにも支障が生じなかったとも考えられる。

このように，「要約・完成」や「訂正」による調整は多く行われ，成功率も高い傾向が見られた。これらの調整はNNSの発話が原因で生じた意味交渉中に生じたものであったが，NSがNNS意図を適切に汲み取り，適切な言い換えができたときに成功しやすいと考えられる。

4.3.1.3　成功率が低い調整方法

次に，失敗が多く見られた調整方法に注目する。「英語→日本語」を用いた調整はNNSによる自己マークで多く観察された。「要約・完成」「訂正」と同様に多く観察された調整方法であったが，成功率が低い傾向が見られた。会話例15は，NNSの自己マークによって始まった意味交渉で，NNSが自分の好きなアニメについて話している例である。

会話例15　意味交渉での「英語→日本語」の失敗例

01	NNS-6:	はい, バックグラ, バックグラウンドがとても, dark, dark?
02	NS-4:	ダーク, 闇?
03	NNS-6:	闇?
04	NS-4:	多分そのダークは暗い, あ暗いでもいいですね. 暗いですか.
05	NNS-6:	うんうん, 暗いです.

この会話では，まずNNS-6がアニメのバックグラウンドが「dark」と述べているが，適当な日本語表現が見つからず，上昇調の発話で自己マークをして，NS-4に助けを求めている。NS-4は「ダーク」と一度繰り返したのち，「闇」という日本語を提示することで調整しているが，NNSは理解できなかったようで，「闇?」と聞き返している。NS-4はその反応を受け，「暗い」というより簡易な表現にさらに言い換えをしている。NS-4が最初にNNS-6の理解語彙よりも難しい語彙を提示しているため，一度目の調整は失敗してしまっていた。「ダーク」という言葉から「闇」という語彙を反射的に示してしまったものの，NNSの様子を見てからより適切な言葉を検索することができていた。

もう一例，「英語→日本語」の例をあげる。この会話例も，NNSによる自己マークから開始され

ている意味交渉である。

会話例16　意味交渉での「英語→日本語」の失敗例

01	NNS-3:	日本の grass?
02	NS-2:	うん.
03	NNS-3:	Grass はとても緑です.
04	NS-2:	うん.
05	NNS-3:	モンゴルでは grass はちょっと: yellow? Yellow は何ですか.
06	NS-2:	茶色?
07	NNS-3:	あ, はい. ちょっと緑, じゃない.
08	NS-2:	緑じゃない. あんまり, 木とかないのかな? 木とか: お花とか.
09		あんまりないんだ.

この会話例は，NNS-3が「Yellow」を日本語で言えなかったため，「Yellowは何ですか」と自己マークにより質問をしている例である。NS-3は「茶色」と訳してしまっており，英語を正しい日本語に訳せていないというやりとりが見られた。このように，英語を用いた調整では，NSの英語力不足が原因で調整が失敗することもあった。

この会話で観察された調整は「英語→日本語」のみであったが，コミュニケーションに問題が生じた理由の一つには，NSがNNSのマークに対応しなかったことも影響していると考えられる。この会話では，1行目にNNS-3が「日本のgrass?」と上昇調で発話し，日本語の表現を引き出そうとしているようである。しかし，NS-2は「うん」と相槌のみで調整しておらず，NNS-3は「Grassはとても緑です」と，英単語のまま会話を進めている。その結果, NNS-3の「モンゴルのGrass（草）は緑じゃない」と表現したかった発話を，母語話者が「木や花がない」，つまり「自然が少ない」と捉えてしまっており，調整に失敗していた。このように，調整が行われないことで，その後会話で誤解が生じる恐れがあるため，NSからの積極的な意味交渉も必要なのではないかと考えられる。

このように，調整の失敗は，NS がNNSの日本語力を適切に評価できず，NNSが理解できる表現を提示できなかったり，NNSが何が理解できなかったのかが判断できなかったりした点や，NSの英語力の不足が原因であると考えられる。また，NSが積極的に意味交渉を行わないことによって，やりとりに問題が生じることも示唆された。

4.3.2　NSの発話が原因で生じた意味交渉での調整

4.3.2.1　調整の出現頻度と成否

次に，NSの発話が原因で生じた意味交渉，つまり，NSがNNSに情報を伝える必要がある場面の分析結果を報告する（**表6**）。この調整では「言い換え」が16回（単独9回，言い換え同士の組み合わせ1回，繰り返しとの組み合わせ6回），「繰り返し」が7回（単独1回，言い換えとの組み合わせ6回）と，NNSの発話原因で生じた調整と同様，「言い換え」が多く観察された。その中でも多く観察されたのは，NSが日本語で発話した内容を「日本語→英語」で言い換えようとした調整で，7回（単独3回，組み合わせ4回）観察された。次に多く見られたのが，「説明」の6回（単独4回，組み合わせ2回）であった。

成功率に注目すると，一番多く使用された「日本語→英語」は57％（成功4，失敗3）と低かった。「説明」は67％（成功）であった。

NSの発話が原因で生じた意味交渉は，ほとんどがNNS による他者マークで開始されており，NSによる自己マーク[4] はあまり観察されなかった。事前自己調整は19回とまとまった回数が見ら

表６　NSの発話が原因で生じた意味交渉での調整方法の頻度とその成否

上位カテゴリー	下位カテゴリー	NSによる自己マーク				NNSによる他者マーク				合計
		成功	失敗	不明	計	成功	失敗	不明	計	
言い換え	説明	-	1	-	1	1	1	1	3	4
	日本語→英語	-	-	-	-	1	2	-	3	3
	日本語→日本語	-	-	-	-	2	-	-	2	2
繰り返し	調整繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
言い換え＋言い換え	英語→日本語, 日本語→英語	1	-	-	1	-	-	-	-	1
言い換え＋繰り返し	説明, 繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	説明, 部分繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	日本語→英語, 調整繰り返し	-	-	-	-	1	-	-	1	1
	日本語→英語, 部分繰り返し	-	-	-	-	1	1	-	2	2
その他	--	1	-	-	1	-	-	-	-	1
	合計	2	1	0	3	9	4	1	14	17

れたことに鑑みると，NSは自身の発話に問題があると感じた場合は，マークを表示する前に調整を行っていたためなのではないかと考えられる。

4.3.2.2　成功率が高い調整方法

NSの発話が原因で生じた意味交渉は回数が少なく，傾向が観察できるほどではなかったが，「日本語→日本語」や日本語を使用した発話内容の「説明」などは比較的スムーズに成功していた。成功例として，「説明」の調整例をあげる。

会話例17　意味交渉での「説明」の成功例

01　NS-1:　へ:::. いいね: 多趣味だね.
02　NNS-1: (2) ん?
03　NS-1:　多趣味. (2) たくさん, 趣味があるね.
04　NNS-1: 私の?
05　NS-1:　うん
06　NNS-1: あ:::, ん::::, あ, ちょっと, ありません.

この会話では，NS-1の「多趣味」という語彙が理解できず，NNS-1が2秒程度の沈黙を置いた後「ん?」と他者マークをすることで意味交渉が開始されている。NS-1は一度「多趣味」と発話の一部を繰り返し，2秒程度間を置いてNNS-1の反応をうかがっているようだが，特に反応が得られなかったためか，「たくさん, 趣味があるね.」と「多趣味」の意味を説明している。

このように，NSの発話に問題に対してNNSが指摘をした場合，NSは相手の反応を観察しながら日本語を用いて言い換えたり，発話内容を説明したりしていた。しかし，NNSが何に不理解を示しているのかが把握できない場合は調整に失敗することもあった。その例として会話例18を示す。

会話例18　意味交渉での「説明」の失敗例

01	NS-1:	そっかそっか::. え:::, じゃあ日本の方が::学校に行くのはちょっと
02		楽かな? 電車があるから.
03	NNS-1:	(3) ん? もう一度¥お願いします¥.
04	NS-1:	えっとネパールで学校に通うより::, 日本で: 学校に通う方が::,
05		楽ですか?, どっちが楽かな.
06	NNS-1:	ら[く::なんです?　　[らくは,
07	NS-1:	[バスと（　　）[バスと::, ん?
08	NNS-1:	楽はなんですか.
09	NS-1:	楽は::, easy.
10	NNS-1:	あ:: あ::日本で::, あ:::, 楽?です.
11	NS-1:	じゃあ日本の方が楽か.
12	NNS-1:	はい::

まず，1-2行目でNS-1が「じゃあ日本の方が::学校に行くのはちょっと楽かな?」と，質問をしている。NNS-1は3行目でその質問が理解できず，聞き返している。NS-1は最初の質問では比較対象である「ネパールで学校に通う」がなかったため理解できなかったと想定し，1-2行目での質問の意味を文レベルで言い換え，どのような質問であったのかを説明している。しかしながら，NNS-1が理解できなかったのは「楽」という語彙であったため，説明による調整では発話の意味が理解できず，6行目でNNS-1が「楽」の意味を聞くことによって，さらに意味交渉を続けていた。最終的には，NS-1が9行目で「楽は::，easy.」と，「楽」の英語訳を提示することで相手に意図が伝わり，意味交渉が終結していた。

このように，NSがNNSが理解できない理由を的確に特定できない場合は，NSが的確に調整ができず，意味交渉を繰り返すことがあった。これは，NSがNNSの日本語能力を適切に把握できず，何が理解困難なのかを特定できなかったためだと考えられる。

4.3.2.3　成功率が低い調整方法

表6の通り，NSの発話が原因で生じた意味交渉は，組み合わせによる調整も含めると「日本語→英語」が6回と一番多く観察された。傾向が観察されるほど数は多くはないものの，6回中3回が失敗しており，失敗する可能性が高いことが予測される。

次の会話例は，NSの発した「トレーラー」というカタカナ語がNNSにすぐに理解されず，NNSによる他者マークをきっかけにNSが調整を行った例である。

会話例19　意味交渉での「日本語→英語」の失敗例

01	NNS-5:	次の学期は:, （　　ど）、【サークル名】を, 続, き, ますか?
02	NS-3:	ん::, 続けたいけど::, 続けたいけど:（笑）, 続けたい,ん:
03		続けるかな. ちょっと忙しい::, よね, やっぱり,【サークル名】
04		やってると, 忙しいですね. 今はトレーラー?
05	NNS-5:	ん？
06	NS-3:	Trailer?
07	NNS-5:	テイラー？
08	NS-3:	Trailer? For event?
09	NNS-5:	ん:::
10	NS-3:	そうそう, を作ってるから忙しい:.
11		ん::, でも, 楽しいから続けようかなって, 思ってる.

この会話例では，4行目のNS-3がイベントの広報用の動画，「トレーラー」を作っているということを伝えようとする発話がNNS-5に理解されず，これが問題のある発話となっている。NNS-5は，「ん?」という他者マークによって聞き返し，その発話に問題があることを表示して意味交渉が開始している。NS-3は英語の発音にシフトしてもう一度「Trailer?」と述べているが，それもうまく伝わらず調整が失敗している。NSはもう一度「Trailer?」を繰り返し，さらに「For event?」と文脈を追加することで，相手に発話を伝えられていた。6行目の調整では文脈もなく，自信がなさそうに小さな声で英単語のみを提示していたために，相手に伝わりにくかった可能性が考えられる。

このように，NSの発話が原因で意味交渉が生じた場合は，英語に頼った調整が行われることが多いが，成功率は低いことがわかった。

5. まとめと今後の課題

本研究では，東京国際大学で実施されているCP活動に焦点を当て，CP活動中にNSがどのように発話を調整しているのかに注目した。研究課題（1）「NSはやりとりに支障が生じる前に，どのように自分の発話を調整しているのか」という問いに対して，全体の頻度は多くないものの，「日本語→日本語」の調整が他の調整方法よりも多く見られ，成功率が高いことがわかった。NSはNNSからの不理解表明やミスコミュニケーションを事前に回避しようと「やさしい日本語」を用いて会話を進めようとする様子が観察された。ただし，本研究で分析対象とできたのは，一旦NSが述べた発話や言いかけた発話を言い直したもののみであった。NSが言い換えを行う前に，相手が理解しやすいように「やさしい日本語」が使えていたかどうかは判断が難しく分析対象とはできなかったため，本研究で分析対象としなかった発話でもNSが積極的に「やさしい日本語」を使っていた可能性が考えられる。

次に，研究課題（2）の「NSはやりとりに支障が生じた場合，どのように意味交渉を行い，調整しているのか」という問いに対して，本研究では，日本語教育の経験や知識がないNSも，多様な方法で調整を行うことがわかった。特に，NNSの発話に対するNSの調整では，NNSが断片的に発話しながら表現を探している際，NSが発話を「要約・完成」させるという調整が多く，成功率も高い傾向が見られた。一方，「英語→日本語」の言い換えによる調整も数は多かったものの，成功率はあまり高くなかった。これは，特にNNSが自分の発話に対して自己マークを行い，NSが調整をしようする場合に顕著に見られ，NSがNNSの英語の発話を日本語にする際に失敗する傾向にあった。また，NSの自己調整では，数は多くなかったものの日本語を用いた「説明」や「日本語→日本語」の調整は成功することが多かったが，英語を用いた調整では失敗する様子が多く見られた。NNSとの接触場面において，日本語教育経験のないNSも調整を積極的に行っていたが，その方法によって成功率が異なることがわかった。しかしながら，NSは一度調整に失敗しても，調整を再度行ってやりとりを進めようとする様子も頻繁に観察された。

以上のように，本研究では言い換えによる調整が多く見られたが，この結果は繰り返しによる調整が多く見られた大平（1999）とは異なる傾向であった。大平（1999）の調査では，本研究とは異なりNSとして日本語教育経験者が参加していたため，日本語教育経験や知識が影響した可能性が考えられる。日本語教育経験者は相手の理解を発話の繰り返しによって確認するが，本研究のCPのように日本語教育経験のないNSは言い換えによって別の語彙や表現でコミュニケーションを進める傾向があると考えられる。また，大平（1999）は繰り返しの成功率は高くなかったと

報告していることから，本研究では成功率が低い「繰り返し」による調整が避けられた可能性も考えられる。

また，本研究で特徴的だった点として，「英語→日本語」や「日本語→英語」の調整の成功率があまり高くなかった点もあげられる。本研究では，NNSが適切な日本語表現が言えなかった場合は英語を使用したり，NSにおいても英語単語を使用したりする傾向にあった。原因としては，まずNSの英語能力が高くはなかったことが考えられるが，それに加え，意味交渉において文脈を与えずに英単語のみを提示してしまうという方略上の問題も見られた。そもそも，調整に英語が多用された要因としては，本研究で調査対象としたNNSが全員，英語で学位を取得するプログラムに在籍している留学生で，英語が堪能であったことがあげられる。接触場面では，共通言語がある場合はそれを用いて意思疎通が行われるのは自然なことではある。実際，CP活動修了後に調査協力者のNSに実施したアンケートでは，英語の使用に関してCP 4名全員が「必要だ」と答えており，英語を重視していたことがわかった。その一方で，本研究の結果からは，NSの言語能力によっては単に他の言語で言い換えればすぐに調整が成功するわけではないことが示唆され，英語の使用については注意が必要であるといえる。

このアンケートからは，CPが英語を使用する重要性を感じていた一方で，「やさしい日本語」を意識しながらCP活動に従事していたこともうかがえた。CPが活動中に意識した話し方を尋ねたところ，「通じない言葉を別の言葉に言い換える」「一文を短くする」を4名全員が意識したと回答しており，「やさしい日本語」を使用しようとしていたことがわかった。CPへは，CP活動の事前研修として「やさしい日本語」についての知識や言い換えの練習を指導したが，実際のデータでも「日本語→日本語」の言い換えや，日本語による説明の成功率が高いことが観察されたことから，「やさしい日本語」がCP活動において役立ったといえるだろう。

このように「やさしい日本語」は有用だといえるが，本研究の結果からは事前自己調整では「やさしい日本語」が使用できていたものの，意味交渉が生じた場合は前述のように英語に頼る傾向も見られた。また，日本語を使用して調整をしようとした場合でも，NNSの日本語能力を的確に推測できず，調整した日本語発話が失敗に終わる様子も観察された。CPのアンケートの回答からは，「やさしい日本語にしようと心掛けていたが，なかなかクリアな日本語でお話しすることが難しかった。あとから意味を付け加えたり，文の構成をわかりやすくするために少し時間がかかったりしたことで留学生を混乱させてしまったかもしれないと感じた。」という記述が見られ，「やさしい日本語」の使用に困難さを感じていた様子が見られた。成功率の高さからは「やさしい日本語」を用いた調整を積極的に使用することが円滑なコミュニケーションにつながる可能性が考えられるが，それを容易に行うことができるようにするためには，「やさしい日本語」を用いた意味交渉の方法に関して，指導をしていく必要があると考えられる。

加えて，本研究のデータではNSがそもそも調整が行えていないこともあった。会話例16のように，一見会話がうまく進んでいるように見えても，それぞれが誤解に気づかないまま会話が進む様子も見られた。このように，調整が行われないことで，その後の会話で誤解が生じる可能性がある。誤解が生じたまま会話が進むことはNS同士の会話でも度々起こることであり，接触場面において必ずしも回避すべきこととは言い難い。しかし，NSが誤解に気づいた際には，自らこまめに理解確認を行うことで，CP活動という限られた時間内のコミュニケーションが円滑に進み，NNSに多くの発話機会を与えられるのではないだろうか。相手の発話を確認することが有用であることは，柳田（2010）でも指摘されていることから，それを解決するための指導が必要なのではないかと考えられる。

最後に，今後の課題について言及する。本研究で用いたデータは，NS 4名，NNS 6名，計6組の会話と限られており，CPの経験年数も統制することができなかった。多くの先行研究ではNNSとの接触経験が調整方法に影響することを指摘しているため，CPの継続年数よって調整の特徴が異なる可能性もあるのではないかと考えられる。本研究で得られた結果が一般化されうるものなのか，対象者の特徴を統制したうえでデータ収集を行い更なる検討をしたい。また，本研究のデータでは，一度調整が失敗したのち，異なる方法で調整を試みる様子が多く観察された。本研究ではそれぞれ別の調整として分類したが，その調整の展開も重要な要素であると考えられる。やりとりの流れを意識した分析も行いたい。

注

1）増井（2005）は，「コミュニケーション破綻を修復するために行われる談話レベルの調整（増井 2005：2)」のことを「修復的調整」と呼んでいる.
2）雷（2021）は「自己修復」とは，「トラブルの発話の話し手本人が修復を行うこと（雷2021：80)」としており，本研究の「自己調整」に合致するものである.
3）成功率は，調整が単独で用いられた場合と，複数が組み合わされて用いられた場合を合計して算出した．また，調整方法によっては出現した頻度が少なかったため，すべての調整方法についての成功率は記述せず，回数が多く見られたものの記述のみに留めた.
4）本研究ではほとんど観察されなかったため，具体例の記述はしていないが，NSの発話が原因で生じた意味交渉において，NSが自己マークを行うということは，自分の発話についてNNSの理解を明示的に確認した後，調整を行うものが該当する.

会話スクリプトの記号一覧

[	オーバーラップの開始部	(文字)	聞き取りが曖昧で確定できない発話
(数字)	沈黙の長さ	:, ::	直前の音の引き延ばし
.	下降調の抑制で発話	,	直前部分が継続を示す抑制で発話
?	直前部分が上昇調の抑制で発話	(笑い)	笑い声
¥文字¥	笑いながらの発話		

参考文献

庵　功雄（2009）「地域日本語教育と日本語教育文法：「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』3，126-141.
大平未央子（1999）「接触場面の質問-応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』3，67-85.
久保亜希・稲垣みどり・大住あかり・斉藤佑太朗・柴田　冴・髙野真理・横田賢司（2020）「『会話パートナー』の実践における日本人学生・留学生の学びの可能性」『2020年度日本語教育学会春季大会予稿集』432-437.
徳永あかね（2009）「多文化共生社会で期待される母語話者の日本語運用力――研究の動向と今後の課題について――」『神田外語大学紀要』21，111-129.
増井展子（2005）「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化――共生言語学習の視点から――」『筑波大学地域研究』25，1-17.
宮崎里司（1999）「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」森田良行教授古稀記念論文集刊行会（編）『日本語研究と日本語教育』明治書院，368-380.
村上かおり（1997）「日本語母語話者の『意味交渉』に非母語話者との接触経験が及ぼす影響――母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて――」『世界の日本語教育』7，137-155.

柳田直美（2009）「接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述――情報やりとりの発話カテゴリーの設定に向けて――」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24，51-68.

――――（2010）「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響――母語話者への日本語教育支援を目指して――」『日本語教育』145，13-24.

雷　雲恵（2021）「相互行為の参与者はどのように発話のトラブルに対処するか――接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着目して――」『言語文化研究科紀要』7，79-101.

McHoul, A. W. (1990). The Organization of Repair in Classroom Talk. *Language in Society*, 19(3), 349-377.

Schegloff, E., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53, 361-382.

執筆者紹介（掲載順）

植村清加	商学部	准教授	都市人類学・地域研究
田村愛理	商学部	名誉教授	歴史人類学・地域研究
村井美紀	元・人間社会学部	准教授	社会福祉学・児童福祉
高砂美樹	人間社会学部	教授	心理学史
名取洋典	医療創生大学	准教授	教育心理学
鈴木朋子	横浜国立大学	教授	臨床心理学・心理学史
瀬戸口勲	言語コミュニケーション学部	助教	中国語学
久保亜希	防衛大学校	准教授	教育学
篠崎佳恵	Japanese Language Institute (JLI)	日本語専任講師	日本語教育学
柴田冴	元Japanese Language Institute (JLI)	日本語専任講師	日本語応用言語学

編　集　後　記

第９号は，学術論文３本，研究ノート１本になりました。「人文・社会学研究」の名前に相応しい学祭的な内容になりました。

ご寄稿いただいた先生方，審査をご担当いただいた先生方，心より感謝を申し上げます。次号も論叢への投稿をお待ちしております。

（編集担当）

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第９号 2024（令和６）年３月20日発行

［非　売　品］

編　集　者　　東京国際大学人文・社会学研究論叢編集委員

発　行　者　　浅　野　善　治

発　行　所　　〒350-1197　埼玉県川越市的場北1-13-1
TEL　（０４９）２３２－１１１１
FAX　（０４９）２３２－４８２９

印　刷　所　　株式会社　東　京　プ　レ　ス
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18 3F

THE JOURNAL OF TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

Humanities and Sociology

No. 9

Articles

Forming "Self-Sufficient Places" in Ulaanbaatar:
A Case Study of Mongolian Young People from Children's Home … UEMURA, Sayaka
TAMURA, Airi
MURAI, Miki

Measuring the Working Memory of the Aged: An interview with
Mariko Osaka, the Developer of Japanese Reading Span Test …… TAKASUNA, Miki
NATORI, Hironori
SUZUKI, Tomoko

Vocabulary in the Chinese Language
— in Relation to Neologisms and Buzzwords — …… SETOGUCHI, Isao

Research Note

Conversational Adjustment Features of Japanese Native Speakers in Contact Situations
with Pre-Intermediate Japanese Language Learners: Cases of Interactions
during "Conversation Partner" Sessions …… KUBO, Aki
SHINOZAKI, Yoshie
SHIBATA, Sae

2 0 2 4